

---

# I S - インフィニット・ストラトス - ～闇の翼～

朱雀

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

IS・インフィニット・ストラトスⅠ 〈闇の翼〉

### 【Nコード】

N1478R

### 【作者名】

朱雀

### 【あらすじ】

IS通称ヘインフィニット・ストラトスⅠ

それは、女性にしか扱えない兵器。

その兵器を唯一扱える、少年、織斑 一夏ともう一人の、少年の物語。

## プロローグ（前書き）

初めまして！朱雀です。

今回は、IS・インフィニット・ストラトス……闇の翼々をお読みいただき、ありがとうございます。

文才は、無いですが、一生懸命頑張りまのでよろしくお願いします。

## プロローグ

（10年前）

とある組織の、研究施設の中で、警報が鳴り響く。

「早く、あのガキを止めろ。」

と、研究施設の研究員だろうか、何故か焦っている。  
そして、研究員の後ろから声が聞こえた。

「見つけた…逃がさない。」

と、少年が言った。

少年は、血塗れで、2本の刀を、持っていた。年は、小学校1年生か、2年生ぐらいだろう。そして、少年の右が黒眼で、左が紅眼をしていた。

「やっやめてくれ」

と、研究員は言った。

「嫌だ。父さんが、僕にやった事、忘れてないよね？」

少年が、言うには、研究員は少年の、父親のようだ。

「やめてくれ蓮、私は、お前の親なのたぞ！親の言うことを聞け！」  
と、蓮と名の少年の父親は、脅えながら言った。

「へー子供って、親の言うことを聞かないと、いけないのか。でも、

殺したら…意味ないよね？」

と、言って右手に持っていた刀で、その研究員を左肩から、右股関節付近まで、切り裂き、切り傷から、血が吹き出した。

「後は、ISを持って行こうか。」

そう言って、少年は、ISに乗って、姿を消した。

その姿は、まるで、悪魔のような姿だった。

## 人物紹介及びI S紹介（前書き）

まずは主人と専用I Sを紹介します。

## 人物紹介及びI S紹介

名前 西城 蓮

身長 169?

体重 53?

年齢 15歳

趣味 剣術の稽古

イメージキャラクター ヒイロ・ユイ（新機動戦記ガンダムW）

好きな事 I Sの整備

食べ物 和食

嫌いな人 研究員・人を見下す奴

食べ物 特になし

専用I S「ダークネスウイング・ゼロ」

装備品 眼帯（左目） 首飾り ブレスレット（リミッター）

左目は本当は見えているが、人体改造の影響で目の色が違うことで、小学校の時虐められたため眼帯を着けた。

蓮が本気でキレた時と、本気になった時に、眼帯を外す。

リミッターは蓮の異常な身体能力を抑えるため、転入前に千冬に渡された。形状はブレスレットの周りに、4枚の花びらのようなものが付いてあり、1つ外すたびに身体能力の1／5戻る。

千冬には「許可なく外したらどうなるか、分かっているな？」と言われたらしい。

13年前に、両親が離婚し父親に引き取られた。

3年間の間研究施設で、体を改造されたためI Sに乗れるようになった。

20000体の試験体と戦わされ20000体をすべて殺した。

それから時が過ぎ、研究施設の人間を殺し、I Sを奪い姿を消した。

蓮が施設をから、出て10年後自分の体を改造した、復讐するためと、二度と自分と同じものが、現れないようにするために亡国企業と戦う。

ちなみに、一夏と箒は小学校の時の知り合い。

## IS 紹介

機体名「ダークネスウイング・ゼロ」

機体イメージ ウイングガンダム ゼロ（新機動戦記ガンダムW）

機体カラー 黒

待機状態 首飾り

元はダークネスウイングで、篠ノ之 束による強化と蓮が作った、ゼロシステムを搭載する事により機体のスペックが、他の機体よりはるかに高く、蓮以外に誰も扱えない。

ゼロシステムは、蓮が作ったシステムで、一定時間（3分）の間ダークネスのスペックがあがる。

第一解放で、スペックの1.5倍

第二解放で、2倍

そして完全解放で、5倍になる。

その代わり、体への負担が大きく使用後血を吐く。武装  
刀×2

風雷式・風殺式

ビームサーベル（刀の予備）

ツインバスターライフ

ワンオフアビリティ

『バーストモード』



性能 エネルギーを1まで、消費し4分間ISの機動力と武器の威力を、5倍にする。

ゼロシステムと一緒に使うと、3分後に強制待機状態になる。

さらに機体とパイロットに負担が大きすぎて、第一解放は機体は、

3日間起動不可能、パイロットは、4日間絶対安静の状態になり。

第二解放は機体は、4日間起動不可能、パイロットは、5日間絶対安静の状態なる。

そして、完全解放は、機体は、7日間起動不可能、パイロットは、10日間絶対安静になる。（シュミレートでの、結果）

## 1話 転入

〈蓮SIDE〉

IS学園校門前

「着いたか」

少年はIS学園の校門前にいる。

「ここが…IS学園」

少年は校舎を見て言った。

「久しぶりだな蓮」

と女性は言った。

「久しぶりです千冬さん、いや今は織斑先生でしたね。」

と蓮も千冬に挨拶をした。

「こうして話すのは6年ぶりですね。」

蓮は思い出しながら言った。

「そのぐらい程か…蓮、なぜいなくなった？」

千冬は蓮に聞いた。

「先生は知ってるでしょ？6年前俺のせいで、いくつもの町が潰された、だから出ていきました。」

蓮は、右手を強く握った。

6年前：蓮を捕獲するために亡国企業が、町を潰し始めたあの日、蓮はこの町の事を考え、千冬達の前から姿を消した日、それから2年後には、亡国企業の町への攻撃は無くなった。

しかし蓮は町に戻らなかった。なぜなら亡国企業と、戦っていたそして、篠ノ之 束に出会い、束の提案でIS学園に転入した。

「過ぎた事だ、お前が気に病む事はない。そろそろHRが始まる、行くぞ。」

と千冬が言うと、教室に向かった。

「それと、在学中はこれを着けておけ。」

と千冬は蓮にブレスレットを渡した。

「何ですか？これ」

ブレスレットは黒く、その周りには4枚の花びらのようなものが付いていた。

「それは、お前の異常な身体能力を抑えるための物だ、1つにつき1／5になっている。それと…」

千冬はリミッターの説明を一通り終わると、鋭い目付きで蓮を見る。

「そっそれと…何ですか？」

蓮はあまりにも、恐ろしくて体が震えている。

「許可なく外したら、どうなるか分かっているな？」

と千冬が言うと、蓮は。

「りよっ、了解。」

と蓮は震えながら、敬礼しリモッターを右腕につけた。

ちなみにリモッターをつけた瞬間、体が少し重く感じたのは心の中にしまった。

「私が呼んでから、入るように。」

「了解。」

と言うと千冬は教室に入って行った。

どうやら教室では、HRが始まったようだ。

「HRが終わる前に伝えておく、今日は、転入生が来ている、入ってこい」

「さて先生に呼ばれたし、行くとするか」

＼蓮SIDE OUT＼

＼一夏SIDE＼

「今日は、転入生が来ている」



達に会ったからだ！

「蓮よかった、やっと会えた、6年間何してたんだよ」

「……に、……な……」

「？何か言ったか？」

「お前に、関係ないと言っている。」

「どういうことだ？あいつに何があったんだ？」

「そこの2人、授業を始めめる、さっさと座れ」

と言われた、俺と蓮は、席に着いた。

（あいつどうしたんだ？あの時から、何があったんだ？）

（一夏SIDE OUT）

## 2話 クラス対抗戦

〈蓮SIDE〉

蓮の自己紹介が終わり今は、千冬の授業を受けている。

「ではこれよりISの飛行操縦を実践してもらう。織斑、オルコツト、そして西城。試しに飛んでみせろ」

「先生西城君専用機ないんじゃない？」

まあ誰も蓮の専用機を見ていないので当然の反応だが。

「西城は専用機持ちだ」

と言うと周りが騒ついた。

「え？ 西城君、それって本当!？」

「てか一年、しかも代表候補生でもないのに専用機持ち!？」

と騒めく。

「静かにしろ。早く熟練したIS操縦者は1秒とかからないぞ」

とせかされた。

セシリアを見るとすでにブルー・ティアーズを展開していた。

「了解。行くぞ、ゼロ」

と蓮はゼロを呼び出した。

「よし、飛べ」

そして蓮たちは飛んだ。

スペック上の出力ではゼロ、白式、ブルー・ティアーズの順番で飛んでいるはずなのだが、白式はブルー・ティアーズの後ろを飛んでいた。

一夏が言うには千冬におしかり言葉を受けたいらしい。

「急降下と完全停止をやって見せろ。目標は地表から十センチ、西城のみ一センチだ。順番は西城、オルコット、織斑だ」

「了解」

そして蓮は一気に急降下、地表一ミリメートルの所で完全に停止した。

おおー、と女子から歓声上がり、千冬も珍しく賞賛の言葉を言う。

「やるな西城。流石に地表一ミリメートルで止まるなんて芸当、出来るとは思わなかったぞ」

「ありがとうございます」

蓮は賞賛の言葉に軽く頭を下げ、上空に浮かんでいる一夏とセシリアを見上げた。

次に降りてきたセシリアは地表十二センチの所で完全停止、それなりの評価を受けた。

だが、次の一夏は…。

ギョーンッ！！ ……………バシン！！

「…お前、投身自殺でもする気なのか？」

「…返す言葉も無いな」



その後一夏はまた千冬におしかりの言葉を受けた。

「それでは織斑、オルコット、西城、武器の展開をやってみろ」

千冬の指示に従って3人はそれぞれの手に雪片式型とスターライトmk？そしてバスターライフルを展開する。日頃の訓練の御陰で一夏の展開はそれなりに速くなっているが、やはり一日の長がある代表候補生、セシリアやなぜか蓮も早い

「オルコット、西城、近接用の武器を展開しろ」

「え？ は、はい」

「了解」

いきなり話を振られ、驚きながらもセシリアはスターライトmk？を光の粒子に変換して、新たに近接用の武器を展開させる。が、中々武器のイメージが像を結ばないのか、粒子はセシリアの手の中でダンスを踊っていた。

それに対して蓮はすぐに展開した。

それからセシリアは一度深呼吸、意識を集中させ、今度こそ武器を構成した。

「・・・何秒かかっているんだお前は？ 実戦では良いのだぞ」

「じ、実戦では相手を近距離の間合いに入らせないので、問題ありませんわ！」

「ほう。織斑との対戦で初心者に簡単に懷を許していたように見え

たが？」

「あ、あれは・・・」

何やらごによごによ言っているが、千冬の言うことが正論のため何も言い返せない。

その原因である一夏はと言うと、少しだけ申し訳なさそうな顔をしていた。

そしてなぜか、突然ハンカチを取りだして噛み締めたセシリアの頭に、千冬の出席名簿アタックが炸裂したのは言うまでもない。

＜連SIDE OUT＞

＜???SIDE＞

「ふうん、ここがそうなんだ・・・」

IS学園ゲート前。小柄な身体の少女が、その身に似つかわしくな  
い大きなポストンバックを肩から提げて立っていた。左右それぞれ  
に高い位置で結んでいる髪を夜風に揺らせながら、少女はくしゃく  
しゃの紙を上着のポケットから取り出す。

「本校舎一階総合事務受付・・・どこにあんのよ？」

ぶつくさ言いながら、取り敢ず少女は足を動かす。

ここで悶々悩んでいるよりも自分で探した方が速いと判断したのだ。  
結果、

「もっと迷っちゃった・・・」

宛てもなく歩き回っている内に本気で迷子になってしまった少女。

キヨロキヨロと周囲を見回してみるが、一度も来たことがない場所なので目印など見つからない。

「はぁ……。ま、いつか。こんだけ奥に来れば誰か一人くらい通り過ぎるでしょ。その時案内してもらおう」

少女はボストンバックを床の上に置き、その上にちょこんと腰を下ろした。

（そう言えばあいつ、元気かな）

ふと、そんな考えが胸中を過ぎった。

あいつとは、世界初の男性IS操縦者として全世界に報道された黒髪の青年のことである。

数十分後に総合事務受付は見つかった。

「ええと、これで手続きは全て終了です。IS学園へようこそ、<sup>ファ</sup>鳳<sup>ン・リンイン</sup>鈴音さん」

少女、鈴音は受付嬢の笑みを無視し、受付に身を乗り出すように身体を乗せた。

「あの、織斑　一夏って何組ですか？」

「ああ、あの噂の子？　一組ね。鳳さんは二組だからお隣さんね。そう言えば、あの子1組のクラス代表になったらいいわね」

そんな噂に興味はない、とでも言いたげな表情で鈴音は質問を続ける。

「二組のクラス代表って決まってるんですか？」

「決まってるけど・・・聞いてどうするつもり？」

受付嬢の問いかけに鈴音は薄い笑みを浮かべた。

その額にしっかりと血管を浮かび上がらせて。

「お願いしようと思って。代表を譲ってって・・・」

（鈴音SIDE OUT）蓮SIDE）

昨日原作では一夏のクラス代表就任パーティーが行われていたが、蓮は来ていなかった。

理由は稽古をするためである。

一夏が言うには今後パーティーで蓮を強制につれてく作戦ができたらしい。

そして今はHR前。

「ねえ、転校生の噂聞いた？」

「転校生？今の時期にか？」

ちなみにIS学園は、試験はもちろん、国の推薦がないとできないらしい。

「そう、なんでも中国の代表候補生なんだってさ」

（そういえば来月にクラス対抗戦があったな）

クラス対抗戦とは本格的なISの学習が始まる前の、スタート時点での実力指標を作るためらしい。

ちなみに、1位クラスには優勝賞品が出るらしい。

「今のところ専用機を持っているクラス代表って1組と4組だけだから、余裕だよ」

「その情報、古いよ」

声が聞こえたところを見ると1人の少女がいた。

「2組も専用機持ちがクラス代表になったの。そう簡単には優勝できないから」

少女は腕を組み、片膝を立ててドアにもたれていた。

「鈴……？ お前、鈴か？」

どうやら一夏の知り合いらしい。

「そうよ。中国代表候補生、凰 鈴音。今日は宣戦布告に来たってわけ」

バシンッ！突然鈴に激痛が走った。

「もうHRの時間だ。教室に戻れ」

そして鈴は教室に戻った。その後昼から夜まで一夏に何があったか知らない。

翌日、生徒玄関前廊下に大きく張り出された紙があった。表題は、『クラス対抗戦日程表』。

1回戦の相手は…鈴だった。

「試合当日」

蓮、箒、セシリアはピットのリアルタイムモニターで試合を見てい

た。

状況は『甲龍』の衝撃砲に苦戦していた。

「どうしたのだ蓮？」

いや、と蓮は箒に首を振ってみせる。

「なんか朝から嫌な予感がする」

突然大きな衝撃が走った。モニターの中ではステージの中央から黒煙が立ち上り、アリーナ天井の遮断シールドに大きく亀裂が入っているのが分かる。

「チィッ嫌な予感ってのは往々にして当たりやがる」

蓮はパニックになりかけている生徒達を掻き分け、アリーナに向けて走り始めた。

数分後

「織斑先生！出撃命令と第二アリーナの遮断シールドの一部破壊の許可をください」

蓮からピットに通信がきた。

「……やれるのか？」

「俺とゼロなら」

静かな千冬の問いに、蓮は即答した。

長い沈黙、実際は数秒の後、千冬は身体ごと視線をモニターに向け

た。

「……西城 蓮にIS使用許可を与える。観客と織斑、鳳の保護を最優先させろ」

「了解」

そして通信を切った。

「行くぞ、ゼロ」

蓮は胸の前でバスターライフルを連結させツインバスターライフルになった。

「ターゲット：ロックオン」そしてゼロのツインバスターライフルが放たれた。

＼蓮SIDE OUT＼

＼一夏SIDE＼

二人で連携して、どうにか一夏が相手の懷に飛び込めるのだが、敵ISのスラスターの出力が尋常じゃなく、雪片を当てる前に回避されてしまうのだ。

白式のエネルギーは後三分の一、甲龍のエネルギーは二分の一。焦るなど言う方が無理だ。

「一夏っ、次は当てなさいよ!」

「わかってる」

5目となるトライ。鈴音が衝撃砲で敵ISを砲撃、その間に一夏がイグニッション・ブーストで敵ISに近づき、零落白夜で斬る。作戦はいたってシンプルその物。

だが、その中で最も大切な決定打が欠けている。

「くそっ!!」

雪片を避けられ、一夏は悪態をつきながら後退する。今までなら、ここで敵ISは一夏を攻撃してきた筈だ。

一夏はそうなると思っていたし、鈴音もまたそうなることを予想して、一夏の援護に集中していた。

が、敵ISは一夏ではなく、鈴音の方に両腕のビーム砲口を計4門を向けた。

「「え?」」

二人の口から間拔けな声が漏れる。その声が引き金だったかのように、敵ISはビームを放とうとした時大きな光りが通った。

しかし敵ISは避けた。

そして黒いISが一夏たちの前に立った。(一夏SIDE OUT)



### 3話 激闘 蓮VS敵IS

（蓮SIDE）

ツインバスターライフルを放ち遮断シールドの一部破壊し蓮は、第二アリーナに入った。

「凰 鈴音、一夏、ピットに戻れ！こいつは…俺がやる」

ツインバスターライフルは光の粒子になり、2本の刀へと形を変えた。

「どうしてだ！俺はまだ戦える」

「そうよ！私も戦えるわよ」

一夏と鈴は蓮に言い返した。

「お前たちがいたら足手まといになる。死にたくなければさっさと行け！」

と殺気を放ちながら言った。

「わかったよ。戻るぞ鈴」

「え？ あ、う、うん…分かった」

「蓮……負けるなよ」

「ふん、誰に言っている。お前もさっさと行け」一夏と鈴はピットに戻った。

「織斑先生、あれどうします？破壊し良いですか？」

『可能ならば捕獲を試みてくれ。無理なら破壊して構わない』

「了解。敵I Sを戦闘不能にする…行くぞ、ゼロ」

千冬の命令を受け戦闘態勢に入った。

が蓮は不思議に思った。

（何であいつ話している時攻撃しないんだ？それにI Sから人の気配が感じられない。なぜだ？まさか…）

そして敵I Sが攻撃してきた。

「まあ、無人機なら…」

蓮はその攻撃を避け、瞬時加速で一気に距離をつめた。

「おもいつきりやれる！」

そして右手の風殺で敵I Sの左腕を切り落とした。

「もう一発」

続けて左手の風雷で切り掛かったが、敵I Sが後ろに飛び退いてその斬撃を避けた。

「チイツ、やけに動きが速い……けど」

再び距離をつめ風殺で切り掛かった。

「その程度で勝てると思うな！」

風殺は敵ISの頭部から右足まで切り込んだが切る瞬間に後ろに飛び退かれ切り裂けなかったが、機能中枢を切っていた。そして敵ISは機能停止した。

「終わったか……」

『まだです所属不明機が2機接近中、接触予定時間は2分後です』

「敵ISの情報は？」

『接触予定時間50秒前までにはわかります』

『西城、アリーナ外でのISの使用を許可する。先生たちが来るまで足止めするか、撃退しろ』

「了解……ダークネスウィング・ゼロ 行きます！」

そして遮断シールドが解除され、第二アリーナ上空でツインバスターライフルの発射態勢でいた。

「近接格闘型ISエクシア、重砲撃型ISヴァーチェ、しかも遠隔操作か」

蓮は2つのデータを見て言った。

そして接触予定時間30秒前2機の姿がうつすら見えだした。  
2機は後方に光りの粒子を放出していた。

「ターゲットロックオン」

ツインバスターライフルを放ったが、

「なっ、」

ヴァーチェがゼロの放ったツインバスターライフルを高圧の光りの粒子を全面に展開して受けとめた。そしてヴァーチェの後ろからエクシアが飛び出し、2本のブレードで切り掛かった。

「チィッ」

蓮はすぐにツインバスターライフルから風殺と風雷に変えて、エクシアの斬撃を受けとめ、つばぜり合いになった。

「初めまして 西城 蓮」

声からしてエクシアのパイロットは女ようだ。

「何者だ？なぜ俺の名を知っている？」

「私の名はアリア、ファントムタスクって言えばわかるでしょ？」

「！」

蓮は2本のブレードをはねのけ一度距離をとった。

「何が目的だ？」

「目的は織斑　一夏の捕獲そして可能な場合西城　蓮の抹殺よ」

「そうか……なら」蓮はエクシアに切り掛かかりつばぜり合いになった。

「お前たちはここで消えろ」

そしてヴァーチェがエクシアの下からビームバズーカを放った。

「チィッ」

蓮はエクシアを押し退けヴァーチェの砲撃を避けた。

「あれを何度も使わせるわけにはいかないな」

それから風雷をバスターライフルに変えて再び切り掛かった。

「単純ね」

「そうか？」

蓮はつばぜり合いの状態で左手の、バスターライフルの銃口をエクシアに向けた。

「こんだけ近かったら邪魔されないよな？」

そしてバスターライフルを放った。がしかし

「消えた……」

そこにエクシアの姿がなかった。

「どこに？」

「ここよ」

「！」エクシアは蓮の後ろにいた。

そしてエクシアの姿は赤くなっていた。

「それがその機体のワンオフアビリティか？」

「そうよ、これがエクシアのワンオフアビリティ、モード・トランザム」

モード・トランザムとは、一定時間（5分間）スペックの3倍になる。

ただし5分後機体性能が極端に落ちる。

「アリス、織斑 一夏を捕獲して」

「分かった」

ヴァーチェは第二アリーナに向かった。

「待て！」

「あなたの相手は私よ！」

「邪魔を……するな！」

蓮はエクシアと戦闘を続けるが、蓮が押され出した。

「このままじゃやられる、だったら」

蓮は左目の眼帯を外しそして左目を開いた。

そしてその目は赤く輝いた。

「行くぞ、ゼロ……バーストモード！」

＼蓮SIDE OUT＼

＼一夏SIDE＼

一夏達は今ピットのリアルタイムモニターで蓮と2機の所属不明機との戦闘を見ている。

そしてエクシアがモード・トランザムを使用し蓮が押され出した。

「千冬姉俺も行かせてくれ」

バシンッ！一夏は千冬の打撃を受けた。

「織斑先生と呼べ、それにお前がいても足手まといになる、それにあと5分で先生たちが来る」

そして蓮が左目の眼帯を外した。

「（あいつ本気になったな……）織斑、篠ノ之、オルコット、凰、見ておけ西城の本気を」

「「「「？」」」」」

一夏達は千冬の言った事がわからなかった。

「！一夏さんあれを」

セシリアが何かきずいた。

「あれは……」

一夏は驚いた蓮の左目が赤く輝いていた。

一夏があの子を見るのは10年ぶりだった。

10年前蓮の左目は赤く輝いていたそれはガラスのように、はじめは珍しがられたがいつしか虐められるようになった、それから蓮は左目に眼帯を付けたのだった。

そして蓮は赤いオーラをまとった。

「織斑先生あれは？」

一夏が聞く。

「あれはダークネスウィング・ゼロのワンオフアビリティ バーストモードだ」

「「「バーストモード？」」「」」

「バーストモードはエネルギーを1まで消費し一定時間機動力と武装の威力を5倍にする能力だ」

千冬は一夏達にバーストモードの説明をした。



「って、シールドエネルギー残量が1だなんて発動中はもとより、一定時間後は危険でしてよ！」

「安心しろあいつはそう簡単に負けない」

「ですが！」

セシリアは何か言いたかったが千冬に睨まれ止めた。

「蓮……」

一夏達は蓮が勝つことを祈る事しか出来なかった。

く一夏SIDE OUTくく蓮SIDEく

「さようなら」

エクシアが蓮を切り裂いた瞬間

「え？」

アリアの前から蓮が消えた。

「どうした？俺はここだぞ」

「！」

蓮はエクシアから5mほど上に立っていた。

「瞬時加速…なのですか？」

「いや、さっきのは瞬時加速ではない」

そしてエクシアの懷に飛び込み2本のブレードをたたき落とした。

「まだよ」

そしてエクシアはビームサーベルを取り出し、蓮を切り裂いた。

「どこを見ている？」

「！」

蓮はエクシアの5m後ろに立っていた。

「そ、そんな…確かに手応えはあったのになぜ？」

「それが質量を持った残像だ」「ならさっきのは？」

「瞬時加速を使った…さようなら」

蓮はバスターライフルでエクシアを破壊した。

そしてヴァーチェは第二アリーナの遮断シールドを破壊し第二アリーナに侵入した。

「チイツ、行かせるか！」

蓮はヴァーチェが破壊したところを通り第二アリーナにはいった。

「次は…お前だ！」

（あと3分か）

そしてヴァーチェの懷に飛び込み左肩のキャノンを破壊した。

「速いわね…けど」

ヴァーチェは後ろに飛び退きそれと同時に、右肩のキャノンを放った。

「ふん、その程度でやれると思うな！」

瞬時加速で一氣に距離をつめ両腕と下半身を切り裂き、ヴァーチェは上半身を残し倒れていた。

「……終わった」

と思ったその時。

「まだよ……まだ終わってないわ」

そしてヴァーチェは右肩のキャノンを放つ。

「チィッ」

それと同時に蓮はビームサーベルを取り出し、ヴァーチェに向けて投げたが、ヴァーチェの砲撃に直撃した。

「2時間後」

「う……………?」

全身に痛みを感じ蓮は目覚めた。

「気がついたか」

「ええ、まあ最悪な目覚めです」

周りを見るとどうやら保健室のようだ。  
窓を見ると夕方になっていた。

「先生あれから何があったのですか？」

千冬は呆れながら事の流れたを話した。

「つまりお前は敵の砲撃に直撃した、まあ直撃してよく生きてたものだ」

「じゃああのISはどうなったのですか？」

「ビームサーベルが直撃し完璧に停止した」

「そうですか」

「それであいつらは何者だ？」

蓮は千冬に敵との会話の内容を話した。

「おそらく、これからも一夏を狙って来ると思います」

「そうか解った、私は仕事に戻る。少し休んだら部屋に戻っていい

ぞ  
」

そして千冬は保健室をあとにした。

「さて、部屋に戻るか」

そして蓮は保健室を出て部屋に戻った。

#### 4話 新たな転人生 貴公子と軍人と……あんた誰？

「翌日、」

あの騒動から翌日、クラス対抗戦は無効になった。  
そして今は、H Rが始まっている。

「ええとですね、今日はなんと転校生を紹介します！しかも3人で  
す」

女子が騒ぐなか、転校生が教室に入った。

「失礼します」

「失礼します」

「……………」

転校生を見て女子は静かになった。  
なぜならそのうち1人が…男だからだ。

「フランスから来たシャルル・デュノアです。この国では不慣れが  
ことが多くてご迷惑をお掛けするかもしれませんが、皆さんよろし  
くお願いします」

金髪の美少年、シャルル・デュノアはにこやかに微笑みながら、一  
礼した。

「お、男？」

と誰かが言った。

「はい。こちらに僕と似た境遇の人が二人いると聞いて本国から・・」

シャルルが何やら丁寧に説明し始めた。

「き………」

「き？」

(やべえ)

蓮が咄嗟に、耳栓を付けた。

それから0.5秒後。

「「「「「きゃあー」」」」」

突如教室に響く黄色い声。耳栓を付けても、頭に響く威力に、一夏と筈は気絶意識がもうろうとした。

「男子！ 三人目の男子！」

「しかもこのクラス！」

「二人と違って守ってあげたくなる！」

「地球に生まれて・・・よかったあゝ！！！！」

蓮はなぜこんなに騒げるのか、わからなかった。

「あー、騒ぐな。静かにしろ」「み、皆さんお静かに。まだ自己紹介がまだ終わってませんからー!」

「初めまして、アリア・エルシアです。よろしくお願いします」

黒髪の美少女アリアは一礼した。

「「「……………」」」」

一時的に静かになる教室そして、

「「「きゃあーーーーー」」」」

再び黄色い声が教室に響く。

「何あの人、すごく綺麗」

など色々言っていた。

「騒ぐな。と言ったはずだが小娘ども」

そして、千冬に鎮圧された。

蓮が言うには、「阿修羅が見えた」だそうだ。

「……………」

そしてもう人は口を開かず、腕組みをした状態でいた。

「…………挨拶をしろ、ラウラ」



「はい、教官」

素直に返事をし、千冬に敬礼をした。

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のことは織斑先生と呼べ」

「了解しました」そしてラウラはぴっと伸ばした手を体の真横につけ、足をかかとで合わせて合わせて背筋を伸ばしている。  
どうみても軍人だろと思わせる感じだった。  
そして挨拶をした。

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「……………」

クラスメイトたちの沈黙。

そして自己紹介をした後口を閉ざしてしまった。

「あ、あの、以上……………ですか？」

「以上だ」

山田先生が出来る限りの笑顔でラウラに訊くが、返ってきたのは無慈悲な即答になきそうになった。  
そして一夏に目があった。

「！貴様が……………」

そして一夏に歩み寄り、

バシンッ

「何の真似だ？」

ラウラは一夏の頬に振り切る寸前に、平手を押さえた蓮を睨んだ。

「初対面相手に平手を食らわすのが、ドイツの挨拶か？」

ラウラの腕を握る蓮の手に力が入り、痛みに顔を歪んだ時、千冬が止めに入った。

「そのくらいしろ、西城」

「了解」

そして、ラウラの腕を放した。

「西城……貴様が西城　蓮か？」

「俺にドイツ人の知り合いはいないが」

「西城　蓮、織斑　一夏。私は認めない。貴様等の存在など、認めるものか」

「はあ？」

「下らん」

いきなり向けられた敵意に一夏は啞然し、蓮はラウラを睨みそしてラウラは、空いている席に座り腕を組んで目を閉じた。

「あー……ゴホンゴホン！ではHRを終わる。各人すぐに着替えて第二アリーナに集合。今日は2組と合同でIS模擬戦闘を行う。解散！」

そして朝のHRが終わった。

「織斑、西城、お前達でデュノアの面倒を見ろ良いな」

「了解」

「君が、織斑君と西城君？僕は…」

「自己紹介は後だ、行くぞ」

「オッケー」

蓮はシャルルの手を取って教室を出た。

「とりあえず男子は空いているアリーナの更衣室で着替え。これから実習のたびにこの移動だから、早めに慣れてくれ」

「う、うん」

そして階段を下って1階へ。速度を変えず移動していた。

「ああっ！ 転入生発見！」

「しかも織斑君達と一緒に！」

「者ども出会い出会い！」

「きあああっ！見て見て！西城君と転校生！手！手繋いでる！」

「な、なに？何でみんな騒いでいるの？」

状況が飲み込めないのか、シャルルは困惑顔で聞いてくる。

「そりゃ男子が俺たちだけだからだろ」

一夏が歩きながら言う。

「……………？」

シャルルは後ろで「意味がわからない」と言う顔をしていた。

次は蓮が言う。

「ただ男がISを使えるのが珍しいからだ」

「あっ！…………ああ、うん。そうだね」

今度は一夏が言う。

「それとアレだ。この学園の女子って男子と極端に接触が少ないから、ウーパールーパー状態なんだよ」

「ウー……何？」

「二十世紀の珍獣。昔日本で流行ったんだと」

「ふうん」

「ま、何にしてもこれからよろしくな。俺は織斑　一夏。一夏って呼んでくれ」

「西城　蓮だ。蓮でいい」

「うん。よろしく一夏、蓮。僕のことシャルルでいいよ」

「わかった、シャルル」

そしてどうにか群衆に捕まる前に校舎を出ることができた。

「よし、到着！」

「うわ！時間ヤバイナ！すぐに着替えちまおうぜ」

一夏は、制服のボタンを一気に外し、Tシャツを脱ぎ捨てた。

「わあっ!?!」

叫んだのはシャルルだった。

「?」

「荷物でも忘れたのか? って、なんで着替ええないんだ? 早く着替えないと遅れるぞ。シャルルは知らないかもしれないが、うちの担任はそりゃあ時間にうるさい人で……」

「う、うん?? 着替えるよ? でも、その、あっち向いてて………  
ね? 二人共」

蓮と一夏は不思議に思った。

「???? いやまあ、別に着替えをジロジロ見る気はないが……って、シャルルはジロジロ見てるな」

「み、見てない! 別に見てないよ!??」

両手を突き出し、慌てて顔を床に向けるシャルル。

「まあ、本当に急げよ。初日から遅刻とかシャレにならないーというか、あの人はシャレにしてくれんぞ」

(確かにあの人は時間に五月蠅など) と蓮は思った。

そして何故か、視線を感じていた。

「シャルル?」

「な、何かな!」

蓮は気になって視線を向けると、シャルルはこっちにちょっと向いていた顔を慌てて壁の方にやって、ISスーツのジッパーをあげた。そして一夏が聞く。

「うわ、シャルルも蓮も着替えるの超早いな。なんかコツでもあんなのか?」

「無い」

蓮は、静かに答えた。

「い、いや別に・・・って一夏まだ着ていないの？」

一夏は、ズボンと下着を脱いでI Sスーツを腰まで通したところで止まっている。

「これ、着るときに裸っていうのがなんか着づらいだよなあ。引っかけって」「ひ、引っかけって？」

「おう」

「……………」

蓮は、何であの時顔を赤くしていたのか考えていた。

「よっ、と。ーっーよし、行こうぜ」

「う、うん」

3人は着替え終わってグラウンドに向かった。

「授業中」

鈴とセシリアが遅刻した原因を聞かれ、話しているところを千冬に見つかり、

「安心しろ。私の前にバカは2人いる」と言われ出席簿アタックを受けた。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「「「「「はい!」「」「」「」」

「今日は戦闘を実演して貰おう。幸い、若さを爆発してる馬鹿者共がいるようだから……オルコット! 鳳!」

「な、何故私!?!」

完全なとぼっちりだ。がつくりと肩を落とすセシリア。

「専用機持ちはすぐに始められるからな。文句はやった後で言え」

「だから何故私……」

「一夏の所為なのに……」2人ともやる気が無かった。

「やる気を出せお前等。あいつに良い所を見せる良い機会だぞ?」

「やはり! ここはイギリス代表候補生であるこの私が!」

「専用機持ちの実力、見せたげるわ!!」

千冬が何かを囁いた瞬間、二人の態度がコロッと変わった。一瞬でやる気をマックスに上昇させた二人に皆驚きを隠せない。

「で、誰と闘えばよろしいのでしょうか?」

「何時でもやれるわよ」

「慌てるな。お前等の相手は」



その時、何かが突っ込んできた。

「あああーっ！ ど、どいてくださーい！！」

何かと思ひ上を見ると、誰かが蓮と一夏に突っ込んできた。

蓮はすでに逃げれたがしかし、一夏は逃げきれなかった。

ドカーン！

一夏は突進を受け、数メートル吹っ飛びゴロゴロと地面を転がった。

「ふう……。白式の展開がギリギリ間に合ったな。しかし一体……」

そして、一夏は山田先生の胸を触っていた。

「あ、あの、織斑君……ひゃんっ！」

一夏はおそろおそろ自分の手を見ると。

「そ、その、ですね。困ります……こんな場所で……。いえ！場所だけじゃなくてですね！私と織斑君は仮にも教師と生徒ですね！……ああでも、このまま行けば織斑先生が義姉さんってことで、それはとても魅力的な……」

山田先生だった。そして今の状況は一夏が山田先生を押し倒しているような状況になっている。

そしてレーザーが目の前で通り過ぎた。

「ホホホホ……。残念です。外してしまいましたわ……」

スターライトmk?を放つセシリア。

「……………」

双天牙月を連結させ投げる鈴。

一夏の目の前に本気で、殺そうとする2人がいた。

そして、双天牙月がブーメランと同じく帰ってきた。

(…………まずい。かわせない。)

双天牙月が一夏に直撃しようとしたとき。

ドンッドンッ！

銃弾は双天牙月の軌道を変えた。

地面に葉莢が跳ねる音が聞こえたどこに視線を向けると、山田先生がいた。

「……………」

全員啞然としていた。

「山田先生はああ見えて元代表候補生だからな。今ぐらいの射撃は造作もない」

「む、昔のことですよ。それに候補生止まりでしたし……」

「さて小娘どもいつまで惚けている。さっさと始めるぞ」

「え？あの、2対1で……」

「いや、さすがにそれは……」

「安心しろ。今のお前たちならすぐに負ける」

その言葉を聞き、闘志を燃やした。

「では、はじめ！」

そして、セシリア、鈴、対山田先生の模擬戦が始まった。

数分後

結果から言うと、山田先生の圧勝。シールドエネルギーがまったく削られていなかった。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！無駄にばかすかと衝撃砲を撃つからいけないのですわ！」

「こっちの台詞よ！なんですぐにビットを出すのよ！しかもエネルギー切れるの早いし！」

「ぐぐぐぐっ……！」

「ぎゅぎゅぎゅっ……！」

蓮は2人を見て、（馬鹿かこいつら）と思っていた。

「さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように。それと山田先生もう1戦いけますか？」

「はい。ダメージが無かったので行けます！」

「そうですか。西城準備しろ」

「了解」

周りの女子は蓮の戦闘を見たことが無かったため興味があった。

「行くぞ、ゼロ」

蓮はゼロを展開しみんなの前に立った。

## 5話 模擬戦闘開始

蓮はゼロを展開しみんなの前に立った。

「さて、模擬戦闘をはじめる前に、山田先生そこから50 m離れてください」

「? はい、わかりました」

山田先生は50 m離れた。

「西城、バスターライフルは30%にしておけ」

「了解」

蓮は風雷と風殺を装備した。

一方山田先生はスナイパーライフルを装備した。

「では、はじめ!」

号令と同時に山田先生はスナイパーライフルを撃つ。

「「「えっ」「」」」

蓮は右手の風殺で弾丸を弾いた。

その後、5発撃ったが全て弾かれた。

「行くぞ」

蓮が風雷をバスターライフルに変えて動き出すと同時に山田先生は、

距離をとりつつラピッド・スイッチでスナイパーライフルからアサルトライフルに変えて撃つ。

それを避けバスターライフルを山田先生の手前に放ち、煙を立ち上らせ山田先生の視界から一時的に消え、アサルトライフルを破壊し10mほど後ろでバスターライフルを放ち、エネルギーを1／4削った。

そこをすぐに離れて、2丁拳銃に変えて撃つ。

イグニッション・ブーストで懷に飛び込み、右手の拳銃を破壊し少し後ろでバスターライフルを放ち、煙がたちのぼりその中から山田先生が出てきた。

「西城君はどこに？」

「ここだ」

声がする方を見ると、ツインバスターライフルを放つ蓮がいた。

「これで……終わりだ」

そしてツインバスターライフルは、山田先生に直撃しエネルギーが尽き試合が終了した。

「ご苦労だ西城。山田先生どうでしたか西城は？」

「驚きました。まさか弾を弾くだなんて」

クラスのみんなも弾丸を弾いたことを驚いていた。

「そうだろうな、西城はまだ本気を出してない。本気を出せば、私を倒すほどだからな」

千冬の言葉に全員が啞然した。

「織斑先生を倒すほどですか？」

「前に1度負けた」

「あれはただスペックで勝ってただけです」

「あれは私の負けだ！」

そういつて、ぱんぱんと手を叩いてみんなの意識を切り替える。

「専用機持ちは織斑、西城、オルコット、デュノア、ボーデヴィヒ、エルシア、凰だな。では8人グループになって実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちがやること。いいな？では分かれろ」

千冬が言い終わると同時に蓮と一夏とシャルルに一気に2クラス分の女子が詰め寄ってくる。

「織斑君、一緒にがんばろう！」

「わからないところ教えて」

「デュノア君の操縦技術を見たいなあ」

「ね、ね、私もいいよね？同じグループにいられて！」

「西城君いろいろ教えて！」

「私も私も教えて！」

一夏とシャルルはどうしていいのかわからずただ立ちつくすだけ。  
一方蓮は無視していた。

「この馬鹿者どもが……。出席番号順に1人ずつ各グループに入れ！  
順番はさっき言った通り。次にもたつくようなら今日はISを背負ってグラウンド100周させるからな！」

実習が始まってから数十分がたった。

「では午前の実習はここまでだ。午後は今日使った訓練機の整備を行うので、各人格納庫で班別に集合すること。専用機持ちは訓練機と自機の両方を見るように。では解散！」

蓮は訓練機をIS専用のカートで運ぶのだから、蓮は一夏と同じく1人でISを運んでいた。

シャルルは班の全員で運んでいた。

「シャルル、着替えに行こうぜ。俺たちはまたアリーナの更衣室まで行かないといけないしよ」

「え、ええっと……僕はちょっと機体の微調整をしてからいくから、先に行って着替えてよ。時間かかるかもしれないから、待ってなくていいからね」



「わかった。先に戻るぞ」

そして一夏を引っ張りアリーナの更衣室に向かい、着替え更衣室を出た。

## 6話 お前といると静かに飯が食えないだろうが！

更衣室に戻り着替えを済まし、今は教室に戻ろうとしているところ。

「蓮、昼屋上で食べないか？」

一夏が話しかけた。

「辞退する」

「なあ、一緒に行こうぜ」

「黙っている」

蓮は一夏に振り向き腹に膝蹴りを食らわした。

「い、痛い」

「お前といると静かに飯が食えないだろうが。そんなに誘いたいならシャルルを誘え」

そういつて蓮は一夏の前から立ち去った。

く蓮SIDE OUTく

く一夏SIDEく

「……どういことだ」

「ん？」

昼休み、一夏たちは屋上にいた。

「天気がいいから屋上で食べるって話だっただろ？」

「そうではなくてだな……！」横に視線をやると。そこにはセシリアと鈴、そしてシャルルがいた。

「せっかくの昼飯だし、大勢で食った方がうまいだろ。それにシャルルは転校してきたばかりで右も左もわからないだろうし」

「そ、それはそうだが……」

手には包みにくるんだ手作りの弁当が握られていた。

「はい一夏。アンタの分」

そう言ってタッパーを放る鈴。

「おお、酢豚だ！」

「そ。今朝作ったのよ。アンタ前に食べたいって言ってたでしょ」

タッパーの中は酢豚オンリー。ちなみに鈴は自分の分のご飯だけ買ってきていた。

「コホンコホン。――一夏さん、わたくしもたまたま偶然何の因果か早く目が覚めまして、こういうものを用意してみましたの。よろしければおひとつどうぞ」

バスケットを開くセシリア。そこにはサンドイッチがきれいに並んでいる。

「お、おう。あとでもらうよ」

一夏の返事いささか引いている。

「? どうかしまして?」

「いや! どうもしてない!」

セシリアの料理は、見た目はきれいなのだか、味がすさまじくまずい。

なぜなら、自分の知らない調味料を適当にいれているからだ。

「はっきり言わないからずるずるいつっちゃうのよ。バーカ」

ちなみに、鈴は昔一夏に料理を作ったとき、「おいしいって言わないと殺す」と顔に書いていたらしい。

「ええと、本当に僕が同席してよかったのかな?」

一夏の隣シャルルがそんなことを言う。

「いやいや、男子同士仲良くしようぜ。色々不便もあるだろうが、まあ協力してやっていこう。わからないことがあったらなんでも聞いてくれ。――ISは蓮に聞いてくれ」

「アンタはもうちょっと勉強しなさいよ」

「してるって。多すぎるんだよ、覚えることが。お前らは入学前から予習してるからわかるだけだろ」

「ええまあ、適性検査を受けた時期にもよりますが、遅くてもみんなジュニアスクールのうちに専門の学習をはじめますわね。ですから蓮さんはどこで、ISのこと学んだのでしょうか？」

「そうなんだよな。あいつ操縦技術どこで学んだんだ？」

今のところ模擬戦でのトータル勝率も1位が蓮、2位が鈴、3位がセシリア、4位が箒、5位が一夏である。

「そういえば、蓮はなぜいない？」

「蓮も誘おうとしたら、いきなり腹に膝蹴り食らわされた」

「あ、だから一夏廊下で倒れてたんだ」

蓮が一夏の前から立ち去った後、シャルルが通りすがった。

「ああ、あいつが本気で蹴るとあれだけでは、すまないからな」

「そういえば小学校2年のとき、私が不良5人からまれて、その者どもぼこぼこにして助けてくれたな」

（小学校2年で不良5人倒すってどんだけ強いのと3人は思った。

そして数分後、屋上での騒がしい昼食は幕を閉じた。

ちなみに、蓮は食堂で静かに（一夏たちより）昼食をとっていた。

屋上での騒がしい昼食は幕を閉じた。

ちなみに、蓮は食堂で静かに（一夏たちより）昼食をとっていた。  
食堂で昼食をとっていた。

（一夏SIDE OUT）

## 7話 ルームメイトは貴公子

「放課後」

「で、何の用だ？」

今ここは生徒指導室で、千冬と蓮しかいない。

「アリア・エルシアのことです」

アリアは今日転校してきた1人である。

「アリアがどうした？」

「自分の考えすぎかもしれませんがもしかしたら、ファントムタスクの一員かもしれません」

アリアはクラス対抗戦のときに、襲撃してきたISエクシアのパイロットの可能性があるからだ。

「なるほど、あの時の報告どうりの人物なら、警戒が必要か」

襲撃してきたときの目的は、織斑一夏の捕獲そして可能な場合、蓮の抹殺だった。

「できればすぐに捕まえたいですが、まだ証拠がないのでへたに動けない。だから」

「だから？」

「彼女をしばらくおよがそうと思います」

「何を考えている！へたしたら織斑が捕獲されるのだぞ！」

千冬の言うとうり、向こうも隙について一夏を捕獲するかもしれないけど。

「一夏はまだ捕まりませんよ」

「なぜそういえる？」

「向こうにとって俺は邪魔な存在だからです」

「何？」

千冬は蓮がファントムタスクにとって、どのような存在か知らなかった。

「簡単に考えてください、もし一夏を捕獲しても俺が出てくる、そうしたら結局失敗する。だとしたら向こうがすることは――」

「お前を消すことか？」

「そういう事です。だから一夏はまだ狙われないと思います」

「わかった。しばらくおよがそう」

「ですが、多少警戒してください」



「わかつている」

「では、また明日」

蓮は生徒指導室を出ていった。

「蓮……過去に何があった」

千冬の言葉は誰の耳にもはいらなかった。

「寮」

千冬の話しを終え、部屋（1026室）に向かいドアを開けると。

「シャルル」

「蓮もこの部屋なんだ」

「ああそうだ。夕食行くがどうする？」

「うん、行くよ」

そして食堂に向かい途中で一夏に出会った。

「あ！蓮、昼休みよくも腹蹴ったな！」

「お前が五月蠅いからだ！」

「どうして一夏を蹴ったの？」

シャルルが聞いてくる。

「こいつが昼誘ってきただろ？断っても五月蠅かったから、黙らした」

「へえー、どうして断ったの？」

どうやら蓮の説明に納得してくれたようだ。

「こいつといると静かに飯が食えないからだ」

なぜなら、一夏争奪戦をしている3人がいることでいつも騒がしいからだ。

せめて、食事のときぐらい静かにして欲しいのが蓮の望み。

「なあ、行こうぜ！」

「黙れ」

再び一夏の腹に膝蹴りを食らわした。

「さっきの事聞いてなかったのか？馬鹿者」

「い、一夏は大丈夫なの？」

「加減はした。じきに起きるだろ」

そう言って再び食堂に向かった。

「そういえば一夏はいつも放課後にI Sの特訓しているって聞いたけれど、そうなの？」

食事中シャルルが一夏（加減しすぎたか？）に質問した。

「ああ。俺は他のみんなから遅れているから、地道に訓練時間を重ねるしかないからな。蓮も手伝ってもらってる」

「僕も加わっていいかな？今日の事でお礼がしたいし専用機もあるから少しくらいは役に立てると思うんだ」

「おお、それはありがたい話だ。ぜひ頼む」

「そう言えば、蓮って織斑先生に勝ったんだよね？」

シャルルは、午前中の授業で千冬が言ったことを聞いた。

「ああ、俺もそれ気になってた」

どうやら一夏も気になっていたようだ。

周りを見ると、1，2組の女子も耳を傾けていた。

「あれは、ゼロが完成して試しに織斑先生と模擬戦したときで、負けそうになったとき1次移行になってそれで勝ったてこと」

「そうだったんだ」

「しかも1次移行で機体のスペックが上がったし、負けた日からしばらく落ち込んだし、いろいろな面倒だった」

そして食事を終え、部屋に戻った。

「さて、行くか」

「どこに行くの？」

「剣道場だ」

そして着替えようとすると。

「わあっ!？」

「どうした？」

「な、何でもないよ」

そして着替えを終え、剣道場に向かった。

「剣道場」

月明かりが剣道場に差し込む。

そのなかで蓮は、2本の木刀で風を切る。

ちなみに内容は、

座禅5分

←

素振り1本25分

←

休憩5分

←

素振り1本重り付き25分←

素振り2本25分

←

休憩5分

←

素振り2本重り付き25分←

座禅5分

の2時間である。

「さて、戻るか」

一通り終えて寮に戻った。ちなみに今は21:00

「寮」

寮に戻り部屋に入ると、すぐに着替えを持って、シャワールームに入り汗を流した。

「お疲れ、蓮」

「すまない」

シャルルは蓮にスポーツドリンクを渡した。

「改めてよろしく」

「うん、よろしく蓮」

とりあえず、シャワーのことを聞く。

「シャワーだが順番どうする？その日その日で決めていいが」

「あ、僕が後でいいよ。蓮が先に使って」

「そう言われると逆に使いづらいな……。シャルルも実習終わってすぐにシャワー浴びたい日だってあるだろ？」

「ううん、平気だよ。僕ってあんまり汗をかかない方だから、すぐにシャワーを浴びなくてもそんなに気にならないし」

「そうか。先に使わせてもらおう。でも遠慮しないでいいからな」

「うん。ありがとう」

そして2人とも布団の中に入り眠りについた。

## 7話 ルームメイトは貴公子（後書き）

感想、評価よろしく願います。



## 8話 喧嘩売るなら買ってやるが？

「ええとね、一夏が蓮やオルコットさんや凰さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握してないからだよ」

「そ、そうなのか？一応わかっているつもりだったんだが……」

シャルルが転校してきてから5日がたち、シャルルに軽く手合わせをしてもらった後、IS戦闘に関するレクチャーを受けていた。ちなみに、シャルルのアドバイスはともわかりやすい。

「ふん。私のアドバイスをちゃんと聞かないからだ」

「あんなにわかりやすく教えてやったのに、なによ」

「わたくしの理論整然とした説明の何が不満だと言うのかしら」

一夏の専属コーチ（自称）3人が後ろでぶつくさ言っている。

「一夏の白式って後付武装がないんだよね？」

「ああ、何回か調べてもらったんだけど、拡張領が空いていないらしい。だから量子変換は無理だって言われた」

「たぶんだけど、それってワンオフ・アビリティーのほうに容量を使っているからだよ」

「ワンオフ・アビリティーっていうと……えーと、なんだっけ」

一夏に呆れながらも蓮は説明した。

「言葉通り、唯一仕様の特特殊能力だ。格ISが操縦者と最高状態の相性になったときに自然発生する能力のことだ」

こういう説明がすらすらでてくるあたり、シャルルと蓮がいかに優秀かがよくわかる。

今度はシャルルが言う。

「でも、普通第二形態から発言するんだよ。それでも発言しない機体の方が圧倒的に多いから、それ以外の特特殊能力を複数の人間が使えるようにしたのが第三世代型IS。オルコットさんのブルー・テイアーズと凰さんの衝撃砲がそうだよ」

「なるほど。それで、百式の唯一仕様ってやっぱり『零落白夜』なのか？」

一夏のIS白式の単一仕様能力『零落白夜』。

しかしその発動には自身のシールドエネルギー、つまり自分のライフを削るという呪われた武器仕様であり、文字通りの諸刃の刃なのだ。

「白式は第一形態なのにアビリティィがあるっていうだけでもすごい異常事態だよ。前例がまったくないからね。しかも、その能力って織斑先生の――初代『ブリュンヒルデ』が使っていたISと同じだよな？」

「まあ、姉弟だからとか、そんなもんじゃないのか？」

「ううん。姉弟だからってだけじゃ理由にならないと思う。さっき

蓮も言ったけれど、ISと操縦者の相性が重要だから、いくら再現しようとしても意図的にできるものじゃないんだよ」

「そっか。でもまあ、今は考えても仕方ないだろうし、そのことは置いておこうぜ。そう言えば蓮のISもあるよな？」

「ああ、「バーストモード」がある」

「え、蓮のISにもあるの？」

「ああ、バーストモードはエネルギーを1まで消費し、一定時間機動力と武装の威力を5倍にする能力だ」

「へえー、すごいアビリティーだね」

「そうか？それより練習はじめるぞ」

「あ、うん。それもそうだね。じゃあ、射撃武器の練習をしてみようか。はい、これ」

そう言って一夏に渡してきたのは、さっきまでシャルルが使っていた五五口径アサルトライフルだった。

「え？他のやつ武装って使えないんじゃないのか？」

「普通はね。でも所有者が使用許諾すれば登録してある人全員が使えるんだよ。——うん、今一夏と白式に使用許諾を発行したから、試しに撃ってみて」

「お、おう」

そしてアサルトライフの弾を使いきったとき、アリーナ内がざわついた。

「ねえ、ちょっとアレ」

「ウソっ、ドイツの第3世代型だ」

「まだ本国でのトライアル段階だって聞いてたけど…」

そして注目の的に視線を移した。

「……………」

そこにいたのはもう一人の転校生、ドイツ代表候補生ラウラ・ボーデヴィツヒだった。

転校初日以来、クラスの誰ともつるもうとしない、どころか会話さえしない孤高の女子。

その孤高女子が一夏に声を掛けた。

「おい」

「……なんだよ」

「貴様も専用機持ちだそうだな。ならば話が早い、私と戦え」

「イヤだ。理由がねえよ」

「貴様には無くても私にはある」

千冬、ドイツのキーワードで出てくるのは一つだけだ。

第二回 I S 世界大会『モンド・グロッソ』そこで千冬は決勝戦を辞退して不戦敗となった。その理由が一夏だ。一夏はその決勝戦当日、どこかの組織に誘拐されそれを救ったのが千冬。そして居場所を突き止めたのがドイツ軍だ、だからその借りのお返しとして千冬は一年ほどドイツ軍で教官としてドイツに居た。このラウラという少女は千冬の強さによほど惚れ込んでいるようで経歴に泥を塗った一夏が許せないのだろう。

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業を成し遂げただろうことは容易に想像できる。だから、私は貴様を——貴様の存在を認めない」

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざるをえないようにしてやる！」

言った直後ラウラはその身に纏う黒い I S を戦闘状態にシフト、左肩の大型実弾砲が一夏に向け撃ち出された。

ガギンッ

「……密集空間で戦闘するなんて、バカか貴様は？」

蓮は風殺で実弾を弾いた。

「ふん、貴様程度で私に勝てると思うのか？」

「喧嘩売るなら買ってやるが？」

蓮は風殺から素早く、ツインバスターライフルに変え銃口をラウラに向ける。

「模擬戦の時は、出力30%だったが今は出力100%のバスターライフルだ。直撃したら貴様の存在ごと消滅する」

そしてツインバスターライフルのエネルギー充填が終了した。

「10秒くれてやる、さっさと失せろ」

蓮の殺気がおおきくなった。

『その生徒！何をやっている！学年とクラス、出席番号を言え！』

突然アリーナにスピーカーからの声が響く。騒ぎを聞きつけてやってきた担当の教師だろう。

「チイツ、邪魔がはいったか」

「……ふん。今日は引こう」

横やりを2度も入られて興が削られたのか、ラウラはあっさりと戦闘態勢を解除してアリーナゲートへと去っていった。

「2人とも無事か？」

「あ、ああ。助かったよ」

「うん、僕も大丈夫だよ」

ついさっきまで出ていった殺気は消え、いつもどりの蓮に戻っていた。

「今日はもうあがろっか。四時を過ぎたし、どのみちもうアリーナの閉館時間だしね」

「おう。そうだな。あ、銃サンキュ。色々と参考なった」

「それなら良かった」

「えっと……じゃあ、先に着替えて戻ってて」

「わかった。行くぞ一夏」

そして更衣室に向かっていった。

「はー、風呂に入りてえ……」

「我慢しろ、じきに入れるようになる」

「よし、着替え終わり」

着替えが終わり、部屋に戻ろうとしたとき、

「あのー、織斑君と西城君とデュノア君はいますかー？」

山田先生の声が聞こえた。

「はい？えーと、織斑と西城がいますが」

「入っても大丈夫ですかー？まだ着替え中だったりしますー？」

「ああいえ、大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

人はなぜ遠くに呼びかけるときに語尾が伸びるのだろうか。と蓮は思った。

「ああいえ、大丈夫ですよ。着替えは済んでいます」

「そうですかー。それじゃあ失礼しますねー」

ドアが開き山田先生が入ってくる。

「デュノア君は一緒ではないんですか？今日は織斑君と西城君と実習してるって聞いてましたけど」

「まだアリーナの方いますが、大事だ話なら呼んできますが」

「ああ、いえ、そんなに大事な話でもないですから、西城君から伝えておいてください。ええとですね、今月下旬から大浴場が使えるようになりました。結局時間帯別にするというり色々と問題が起きそうだったので、男子は週に2回の使用日を設けることにしました」

「本当ですか！ありがとうございます、山田先生！」

一夏は嬉しそうな顔で山田先生に言った。



「い、いえ、仕事ですから」

「いやいや、山田先生のおかげですよ。本当にありがぐはあっ!」

余りにも一夏が五月蠅かったので、腹に膝蹴りを食らわした。

「静かにしろ馬鹿者。山田先生が困ってるだろ」

「お、織斑君大丈夫ですか?」

山田先生は一樣一夏を心配していた。

「大丈夫です先生。ちゃんと生きてます」

「……一夏、蓮?何してるの?」

少し不機嫌のシャルルがいた。

一夏はまだ倒れていた。

「まだ更衣室にいたんだ。それで一夏が倒れているのなんで?」何か殺気のようなものを感じるのは、気のせいなのか?

「二人とも、先に戻っててって言ったよね」  
すごく機嫌が悪かった。

「すまないシャルル。先生からの連絡を聞いていた。一夏は五月蠅かったから眠らした。ついでだから言うが今月下旬から大浴場が使えるそうだ」

「そう」

ISを解除してタオルで頭を拭き始める。

「ああ、そういえば織斑君にはもう一件用事があるんです。ちょっと書いて欲しい書類があるんで、職員室まで来てもらえますか？ 白式の正式な登録に関する書類なので、ちょっと枚数が多いんですけど」

「わかりました」一夏（前より強く蹴ったはずだが）と山田先生は更衣室から出て行った。

「シャルルちょっと散歩してくるから今日は先にシャワーを使っていいぞ」

「うん。わかった」

そして蓮は更衣室から出ていった。

「……………。はあっ……」

ドアを閉め、寮の部屋に自分一人だけになったところでシャルルははき出すようにため息を漏らした。それまで我慢していたせいだろうか、無意識に出たそれは思ったよりも深く、シャルル本人が驚くくらいだった。

（何をイライラしているんだか……）

さっきの更衣室での自分の態度が今になって恥ずかしい。きっと蓮と一夏も面食らっていたに違いないと思うと、ますます落ち込みに拍車がかかる。

（……。シャワーでもして気分を変えよう）

シャルルはクローゼットから着替えを取り出してシャワールームへ向かった。

## 9話 シャルルの秘密

蓮が散歩をして15分ほどすぎた。

「そろそろ戻るか」

そして寮に戻る途中、

「なぜこんなところで教師など！」

「やれやれ……」

千冬とラウラが話しているのを見かけた。  
それと近くに一夏もいた。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか！」

どうやら千冬の現在の仕事に不満があるのだろう。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるにたる人間ではありません  
ん」

「なぜだ？」

「意識が甘く、危険感到疎く、ISをファッションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低いものたちに教官が時間を割かれるなど――」

「――そこまでしておけよ、小娘」

「っ……！」

千冬の声に含まれる覇気にラウラはすくんでしまった。

「少し見ない間に偉くなったな。15歳でもう選ばれた人間気取りとは恐れ入る」

「わ、私は……」

その声は震えていた。

「さっさと寮に戻れ」

「……………」

ラウラは黙したまま足早で去っていった。

「その男子。盗み聞きか？異常性癖は感心しないぞ」

（見つかったか）

「な、なんでそうなるんだよ！千冬ね――」

ばしーん

「学校では織斑先生と呼べ」

「は、はい……」

一夏が出てきて、千冬に叩かれた。

「そんなことする暇があるなら自主訓練をしろ。じゃないと学年別トーナメント初戦敗退だぞ」

「わかってるって……」

「そうか。ならいい」

そして一夏は寮に戻った。

「いつまで隠れている西城」

「いつからきずいていたんですか？」

「最初からだ」

どうやらはじめからきずかれていたようだ。

「そんなことする暇があるならお前も、自主訓練をしろ」

「してますよ」

「そうか、ならふざけた試合をするなよ」

「了解」

そして寮に戻った。

「部屋」

「シャルル戻っているのか？」

すぐにシャワールームから響く水音に気づいた。

（たしか……ボディーソープ切れてたって言っていたな）

シャルルが言っていたことを思いだし、クローゼットからボディーソープを取り出し渡しに行った。

ガチャ。——ガチャ。

「シャルル。替えの——」

「れ、……………蓮？」

（……………誰？）

シャワールームから出てきたのは、金髪の女子だった。

どうしてわかったか？胸があるからだ。

「きああっ!？」

ガチャ！

大きなドアの音で蓮は我に返った。

「……。えーと……」

「……………」

「ぼ、ボディーソープ、ここに置いとくから……」

「う、うん……」

蓮はシャワールームのドア前にボディーソープを置いて出ていった。

（誰ださっきの人は？この部屋には俺とシャルルしかないはず。  
冷静になれ！今は冷静にならなくては）

蓮はコーヒーを飲み落ち着いた。

ガチャ……。

「あ、上がったよ……」

「あ、ああ」

「……………」



「……………」

しばらく気まずい空気が漂った。

「お茶でも飲むか？」

「う、うん。もらおうかな……」

蓮はお茶を淹れシャルルに渡した。

「あ、あの蓮」

「話したくないなら別に話さなくていい」

「うん、ありがとうでも大丈夫」

「そうか。……なんで男のフリしてたんだ？」

「それは、その……実家からそうしろって言われたんだ」

「実家というとデュノア社の——」

「そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ」

「命令って……親だろ？なんでそんな——」

「僕はね、蓮。愛人の子なんだよ」

蓮は絶句してしまった。

「引き取られたのが2年前。ちょうどお母さんがなくなったときにね、父の部下がやってきたんだ。それで色々と検査する過程でIS適正が高いことがわかって、非公式ではあったけれどデュノア社のテストパイロットをやることになってね」

シャルルは、おそらくは言いたくはないであろう話をそれでも健気に喋ってくれた。

「父にあったのは2回くらい。会話は数回くらいかな。普段は別邸で生活をしているんだけど、1度だけ本邸によばれてね。あの時はひどかったなあ。本妻の人に殴られたよ『泥棒猫の娘が!』ってね。参るよね。母さんもちよつとくらい教えてくれたら、あんなに戸惑わなかったのにね」

あはは、と愛想笑いを繋げるシャルルだが、その声は乾いていてちつとも笑ってはいなかった。

「所詮リヴァイブは第2世代型ということか」

「そう。ISの開発っていうのはものすごくお金がかかるんだ。ほとんどの企業は国からの支援があってやっと成り立っているところばかりだよ。それで、フランスは欧州連合の統合防衛計画『イグニッション・プラン』から除名されているからね。第3世代型の開発は急務なの。国防のためもあるけど、資本力で負ける国が最初のアドバンテージを取れないと悲惨なことになるんだよ」

ということとは、おそらくドイツからラウラが転入してきたのも『イグニッション・プラン』に絡んでいるのだろう

「話を戻すね。それでデュノア社でも第3世代型を開発していたんだけど、元々遅れに遅れての第2世代型最高発だからね。圧倒的にデータも時間も不足していて、なかなか形にならなかったんだよ。それで、政府からの通達で予算を大幅にカットされたの。そして次のトライアルで選ばれなかった場合援助を全面カット、その上でIS開発許可も剥奪するって流れになったの」

「話わかった。男装する理由は広告塔と一夏だな？」

「そう。同じ男子なら日本で登場した特異ケースと接触しやすい。可能であればその使用機体と本人のデータを取れるだろう……ってね」

蓮は昔のことを思い出した。

自分の息子の体を改造し実験材料として使っていた頃の父親に似ていた。

「とまあ、そんなところかな。でも蓮にばれちゃったし、きっと僕は本国に呼び戻されるだろうね。デュノア社は、まあ……潰れるか他企業の傘下に入るか、どのみち今までのようにはいかないだろうけど、僕にはどうでもいいことかな」

「……………」

「ああ、なんだか話したら楽になったよ。聞いてくれてありがとう。それと、今までウソをについていてゴメン」

シャルルは深々と頭を下げた。

「ふざけるな！」

「え………？」

「親が何だってんだ。親だからってだけで子供の自由を奪う権利がある。ふざけるな！」

「れ、蓮……？」

シャルルが戸惑いと怯えの表情をみせた。

「親がいなけりゃ子供は生まれない。そりゃそうだ。でも、だからって、親が子供に何をしてもいいなんて、そんなのふざけてる！シャルルお前の生き方を選ぶ権利はお前の親じゃない、シャルルお前自身だ！」

「ど、どうしたの？蓮、変だよ？」

「悪い。熱くなってしまった」

「いいけど……本当にどうしたの？」

「俺は両親が離婚してその後父親に捨てられた」

それを聞いてシャルルは申し訳なさそうに顔を伏せる。

「その……ゴメン」

「気にしないでいい。俺にはもう家族はいない。それに俺は父親を……」

「え？」

「いや、何でもなし。それでこれからどうするんだ？」

「どうって……時間の問題じゃないかな。フランス政府もことの真相を知ったら黙っていないだろうし、僕は強制送還されて、よくて牢屋とかじゃないかな」

「それでいいのか？」

「良いも悪くもないよ。僕には選ぶ権利がないから、仕方ないよ」  
そう言って見せたシャルルの微笑みは、痛々しいものだった。

「だったら、ここにいろ」

「え？」

「特記事項第21、本学園における生徒その在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。――つまり、この学園にいれば、すくなくとも3年間安全だ」

「蓮」

「なんだ？」

「よく覚えられたね。特記事項って55個もあるのに」

「ここにくる前に覚えた」

「そうなんだ。すごいね」

「それに……」

「え、／＼」

蓮はシャルルを抱きしめた。

「俺がお前を守る。たとえフランスが強制送還するならお前を守るために戦う。国の1つや2つ潰せる力ぐらいはある」

「うん、ありがとう」

蓮はシャルルから離れたとき。

コンコン。

「「!」?」

「蓮、シャルルいるか?夕食まだだろ、体調でも悪いのか?」

いきなりのノックと呼び声に2人揃って身をすくませる。

「ど、どうしよう?」

「とにかくベッドの中にいろ!後は俺が言いくるめる」

「うん、わかった」

とりあえずシャルルをベッドの中に入れた。

「どうかしたか？」

「え、いや何でもない」

そしてドアを開いた。

「よお、蓮、シャルルはどうした？」

蓮の前には左腕をセシリアと組んでいる、一夏がいた。

「シャルルはちょっと風邪っぽいから、寝かせている。夕食はいらないらしい」

「ご、ごほっごほっ」

わざとらしい、咳が聞こえた。

「そ、そうか。じゃあ行くか」

「あ、ああ」

部屋を出て食堂に向かった。

途中、箸と出会い結局一緒に行くことになった。

「シャルル、焼き魚定食もらってきたが、食べるか？」

「うん、ありがとう。いただくよ」

トレイをテーブルに置いたところで固まった。

「どうかしたか？」

「え、えーと……」

「箸、苦手か？」

「う、うん。練習はしてるんだけどね」

「悪い。フォークでももらってくる」

「ええっ？ い、いいよ、そんな。なんとかこれで食べてみるから」

「遠慮するな」

「で、でも……」

「シャルルは他人に甘えろ。遠慮ばかりしてたら損するぞ」

「うう……」

「最初は俺を頼れ」

「で、でも……」

「言ったはずだ。俺はシャルルの味方だ。だから俺を頼れ」



「蓮……」

しばらく迷っていたようだがどうやらやっぱり食事が進まないことに気をもんだのか、観念したように口を開いた。

「じゃ、じゃあ、あの……」

「なんだ？」

「え、えっと、ね。その……蓮が食べさせて」

モジモジとしながら言った。

「あ、甘えてもいいった言ったから……ダメ？」

「わ、わかった」

（ここでの上目遣いは反則だろう……）

シャルルはまるで、捨てられた子犬が段ボール箱の中で雨の降りしきる中助けを求めているような眼差しをしていた。  
シャルルから箸を受け取り、鰯の身をつまんだ。

「じゃあ、その……あーん」

「あ、あーん」

「お、おいしいか？」

「う、うん。おいしいね」

「そ、そうか」

「じゃ、じゃあ、その、次はご飯がいいな……」

「あ、ああ」

そしてまた箸で女子一口分ほどの量をつまむと、受け皿の手を添えてシャルルの口えつと運ぶ。

「あ、あーん」

「ん……」

蓮は、ぱくつと料理を食べるシャルルに妙にドキドキし妙に落ち着かなかった。

「つ、次は和え物がいいな」

「わ、わかった」

こうして結局最後まで食べさせることになりお互いに言葉が少なくなつて、食事が終わると話もそこそこに2人ともベッドに入り眠つた。

## 10話 戦闘開始 蓮VSラウラ

「翌日」

「そ、それは本当ですよ」

「う、ウソついてないでしょうね!？」

翌日の朝、教室に向かっていた蓮は廊下にまで聞こえる声に目をしばたたかせた。

「なんだ？」

「さあ？」

「知るかよ」

隣にいるのは一夏とルームメイトのシャルル（男装）である。

「本当だってば! この噂、学園内で持ちきりなのよ? 月末の学年別トーナメントで優勝したら織斑君か西城君と交際でき——」

「俺たちがどうしたって」

「」「きゃああっ!？」」「」

一夏が声をかけたのだが、返ってきたのは取り乱した悲鳴だった。

「で、何の話だったんだ? 俺と蓮の名前が出ていたみたいだけど」

「う、うん？ そうだっけ？」

「さ、さあ、どうだったかしら？」

鈴とセシリアは話を逸らそうとする。

「じゃ、じゃああたし自分のクラスに戻るから！」

「そ、そうですわね！ わたくしも自分の席につきませんと」

どこかしらよそよそしい様子で2人はその場を離れていく。  
その流れに乗ってなのか、何人か集まっていた他の女子達も同じように自分のクラス・席へと戻っていった。

「……なんなんだ？」

「知るかよ」

バシン！ スッ！

「チィッ、避けたか。2人ともHRださっさと席につけ」

千冬の出席簿アタックは一夏には直撃したが、蓮は避けられた。

「さっさと席につけ」

「了解」

「はい」

蓮が席につく一瞬の隙ができた瞬間再び千冬の出席簿アタックが蓮を襲った。

カツッ！

「チィッ、防いだか」

「危ないですよ先生。周りの生徒に迷惑だ」

蓮は木刀（どこに隠してた？）で防いでいた。

「ふん、ではHRを始める」

（流された）

何もなかったようにHRが始まった。

・ 放課後 ・

「一夏、今日も放課後特訓するよね？」

「ああ、もちろんだ。今日使えるのは、ええと――」

「第3アリーナだ」

「「わあっ!?!」」

廊下で一夏とシャルルが並んで歩いていたのだが、そこにいきなり予想外の声が飛び込んできて一夏たちは声を揃って声を上げた。

「……そんなに驚くほどのことか。失礼だぞ」  
失礼だぞ」

「お、おう。すまん」

「ごめんなさい。いきなりのことでびっくりしちゃって」

「あ、いや、別に責めているわけではないが……」

折り目正しくぺこりと頭を下げるシャルルに、さすがの箒も氣勢を削がれてしまう。

「ともかく、だ。第3アリーナと向かうぞ、蓮もいるだろう。今日は使用人数が少ないと聞いている。空間が空いていれば模擬戦もできるだろう」

一夏たちがアリーナに向かっていると、そこに近づくにつれなにやら慌ただしかった。どうやら騒ぎは第3アリーナで起こっていた。

「なんだ?」

「何かあったのかな? こっちで先に様子を見ていく?」

そして観客席に向かった。

「来たか」

「運来てたんだ。誰かが模擬戦をしてるみたいだけど。それにしては様子が――」

ドゴオンッ！

「「！？」」」

突然の爆発に驚いて視線を向けると、その煙を切り裂くように影が飛び出してくる。

「鈴！セシリア！」

よく見ると2人のISはかなりダメージを受けていた。2人の前には『シュヴァルツェア・レーゲン』を駆るラウラの姿があった。

「何をしているんだ？――お、おい！」

しかし一夏の声は2人に届かなかった。

「くらえっ！！」

鈴は『甲龍』の第3世代型空間圧作用兵器・衝撃砲《龍砲》を放つがラウラは回避をしようとしなない。

「無駄だ。このシュヴァルツェア・レーゲンの停止結界の前ではな」  
衝撃砲の攻撃はいくら待っても届くことは無かった。

「くっ！まかさこうまで相性が悪いだなんて……」

ラウラは右手を突き出しバリアーのようなものを展開して衝撃砲を無力化された。

「アレがA I C」

「A I C？」

「シュヴァルツェア・レーゲンの第3世代型兵器だ。アクティブ・イナンシャル・キャンセラーの略」

「別名、慣性停止能力という」

「ふーん」

「わかってるのか？」

「今見た。それだけで十分だ」

そして、すぐさま肩に搭載された刃が左右一対で射出され、鈴のI Sに迫り、鈴の右足を捕えた。

「そうそう何度もさせるのですかっ！」

鈴の援護のため射撃を行うセシリア。同時にビットを射出し、ラウラと向かわせる。

「ふん……。理論値最大稼働のブルー・ティアーズならいざ知らず、この程度の仕上がりで第3世代型兵器とは笑わせる」



セシリアの射撃とビットによる視界外攻撃。その両方をかわしながら、今度は左右同時に突き出し、交差させた腕の先ではビットが何かに掴まえられたかのようにその動きが停止した。

「動きが止まりましたわね」

「貴様もな」

セシリアの射撃は、ラウラの大型カノンによる相殺される。すぐさま連続射撃の状態に移行しようとするセシリアを、ラウラは先ほど捕まえた鈴をぶつけて阻害した。

「きゃああっ！」

ぶつかり、2人は地面に叩きつけられ、ラウラは間合いをわずか1秒で詰めた。

「くっ！」

再度、衝撃砲を展開し、その砲弾エネルギーを集中させる。

「甘いな。この状況でウェイトのある空間圧兵器を使うとは」

その言葉通り、衝撃砲はその砲弾を放つ寸前にラウラの実弾砲撃によって爆散した。

それと同時にウェスト・アーマーに装着された弾頭型ビットをラウラへ向けて射出させた。

ドガアアアアンツ！

煙の中から鈴とセシリアが出てきた。

「無茶するわね、アンタ……」

「苦情は後で。けれど、これなら確実にダメージが――」

セシリアの言葉は途中で止まる。

「……………」

煙が晴れ、そこに佇んでいるのはラウラだった。

「終わりか？ならば――私の番だ」

言うと同時に瞬時加速で間合いを詰め、鈴を蹴り飛ばし、セシリアに近距離からの砲撃を当てる。

さらにワイヤーブレードが2人の体を捕まえてラウラの元にとたぐり寄せる。そこからはただただ一方的な暴虐が始まった。

「ああああっ！」

その腕に、脚に、体に、ラウラの拳がたたき込まれる。シールドエネルギーはあっという間に減って機体維持警告域を超え、操縦者生命危険域へと到達する。

「ひどい、これ以上ダメージが増加したらISが強制解除されて――」

「その時は冗談ではなく生命に関わるぞ！」

しかしラウラは攻撃の手を止めない。ただ淡々と鈴とセシリアを殴り、蹴り、ISアーマーを破壊していく。

普段と変わらないラウラの無表情が確かな愉悦に口元を歪めたのを見た瞬間。

「おおおおっ！」

一夏は白式を展開、同時に《雪片式型》を構築、全エネルギーを集約させ『零落白夜』を発動されて、アリーナのシールドを切り裂きシールドの間を突破する。

「その手を離せ！！」

鈴とセシリアを掴んでいるラウラへと、一夏は刀を振り下ろす。

「ふん……。感情的で直線的、絵に描いたような愚図だな」

零落白夜のエネルギー刃が届く寸前で、一夏の体が止まる。

「な、なんだ！？くそっ、体がっ……！」

零落白夜のエネルギー刃が次第に小さく消えていく。

「やはり敵ではないな。この私とシュヴァルツェア・レーゲンの前では、貴様も有象無象の1つでしかない。――消えろ」

肩の大型カノンが接続部から回転し、一夏へと砲口を向ける。

「消えるのはボーデヴィツヒ貴様だ！」

蓮の声が聞こえて、それと同時に瞬時加速を使い、風殺で鈴とセシリアを捕まえているワイヤーブレードを切り裂きその後ラウラに斬撃を食らわそうとしたが、ラウラはすぐさま瞬時加速でその場から離れた。

「織斑2人を安全なところに運べ」

「わかった」

一夏はラウラが離れた鈴とセシリアの元へと飛び込み、2人を抱きかかえた。

「逃がさん」

ラウラは大型カノンの照準を一夏に向けて撃った。

ガギンッ

「貴様の相手は俺だ！」

大型カノンの実弾を弾きラウラに切り掛かった。

「甘いな。その程度で私に勝てると思っているのか？」

ラウラはAICを発動して蓮の動きを止めた。

「ふん。貴様も有象無象の1つでしかないな」

ラウラは大型カノンの砲口を蓮に向けた。

「蓮っ、離れて！」

シャルルの声が聞こえると、同時にアサルトライフル2丁デノミ弾雨が降り注ぐ。

「ちっ……。雑魚が……」

「蓮、大丈夫？」

「無事か？蓮」

蓮の近くにシャルルと一夏が来た。

「織斑、デュノア、お前たちはオルコット、凰を守れ」

「どういうこと？」

「今から少し本気をだす、巻き込まず戦えるかわからん。だから守れ」

「わかった。行くぞシャルル」

「うん。蓮」

「なんだ？」

「負けないでね」

「俺を誰だと思っている」

一夏とシャルルはその場から離れた。

「そういえば、貴様が俺たちの存在を認めない理由を聞いてなかったな」

「良いだろう教えてやる。教官はお前が教官より強いと言っていただから私はお前と教官が大会2連覇を邪魔をした織斑 一夏の存在を認めないそれだけだ」

「そうか、こいよ少しだけ本気をだしてやる」

「貴様の實力などたかが知れている私に勝てると思っているのか？」

「ほざけ、雑魚が……ゼロシステム、第一解放！」

ゼロの胸部にある緑色の球体が輝いた。

「行くぞ？ボーデヴィツヒ」

蓮はラウラに接近し切り掛かった。

「くっ、早い！」

ラウラはプラズマ手刀で蓮の斬撃を防いだ。

「まだ1.5倍だぞ」

「ちっ」

ラウラは大型カノンを蓮に向けて撃つ。

「甘い」

蓮は簡単にラウラの砲撃を避けた。

2分がたち蓮の一方的な試合になっていた。

「さて、終わらせるか」

蓮は瞬時加速でラウラの懷に飛び込もうとした瞬間

「ゴホッ」

蓮は血を吐いた。

（チィッ、遊びすぎたか）

「ふん。貴様の運も尽きたな。――消えろ」

ラウラが蓮に飛び出しプラズマ手刀で蓮を切り掛かった。

「言っただけで消えるのは……貴様だ！」

蓮はビームサーベルを取り出しラウラを切り掛かろうとした瞬間、蓮たちの間に誰かが割り入ってきた。

ガギンッ

金属同士が激しくぶつかり合う音が響き、ラウラは誰かに加速を中

断させられた。

「……やれやれ、これだからガキの相手は疲れる」

「千冬さん!？」

その人の姿は普段と同じスーツ姿で、IS用近接ブレードを持ち2人の間に割り入った。

「模擬戦をやるのは構わん。――が、アリーナのバリアーまで破壊する事態になられては教師として黙認しかねる。この戦いの決着は学年別トーナメントでつけてもらおうか」

「教官がそう仰るなら」

素直に頷いて、ISの装着状態を解除した。

「西城、織斑、デュノア、お前たちもそれでいいな？」

「了解」

「あ、ああ」

「教師には『はい』と答えろ。馬鹿者」

「は、はい」

「僕もそれで構いません」

その言葉を聞いて、千冬は改めてアリーナ内すべての生徒に向けて言った。



「では、学年別トーナメントまで私闘の一切を禁止とする。解散！」

パンツ！

と強く手を叩いた。

## 11話 決戦前夜

「1時間後」

「……………」

「……………」

場所は保健室。ベッドの上では打撲の治療を受けて包帯の巻かれた鈴とセシリアがむっすーとした顔で視線をあらぬ方向へと向けていた。

「別に助けてくれなくてよかったのに」

「あのまま続けていれば勝っていましたわ」

「お前らなあ……。はあ、でもまあ、怪我がたいしたことなくて安心したぜ」

「こんなの怪我のうちに入らな——いたたたっ！」

「そもそもこうやって横になっていること自体無意味——つううつ！」

バカだな。

「バカってなによバカって！バカ！」

「一夏さんこそ大バカですわ！」

一夏の心が読めたらしい。

奇遇だな一夏。俺も同じこと思った

「バカはお前たちだ」

蓮が言った瞬間2人はビクツとした。

「お前たちはもう少しでボーデヴィツヒに殺されかけていたんだぞ。もし一夏が乱入しなかったら死んでたぞ」

「……………」

「……………」

蓮に説教され黙ってしまう2人だった。

「好きな人に格好悪いところ見られたから、恥ずかしいんだよ」

「ん？」

シャルルは飲み物を買って戻ってきた。部屋に入るときに何か言っていたが一夏は聞き取れなかった。

けれど鈴とセシリアは聞こえてたらしく、顔を真っ赤にして怒りはじめた。

「ななな何を言っているのか、全っ然っわかんないわね！こここここれだから欧州人って困るのよねえっ！」

「べべっ、別にわたくしはっ！そ、そういう邪推をされるといささ

か気分を害しますわねっ！」

2人ともまくし立てながらさらに顔が赤くなっている。

「はい、ウーロン茶と紅茶。とりあえず飲んで落ち着いて、ね？」

「ふ、ふんっ！」

「不本意ですがいただきましたましようっ！」

鈴とセシリアは渡された飲み物をひったくるように受け取って、飲んだ。

「ま、先生も落ち着いたら帰っていいって言ってるし、しばらく休んだら——」

ドドドドドドツ……！

「な？なんだ？何の音だ？」

「知らねーよ」

地鳴りに聞こえるそれは、どうやら廊下から響いてきている。そして……

ドカーン！

と保健室のドアが吹き飛んだ。

「織斑君！」

「デュノア君！」

「西城君！」

突然保健室に入ってきて、まるでバーゲンセールの取り合いのように手を伸ばしてきた。

「な、な、なんだなんだ！？」

「「「これ！」「」」」

バン！と女子生徒一同が出してきた紙に書いてあるのを読む。

「『今月開催する学年別トーナメントでは、より実戦的な模擬戦闘を行うため、ふたり組での参加を必須とする。なお、ペアが出来なかった者は抽選により選ばれた生徒同士で組むものとする。締め切りは』———」

「ああ、そこまででいいから！とにかくっ！」

「私と組もう、織斑君！」

「私と組んで、デュノア君！」

「私と組もうよ、西城君！」

「え、えっと……」

シャルルの方を見ると、数秒間だけ困惑した表情でこっちを見

たのがわかった。そして視線が合うと、助けを求めているのがわかってしまうと思ったのだろう、すぐに視線をそらしてしまった。そしてわあわあど騒ぐ女子全員に聞こえるように大きな声で宣言した。

「悪いな。俺はシャルルと組むことにしたから諦めてくれ！」

「まあ、そういうことなら……」

「他の女子と組まれるよりいいし……」

「それより織斑君！私と組もう」

女子達は一夏に詰め寄られ、蓮とシャルルは保健室から逃げた。

「寮」

「あ、あのね、蓮」

「おう？」

夕食後、部屋に連れ立って戻るなり、シャルルが口を開いた。

「あの、遅くなっちゃったけど……助けてくれてありがとう」

「ん？俺が何かしたか？」

「ほら保健室で。トーナメントのペアを言い出してくれたの、すごく嬉しかった」

「ああ、アレか。まあ、気にするな。事情を知ってるのは今のところだけだしな、サポートするのは当然だろう？」

「そんなことないよ。それが自然と出来るのは、蓮が優しいからだよ。誰かのために自分から名乗り出られるなんて、すごく素敵なことだと思う。僕はすごく嬉しかったよ」

「優しいか……」

蓮は複雑な表情を浮かべた。

（昔さんざん人を殺した俺が優しいか……）

「どうしたの蓮？」

「いや、何でもない。ところで、俺しかいないときに無理に男子口調にしなくてもいいんじゃないか？」

「う、うん。僕——私もそう思うんだけど、ここに来る前に『正体がバレないように』って、徹底的に男子の仕草や言葉遣いを覚えさせられたから、すぐには直らないかも」

「で、でも、その……やっぱり女の子っぽくない、かな？」

「ん？自分のことを『僕』って言うことか？」

「そ、そう。女の子っぽくないんだったら、蓮と2人きりの時だけでも普通に話せるようにがんばるけど……」

「無理はしなくてもいいんじゃないか？それに俺は、シャルルは可愛いと思うぞ」

「か、可愛い……？僕が？ほ、本当に？ウソついてない？」

「つかねーよ。信じろ」

「そ、そう……なんだ。——うん、じゃあ、別にいいかな」

「そういえばお互い制服のまんまだな。俺は外に出てる」

「い、いいよ、そんなの。蓮に悪いし、その……僕は気にしないから……」

「いや、俺が気にするのだが……」

「そ、それに……ほら！男同士なのに着替え中に部屋の外に出たりしたら、変に思われちゃうでしょ？」

「それもそうだな。……じゃあ、俺も着替えることにする」

「うん、そうして」

そしてクローゼットから着替えを取り出した。

「じゃ、じゃあ、着替えるね……」



「お、おう」

2人は背を向けて着替えはじめる。

（や、やべえ……。何か甘い匂いがする……）

「れ、蓮？着替えないの？」

「あ、ああ。そうだな。着替える」

じー。

なぜか背中に視線を感じた。

「シャルル？」

「ふあっ！？な、なにかな！？」

ものすごく驚いた声が聞こえた。

「俺の思い過ごしかもしれないが、こっちを見てないか？」

「そ、そんなことはないよ！？」

「そ、そうか」

（さっさと着替えて寝よ）

「……………」

じー。

再び背中に視線を感じた。

「覗きはダメだぞ」

「ふえっ!?! い、いやっ、僕はそんなっ——きゃんっ!」

どたっという音が聞こえて、反射的にそちらに顔を向けるがすぐに、反対方向を向いた。

「いたた…足がひっかかった…見た?」

「み、見てません」

口調が変わっていた。

「本当の本当に?」

「ほ、本当です」

「パンツの色は?」

「ピンク…あ!?!」

「蓮のえっち」

「わ、悪い」

「ま、まあ、いいけど…許してあげる」

その後しばらく沈黙が続いた。

「そういえばさ」

「ん？」

「ボーデヴィツヒさんと戦ってたとき血を吐いてたけど大丈夫なの？」

蓮はラウラとの戦闘を思い出した。

「ああ、あれは大丈夫だ。心配するな」

「う、うん」

そして着替えが終わった。

「俺もう寝るから」

「うん、おやすみ」

今日はいろいろあって、すぐ眠れた。

（蓮SIDE OUT）

〈シャルルSIDE〉

蓮は今日ラウラとの戦闘などがあり疲れて、眠っている一方シャルルは眠れなかった。

「蓮ってば、ちゃ、ちゃんと言ってくれれば、僕は別に……」

と、そこまで言うてからハッと我に返った。

（ああもうっ、寝ちゃおう！うん！それがいいね！）

蓮を視界から外し、シャルルは部屋の照明を落とす。暗くなった室内ではその明暗差にすぐには目が慣れない。

シャルルは蓮のところに向かい、蓮が寝ていることを確認する。

（ぼ、僕、何やってるんだろう……）

そう思いながらも、衝動に突き動かされるままシャルルは蓮の顔にのぞき込む。その距離はわずかに5センチ足らず。

「……………」

ふと蓮のことを考えて、シャルルの表情が真面目なものにと変わる。

『ここにいろ！』

『俺がお前を守る』

——初めて、そんなことを言われた。

母を亡くしてからずっと、居場所がなかった自分。

血の繋がりだけの父親には氷の壁に閉ざされたような息苦しさしか感じられず、ただただ無為に日々を過ごしていた。

いつしか自分が必要とされることさえ求めなくなつて、温度のない灰色の生活が繰り返されていることにもやがて慣れてしまっていた。そして、父からの命令で日本に行くことが決まったときも、別段何も感じなかった。

それなのに――

（どうして蓮はこんなに僕の心を揺り動かすんだろうね）

――出会ってしまった。

いつも優しく見守ってくれる目の前の少年と。

「蓮は優しいよ」

それからしばらくシャルルは蓮を見つめて、ひどく優しい表情を浮かべる。

そしてまるで母親が我が子にするかのように、さっとそのキスを額に落とした。

「おやすみ、蓮……」

冷めやぬ体の火照りを抱きながら、シャルルは長い長い夜を過ごしたのだった。

（シャルルSIDE OUT）

## 11話 決戦前夜（後書き）

感想等お願いします。

## 12話 学年別トーナメント 1回戦

6月も最終週に入り、学園は学年別トーナメント一色にと変わる。

「しかし、すごいなこりゃ……」

モニターを見ると、各国政府関係者、研究員、企業エージェント、などが観戦しに来ていた。

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来てるからね一年には今のところ関係ないけど、それでもトーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだ」

「……」

蓮と一夏はあんまり興味がなく話もそこそこに聞いていた。

「蓮と一夏はボーデヴィツヒさんとの対戦だけが気になるみたいだね」

「まあ、な」

「ああ」

そしてモニターに対戦表がでた。

「……織斑、今回は容赦なしだ」

「ああ」

「? 何をしたの?」

シャルルがモニターを見た。

「――え?」

シャルルはモニターを見て、ぽかんとした声を上げた。  
モニターには、

『Aブロック1回戦 西城 蓮、シャルル・デュノア ペア VS  
織斑 一夏、篠ノ之 箒 ペア』  
と表示されていた。

「ボーデヴィツヒとは決勝か」

更衣室から移動して今は控え室にいる。

「うん、そうだね。彼女は、1年の中では最強クラス決勝進出は間違いないだね」

「とにかく、勝つことだ。行くぞシャルル」

「うん、行こう」



2人はアリーナに向かった。

「まさか、1回戦であたるなんてな」

「織斑、本気でこい」

「ああ、わかってる」

試合開始のブザーが鳴り試合が開始した。

「行くぞ？」

「な、早い」

蓮は瞬時加速で一気に間合いを詰め、右手に装備した風殺で切り掛かるが、一夏はギリギリで斬撃を雪片式型で受け止める。

「言ったはずだ。容赦なしだと」

蓮は左手に風雷を装備して一夏に、連続で斬撃を繰り出す。

「一夏！」

箒が一夏を助けに行こうとした。

「ちっ、邪魔だ！」

蓮は箒の斬撃を軽やかに避け、箒に回し蹴りを食らわせぶっ飛ばした。

「デュノア、篠ノ之は任せる」

「うん、わかった」

シャルルはぶっ飛ばした箒の相手をはじめた。

「行くぞ、織斑！」

「ああ、こい！」

蓮と一夏は再び激しく切りあった。

「このお！」

「甘い！」

蓮は一夏の斬撃を避け、切り掛かるがつばぜり合いになる。シャルルの方を見るとすでに、箒との決着がついていた。

「それが貴様の本気か？」

「いや、ここからだ！」

一夏は蓮をはねのけ、零落白夜を発動した。

「零落白夜を発動したか……だが！」

蓮は一夏の斬撃を避けた。

「当たらなければ意味が無い！」

蓮は次々と一夏の斬撃を避けていく。

「くそ、当たらねー」

一夏は零落白夜が当たらないことに焦りを感じていた。

キュウウン……………。

「なっ！？ここにきてエネルギー切れかよ！」

音とともに零落白夜のエネルギー刃が小さくくぼみ、そしてそのまま消えてしまった。

「終わりだ」

一夏は蓮の風殺の一撃でシールドエネルギーが尽きた。

『試合終了。勝者 西城 蓮 シャルル・デュノア ペア』

とアナウンスが流れた。

「あー、また負けた」

「今日よく耐えてたな。いつもならすぐに終わっていたのに」

試合が終わり一夏と話していた。

「俺は次の試合がある。じゃあな」

「ああ、勝てよ」

そう言って2人は、別れた。

「……………」

「……………」

控え室に向かう途中にラウラと鉢合わせした。

「貴様があの程度の戦いとは、期待外れだ」

「ふん、あの時に負けそうになった奴が言う台詞か？」

「……………」

「……………」

2人の間の空気が張り詰めた。

「I c h e r m o r d e S i e i m F i n a l e (決勝で  
お前を殺す)」

「ふん、良いだろう受けて立つ」

そして2人はその場を去った。

**13話 学年別トーナメント 2回戦（前書き）**

今回は短いです。

### 13話 学年別トーナメント 2回戦

「蓮、さっきまでどこ行ってたの？」

蓮がラウラの前から、立ち去り控え室に着いた。

「ボーデヴィツヒに宣戦布告した」

「ボーデヴィツヒさんに宣戦布告って、何言ったの？」

「さあな、試合が始まる。行くぞ」

「うん、行こう」

「次は貴様か、アリア」

「ええ、お手柔らかに」

2回戦はアリアのペアが相手だった。

そして、試合開始のブザーが鳴り、試合が開始した。

「行くぞ？」

蓮は瞬時加速で間合いを詰め、アリアに切り掛かった。

「貴様のI Sは、近接格闘型武器しかないようだな」

アリアのI Sの武装は、試合前にスペックデータで確認した。

―操縦者 アリア・エルシア I Sネーム ブルー・アストレイ  
戦闘タイプ 近接戦闘型―

「ええ、この機体は近接格闘型武器しかないわ」

アリアは2本のビームサーベルで、斬撃を受け止めつばぜり合いになる。

「なかなかやるな」

「誉めても何も出ませんよ」

「ああ、わかってるさ。行くぞ」

蓮はアリアを蹴り飛ばし、さらに攻撃する。

「くっ」

「どうした、それが貴様の本気か？」

アリアは次々と迫る、斬撃を防ぐことで精一杯だった。

「蓮、こっちは終わったよ」

「だ、そうだ。今から2対1だ」



つばぜり合いの状態から、アリアをはねのけた。

「デュノア、援護を頼む」

「うん、わかった。行くよ」

アリアに向け、無数の弾雨が降り注ぐ。アリアはそれを辛うじて避けていくが、その隙に蓮が後ろに回り込み斬撃を食らわす。

「くっ、この状況は正直つらいわね」

「それにしても、随分と余裕そうだが？」

蓮はアリアに連続で斬撃を繰り返すが、全てギリギリで受け止める。

「なっ!？」

蓮はアリアのビームサーベルを弾き飛ばした。

「それで終わりか？」

「いいえ、まだよ」

アリアは両手から刀を展開し、激しく切りあう。観戦している方から見ると、2人の太刀筋は一夏のとき以上のスピードだった。

「やるな」

「そちらこそ」

つばぜり合いになり、2人の動きが止まり、アリアの背後から再び弾雨が降り注ぐ。

「くっ、このままでは」

アリアは自分に降り注ぐ弾雨を避けているうちに、蓮を見失っていた。

「ターゲット……ロックオン」

アリアの上空にツインバスターライフルを装備、アリアに向けて撃つ。

「しまっ」

気が付く時には、すでに遅く半分以上も残っていたシールドエネルギーが一瞬で尽きた。

『試合終了 勝者 西城蓮 シャルル・デュノア ペア』

とアナウンスが流れた。

「蓮、なんだよあれ。めちゃくちゃ早かったぞ」

「訓練しだいで、できるようになる」

「お前……本当に人間か？」

「知らん」

そう言って蓮は、一夏の前から立ち去った。

「織斑先生、ちょっとよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「ボーデヴィツヒとの試合で、リミッターを2つ外す許可がほしいのですが」

「なぜだ？」

「久々に少し本気をだしたいと、ゼロシステムの第一解放以降を見せたくないのです」

「いいのか？お前が普通の人間ではないときずかれるぞ？」

「1組と2組はきずいていると思いますが？」

少しの間沈黙が流れた。

「良いだろ。それと、やりすぎるなよ？」

「了解」

そう言って蓮は千冬の前から立ち去った。

## 14話 学年別トーナメント 決勝戦

蓮とシャルルの2人の前に並みの操縦者では太刀打ちできず、決勝まで勝ち進んだ。

「宣言どおり勝ち上がったようだな」

「……………」

「蓮、何してるの？」

蓮は両腕のアーマーを解除して、ブレスレットの花びらのようなものを2つとった。

「リミッターを2つ外した。それと、デュノア……アイツは俺がやる」

「うん、わかった。その代わり勝ってよ」

「わかっている。それと、ありがとう」

そして、試合開始のブザーが鳴り、試合が開始した。

「叩きのめす」

「かかってこい！雑魚」

ラウラは蓮に2つのワイヤーブレイドを飛ばせる。

「何だと！」

蓮に迫る2つのワイヤーブレイドは、蓮を捕える前にバラバラに碎けた。所々で残像が見えた。

「その程度か？」

「くっ」

ラウラは再び4つのワイヤーブレイドを飛ばせる。

「無駄だ」

4つのワイヤーブレイドもまた、蓮を捕える前に碎けた。

「な、なぜだ」

「なぜ？俺は単に、刀で切っただけだが」

「何……だと……」

ラウラは啞然としていた。

「行くぞ？」

「！」

蓮は瞬間加速で間合いを詰め、ラウラの正面に立ち斬撃を食らわす。  
イグニッション・ブースト  
アクティブ・イナーシャル・キャンセラー  
さすがのラウラもA I Cを使う暇がなく、風殺と風雷の斬撃を受けた。

「くっ、速い」

「おいしい、まだ身体能力の3／5だぞ？」

「アレが全力ではないのか？」

「ああ、そうだ。全力を出したいがリミッターを付けていてな、織斑先生の許可が無いと外せないんだよ」

続けて斬撃を食らわすが、さすがは軍人、手を抜いているとはいえない程度はプラズマ手刀で防いでいた。

「くっ」

だんだん速度が上がり徐々に、圧倒していき、シールドエネルギーを削る。

「似ているな。俺と貴様は……」

「どういうことだ？」

「戦うことでしか己の存在意義を見いだせないところがな……」

さらに速度が上がり、ラウラに隙ができた瞬間に、ラウラを蹴り飛ばし、ツインバスターライフルを展開した。

「ターゲット……ロックオン」

蓮は蹴り飛ばしたラウラに向けて、ツインバスターライフル（出力30％）を撃った。

「終わったな……」

蓮が撃ったツインバスターライフルは直撃し、半分ほどしかないシルドエネルギーが尽きた。

——だが次の瞬間、異変が起きた。

D a m a g e   L e v e l …… D .

M i n d   C o n d i t i o n …… U p l i f t .

C e r t i f i c a t i o n …… C l e a r .

《 V a l k y r i e   T r a c e   S y s t e m …… b o o t .

「あああああっ！！！！！」

突然、ラウラが身を裂かんばかりの絶叫を発し、同時にシュヴァルツェア・レーゲンから激しい電撃が放たれた。

「あれは……まさか」

蓮とシャルルはラウラの方を見て目を疑った。



その視線の先では、ラウラのIS変形していた。いや、変形などという生やさしいものではない。装甲どろどろのものになって、ラウラの全身を包み込んでいく。

黒い、深く濁った闇が、ラウラを飲み込んでいく。

ISがその形状を変えるのは『初期操縦者適応』《スタートアップ・フッティング》と『形態移行』《フォーム・シフト》の2つだけだ。パッケージ装備による多少の部分変化はあっても、基礎の形状が変化することはまずない。

「VTシステム」

「それって、過去のモンド・グロッソの部門受賞者トレースするシステムだけどそれは」

「ああ、IS条約で現在どの国家・組織・企業においても研究・開発・使用すべてが禁止されている。それがシュヴァルツェア・レーゲンに積まれている。そして、それに使われているのは千冬さんのデータだ」

蓮は風殺と風雷を握り締めた。

「――！」

刹那、黒いISが蓮の懷に飛び込み、居合いに見立てた刀を中腰に引いて構え、必中の間合いから放たれる必殺の一閃。それは紛れもなく千冬の太刀筋だった。

「ちっ」

構えた風殺と風雷が弾かれ、そして敵はそのまま上段の構えへと移る。

「!」

縦一直線、落とすように鋭い斬撃が襲いかかる。刀で受けることはできなく、すぐさま後方に退避してかろうじて避けた。

『西城、聞こえるか?』

突然、千冬から通信が入った。

「何ですか?」

『こちらに所属不明機2機が接近している。恐らく奴らだろう』

「ちっ、こんな時に。早急に来賓と生徒の避難を」

『わかっている』

『非常事態発令! トーナメントの全試合は中止! 状況をレベルDと認定、鎮圧のため教師部隊を送り込む! 来賓、生徒はすぐに避難すること! 繰り返す!』

とアナウンスが流れた。

「蓮!」

後ろを見ると、白式を展開していない一夏が黒いISに突っ込んで行った。

「お前……何しに来た?」

「アイツをぶっ飛ばしに来た」

「そうか、奇遇だな俺もだ。だが白式にエネルギーがあるのか？」

「そ、それは……」

「まったく……しょうがない。エネルギーを白式に送る。お前に任せるぞ」

「本当か！？ 蓮はどうするんだ？」

「俺はもう2つのバカをぶっ飛ばしてくる。ゼロのコア・バイパスを開放。エネルギー流出を許可」

ゼロから伸びたケーブルは待機状態の白式に繋がれ、エネルギーを送り込んだ。

「完了だ。ゼロのエネルギーは残量全て渡した」

その言葉通り、ゼロが光の粒子となって消える。

「次は俺だな……」

蓮は瞳を閉じて、集中した。

（特殊コア・バイパスを構築。ダークネスウイング・ゼロに転送）

「ウソっ」

「マジかよ」

2人の前には、エネルギーが無くなったはずのゼロを纏った蓮がいた。

「織斑、あのバカは任せる。デュノア、織斑のサポートをしてやってくれ」

「おう」

「わかった。蓮、負けないでね」

「わかっている。織斑先生、アリーナの遮断シールドの解除を」

『了解した。遮断シールドを解除する。今回は完全破壊を許可する』

「任務了解。行くぞ、ゼロ」

蓮は接近している2機の迎撃に向かった。

「遠距離戦用ISデュナメス、一撃離脱可変型ISキュリオス、しかもあの時と同じ遠隔操作か……」

アリーナ上空で待機して数秒後に、その2機が見えてきた。

2機はあの時の機体と同じく、光の粒子を放出していた。

「バスターライフルは使えないからな、近接戦闘しかないな」

風殺と風雷を展開して、戦闘態勢に入る瞬間、

「敵ISのスナイパーライフルの安全装置解除を確認、初弾装填――警告！ロックオンを確認――警告！――」

「ちっ」

蓮がさっきいた所にビームが通り過ぎて、キュリオスがビームサーベルを取出し斬り掛かり、蓮の風雷でビームサーベルを受け止めて、風殺の斬撃はキュリオスのシールドで止められつばぜり合いになった。

「また、お前らかファントムタスク」

「そう、私の名はシエル。死んでもらうわ、西城 蓮」

「あいにくまだ死ぬ気はない、消えてもらう」

「いいえ、消えるのはあなたよ」

そう言った瞬間、蓮の背中に衝撃が走った。

「ぐっ、忘れてたな。貴様の存在を」

「酷いなあ。私の存在忘れるなんて」

続けてデュナメスの射撃が蓮を襲う。

「くっ、鬱陶しい射撃だ」

蓮がデュナメスの射撃を避けている隙に、キュリオスがビームサーベルで斬り掛かる。

「ちっ」

蓮がキュリオスと斬りあうと、デュナメスがその隙に撃ち、デュナメスの射撃を避けている隙に、キュリオスがビームサーベルで斬り掛かるの繰り返しが続く。

「くっ、かなり辛いな」

「そう、なら死んでよ」

キュリオスが瞬時加速で一気に間合いを詰めて、ビームサーベルで斬り掛かる。

「言っただ。死ぬ気は無いと」

「え？」

キュリオスの斬撃が蓮にとどく前に、ビームサーベルが叩き落とされた。

「これで終わりだ」

「まだよ」

「ちっ」

蓮がキュリオスを斬り裂こうとした瞬間、キュリオスは消えた。

「何処見てるの？」

声が聞こえた方を見ると、あの時のエクシアと同じく、赤くなっていた。

「なぜだ？ ワンオフ・アビリティーの再現意図的にできないはずだろ？」

「私達の機体は特別なの」

モード・トランザムを発動したキュリオスの攻撃を、ギリギリ防いでいる。

「やるね」

「どうも。ぐっ」

再び蓮の背中に衝撃が走る。

「ちっ、邪魔だ」

蓮の後ろにはスナイパーライフルを持っているデュナメスがいた。

「クリス、織斑 一夏を捕獲して」

「了解！」

「行かせるかよ。ゼロシステム、完全開放！」

ゼロの胸部にある緑色の球体が光りだした。

「速い」

「ああ、スペックの5倍だからな」

残像ができる程のスピードで、キュリオスを圧倒するが、キュリオスも必死に耐えていた。

「終わりだ！」

蓮は瞬時加速で一気に間合いを詰めて、キュリオスを破壊した。

「次だ。……ゴホッ」

キュリオスを破壊し、次にデュナメスを破壊しに行こうとした時、蓮は血を吐いた。

「はぁ……はぁ……。次だ」

蓮は呼吸を整えて、アリーナに向かったデュナメスを追い掛けた。

＼蓮SIDE OUT＼

＼一夏SHDE＼

蓮からエネルギーを受け取り白式を展開した。

「い、一夏っ！」

いつの間にか、箒が来て弾かれたかのように口を開いた。



「死ぬな……。絶対に死ぬな！」

「何を心配してるんだよ、バカ」

「ばっ、バカとはなんだ！私はお前が——」

「信じろ」

「え？」

「俺を信じろよ、箒。心配も祈りも不必要だ。ただ、信じて待っていてくれ。必ず勝って帰ってくる」

「じゃあ、行ってくる」

「あ、ああ！勝ってこい、一夏！」

箒に勝利の約束をして、一夏は目の前の相手へと向かう。

「じゃあ、行くぜ偽物野郎」

一夏の手握り締めだ《雪片式型》が刀身を開く。

「零落白夜——発動」

柄から上には零落白夜のエネルギー刃が日本刀の形になった。

「……………」

黒いISが刀を振り下ろす。

「ただの真似事だ」

ギンッ！腰から抜き放って横一闪、相手の刀を弾く。  
そしてすぐさま頭上に構え、縦にまっすぐ相手を断ち斬る。

「ぎ、ぎ……ガ……」

ジジッ……と紫電が走り、黒いISが真っ二つに割れ、気を失うまでの一瞬であろう間に一夏とラウラの目があった。眼帯が外れあらわになった金色の左目。それはまるで捨てられた子犬の様な眼差しだった。

「……まあ、ぶっ飛ばすのは勘弁してやるよ。けど蓮がの事を知ったら、ぶっ飛ばされるかな？」

力を失って崩れるラウラを抱きかかえて、一夏は1人つぶやいた。  
その時アリーナ天井の遮断シールド撃つぬかれ、一部破壊されその真下に黒煙が立ち上っていた。

「！」

突然、黒煙の中からビームが通り一夏に直撃し、シールドエネルギーが尽きた。

「一夏、大丈夫？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

そして黒煙の中から遮断シールドを破壊した、ISが現れた。

「あれは……あの時のISに似ている」

そのISはフルスキンで色は緑で、唯一の共通点は光の粒子を放出していることだった。

「一夏、離れて」

そして、シャルルは緑色のISと戦闘を始めた。

「くっ、強い」

戦闘を始めて数分、シャルルが緑色のISに苦戦していた。  
そして、緑色のISのスナイパーライフルが直撃し、リヴァイヴの  
シールドエネルギーが尽き、リヴァイヴが光の粒子となって消えて、  
緑色のISのスナイパーライフルの銃口がシャルルに向けられる。

「シャルル！」

そして、スナイパーライフルの引き金を引こうとした瞬間、

「え？」

スナイパーライフルは破壊され、シャルルの前にはゼロを纏った蓮  
がいた。

「一夏SIDE OUT」

「蓮SIDE」

キュリオスを破壊して、デユナメスの破壊に移った。

「先生！遮断シールドの解除を」

『わかっている』

（間に合ってくれ……）

そう思いながらアリーナに向かった。

そして、デュナメスのスナイパーライフルの銃口がシャルルに向けられた。

「やらせるか……」

全速力でデュナメスに突っ込み、スナイパーライフルを破壊した。

「大丈夫か？シャルル」

「蓮……。うん、僕は大丈夫だよ」

「そうか。シャルル、離れてろ」

「わかった」

そして、シャルルはその場から離れた。

「行くぞ」

蓮は間合いを詰めて、デュナメスに斬り掛かり、デュナメスはビームピストルを装備して蓮との距離を保ちながら撃つ。

「ちっ」

蓮は瞬時加速で間合いを詰めて、風殺と風雷で斬り掛かった。

「ちっ、こいつもか……」

蓮の斬撃がデユナメスにあたる前に、デユナメスが目の前から消えた。

「……何処だ？ぐっ」

突然、蓮の背中に衝撃が走った。

―右スラスタ―破損、機動力1／2に低下―

「くっ、やるしかない。ゼロ……バーストモード――発動」

蓮は赤いオーラをまとっていた。

「行くぞ」

再び間合いを詰めるが、デユナメスに追い付かない。

（機動力1／2低下はきついな）

蓮はデユナメスに追い付けず、押され続ける。

「ちっ、こうなったら。ゼロシステム、第二開放！」

再びゼロの胸部にある緑色の球体が輝きだす。

「行くぞ、ゼロ」

「！」

蓮は一瞬でデュナメスの前に立っていた。しかも残像が少ししかなく、一瞬でビームピストルを破壊した。

「くっ」

デュナメスはその場から離れビームサーベルを取り出した。

「無駄だ」

蓮はデュナメスがビームサーベルを取り出す一瞬の隙に、斬り掛かるがギリギリで防がれた。

「何でいきなり、スピードが上がったの？」

「敵に情報を与えていると思ってるのか？」

「そうだね」

「終わらせる」

蓮はデュナメスをはねのけて、右手と左手を斬り落とした。

「これで……終わりだ！」

風殺と風雷でデュナメスを破壊した。

「蓮、終わったの？」

シャルルが蓮に近づいて聞いた。

「ああ、終わった。ゴホッ」

「だ、大丈夫？」

蓮は血を吐いた。

「バーストモード、ゼロシステム、発動限界時間到達、ISを強制待機状態に移行——とハイパーセンサーが知らせる。

「ああ、大…丈夫……だ」

ゼロが強制待機状態になり、蓮は意識を失って倒れるがシャルルに支えられた。

「2時間後」

「う……?」

「目覚めたか」

目が覚め、周りを見るとどうやら、保健室に運ばれてたようだ。

「先生、ゼロは？」

「ゼロはダメージレベルがCを超えていた」

「そうですか……」

体に激痛が走るが、蓮には関係なかった。

「ゼロシステムを立て続けに使うとは、無理しすぎだ。それとゼロシステムが壊れているぞ」

「そうですか……新しいゼロシステムを作らないと、いけませんね」

「バーストモードとゼロシステムを一緒に使ったんだ、シュミレーターでは5日は絶対安静だが……ある程度はいいらしい。ISの実習授業は免除してやるが、通常授業は出席するように」

そう言って、千冬は病室を出て行った。

「……ラウラ」

蓮が寝ていたベッドの隣のベッドにラウラがいた。

「お前は どうして強い？」

ラウラが突然聞いてきた。

「俺は強くない。あの人は強いって言うてるが俺はあの程強いな  
い」

そう言って、蓮は立ち上がる。



「お前……体はいいのか？」

「大丈夫だ。俺の体は異常だからな」

そう言って、蓮は杖を使って保健室を出て行った。

食堂に向かう前に、蓮は部屋に戻りある人に電話をかけた。

『——も、もすもす？ 終日？<sup>ひねもす</sup>はーい、みんなのアイドル・篠ノ之束だよ』

「久しぶりです。博士」

『うん、久しぶりだね！ れっくん。君が私に電話をかけるってことはゼロに何かあったかい？』

「ええ、ゼロのダメージレベルがCを超えました」

『ふーん、ということは私に修復して欲しいと？』

「それと、追加武装を作ることと、ゼロのカスタム化して欲しい。データを今送ります」

蓮は自分のノートパソコンでデータを送った。

『……いいのれっくん？ このスペックは異常だよ。篝ちゃんに渡す《紅椿》よりも』

「別にリミッターを付けてもかまいません。それに奴らを潰すために必要な力です。明日にはゼロが届くようにします」

『わかったよ。それじゃあ、《紅椿》と一緒に持ってくるよ。それ

と、体の方は大丈夫なのかい？」

「まあ、バーストモードとゼロシステムを一緒に使いましたが、あの程度の行動は大丈夫だと」

『まあ、お大事にね、じゃあまたね!』

と言って、ISの開発者。篠ノ之 東は電話を切った。

「さて、飯食いに行くか」

蓮は杖を使って食堂に向かった。

＼蓮SIDE OUT＼

＼東SIDE＼

「それにしても、れっくんの体はすごいねえ。バーストモードとゼロシステムを一緒に使ったのに、もうある程度は動けるなんて」

東はあの時、IS学園のコンピューターをハッキングして、蓮の戦いを見ていた。

バーストモードとゼロシステムを一緒に使った時の、シュミレートはした。しかし蓮はある程度の行動ができている。だがそのシュミレートは、東本人がした。シュミレートは完璧だったはずなのに、蓮はある程度の行動ができています。

「もしかしたら、れっくんの覚醒の時間が近いのかな？ 西城 優也」

＼東SIDE OUT＼

〈蓮SIDE〉

蓮が束に頼みごとを頼んで、今は学食。

「お前らもまだだったのか？」

「蓮、もういいの？」

「ああ、しばらくは杖使わないと歩けない」

そう言って、蓮はシャルルの隣に座り、夕食を食べはじめた。

「ふー、ごちそうさま。学食といい寮食堂といい、この学園は本当に料理がうまくて幸せだ。……ん？」

さっきまで蓮たちの食事が終わるのを心待ちにしていた女子一同がひどく落胆している。

「……優勝……チャンス……消え……」

「交際……無効……」

「……うわああああんっ！」

バタバタバターっと数十名が泣きながら走り去っていった。

「どうしたんだろうね？」

「さあ……？」

「知らん」

蓮と一夏とシャルルにはちんぷんかんぷんだった。

「……………」

女子が去った後に、箒が呆然と立ち尽くしていた。  
ひとまず一夏は箒のそばへと移動する。

「そういえば箒。先月の約束だが——」

「ぴくっ」

「そういう事か」

「え？なにが？」

シャルルが聞いてくる。

「先月に箒が一夏になにか言ったのを、誰かが聞いて言いふらした  
してるうちに、俺も巻き込まれたようだな」

「へー、蓮もモテるんだね」

「こっちにとっては、迷惑だ。それに一夏は、買い物かなんかと勘  
違いしてるだろうがな」

「付き合ってもいいぞ」

「——。——、なに？」

「だから、付き合ってもいいって……おわっ!？」

突然、一夏を締め上げる。

「ほ、ほ、本当、か？本当に、本当に、本当なのだな！？」

「お、おう」

「な、なぜだ？り、理由を聞こうではないか……」

「そりゃ幼なじみの頼みだからな。付き合うさ」

「そ、そうか！」

「買い物くらい」

「……………」

「やっぱりそうか……」

「そうだね……」

ぴきいっ！と箒の表情がこわばる。

「……………だろうと……」

「お、おう？」

「そんなことだろうと思ったわ！」

どげしっ！！！

「ぐはあっ！」

「ふん！」

腰のひねりを加えた正拳。

次にどごおっ！とうめく一夏のみぞおちにつま先がささる。

「ぐ、ぐ、ぐっ……」

「一夏って、わざとやってるんじゃないかって思うときがあるよね」

「な、なに？どういう意味だ、それは」

「さあね」

「自分で考えろ」

それから15分後に一夏が回復した。

「そういえばちょっと聞きたいんだが」

席に着いた一夏が話しかけてきた

「なんだ？」

「ISで会話って出来るのか？えーと、プライベート・チャンネルとは違う、なんか二人だけの空間、みたいなところでの会話なんだが」

「相互意識干渉だろ？操縦者同士の波長が合うと起こるってやつだ

ろ」

「おお、たぶんそれだ。しかし、波長……波長ねえ。なんかよく分からんって感じだな」

「ISにはよく分からない現象や機能がかなりの数あるよ。作った篠ノ乃博士は全機能を公表してない上に現在も失踪中だし、前に何かのインタビューで自己進化するように設定した部分があるから、本人も全部を把握するのは無理だって言ってた気がする」

「……一夏、2人だけの空間で会話って、ラウラとか」

「あ、ああ、そうだが……」

「まあ、どうでもいい。戻るぞ、シャルル」

「うん」

食器を片付け始めた。

「あ、織斑君に西城君にデュノア君。ここにいましたか」

「山田先生、どうしたんですか？」

「なんとですね！ ついについに今日から男子の大浴場使用が解禁です！」

「おお！ そうなんですか！？ てっきり来月からになるとばかり」

「それがですねー。今日は大浴場のボイラー点検があったので、も

ともと生徒は使えない日なんです。でも点検自体は終わったので、男子の3人に使ってもらおうって計らいなんですよー」

「ありがとうございます」「黙れ」ぐはぁっ！」

一夏がうるさかったので、膝蹴りを食らわしたが、それと同時に、体中に激痛が走った。

「お、織斑君、さ、西城君だ、大丈夫ですか？」

「蓮、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ」

「ともかくですね。3人は早速お風呂にどうぞ。大浴場の鍵は私が持っていますから、脱衣場の前で待っていますからね」

「はい！じゃあ早速、風呂に行きます」

そう言って、一夏は一足先に部屋に戻った。

「……シャルル」

「う、うん。困った……ね」

「仕方ない。アレでいくか」

「え？何か考えがあるの？」

「まあ、な」



蓮とシャルルは一夏の部屋に行った。

「蓮、シャルル、速く行こうぜ」

「ああ、そうだな。それと、すまん」

最後の言葉は聞こえなかっただろうが、一夏を気絶させた。

「悪いな一夏」

「本当に悪いことしたね」

「仕方ないだろう。行くぞ」

蓮とシャルルは着替えを取りに行き、大浴場に行った。

「あ、来ましたね。あれ？織斑君はどうしました？」

「一夏は後で来るでしょう。戻っていいですよ」

「そうですか。それじゃあどうぞ！」

幾分テンション高めの山田先生に見送られ、脱衣場のドアが閉まる。

「シャルル、風呂入ってこい」

「え？蓮はどうするの？」

「俺はシャワーで十分だ」

「でも、蓮に悪いよ」

「何のために一夏を潰した？」

「じゃあ、その。一緒に入らない？ 見なければいいし……ダメ？」

シャルルは上目遣いで蓮を見る。

「わ、わかった。俺が先に行くから、後でこい」

そう言って、蓮は大浴場に入った。

「はー、広くてよかった」

蓮は体を流して、湯船に入った。

カラカラカラ……

脱衣場の扉が開いた。

びたびたびた。

濡れたタイルの上を歩く音が聞こえる

「お、お邪魔します……」

蓮はつい声が聞こえた方を見てしまった。

その体にはタオルを当てているが、薄手のスポーツタオルで、その向こう側の肌色がうっすらと透けて見えていた。さらにボディライ

ンは逆光のせいで、はつきりくつきりと見えている。

「……あ、あんまり見ないで。蓮のえっち……」

「あ、ああ。すまん」

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続いた。

「俺は上がるからな」

「あ、待って！」

突然、大声で呼び止められた。

「そ、その話があるんだ。大事なことから、蓮にも聞いて欲しい……」

「……………わかった」

「その……前に言っていたこと、なんだけど」

「前ってのは、学園に残る話か？」

「そ、そう。それ。僕ね、ここにしようと思う。僕はまだここだっ  
て思える居場所を見つけれないし、それに……」

「そ、それに」

「……………」

なぜか、返ってきたのは沈黙だった。

ぴちゃん。

「きゃあっ!？」

「どうした!？」

「水滴が落ちてきて……………びっくりしただけ」

「そうか……………」

「……………」

「……………」

そしてまた沈黙が続く。

時折天井から落ちる雫が妙に大きく感じられた。

ちゅぷ……………。

「? シャルル？」

「こ、こっち見ちゃダメ! あっち向いてて!」

「すまん」

ぴとっ……と、蓮の背中にシャルルの手が触れてきた。

「じゃ、シャル——」

そのまま手は蓮を後ろから抱きしめる。

「蓮が、ここにいろってそう言ってくれたから。そんな蓮が居るから僕はここに居たいと思えたんだ」

「そうか……」

「それに、ね。もう1つ決めたんだ」

「もう1つ？」

「そう。僕のあり方。蓮が教えてくれたんだよ？」

「そうか……、シャルル」

「……違う」

「え？」

「……シャルロット」

「シャルロット……それが本当の」

「そう。それがお母さんがくれた、僕の本当の名前」

「……なあ、シャルロット」

「なに？」

「そろそろ出るから離れてくれ」

「あ、ああっ、うんっ！ そうだねっ！」

自分の状態を理解したのか、ばしやばしやと慌てて水音を立てながら蓮から離れた。

「俺が先に出る。後でこい。脱衣場に出たところで待つ」

蓮はそう言って、風呂場を出て着替え、脱衣場を出た。

「明日から徹夜でゼロシステムのデータ作らないとな」

そう思いながら、シャルロットが来るのを待っていた。それから部屋に戻ってしばらく他愛ない話をしたあと、眠りについた。

## 15話 朝のばか騒ぎ

「翌日」

朝のHRにはシャルロットの姿がなかった。

『先に行つて』と言つて食堂で別れた。

「み、みなさん、おはようございます……」

教室に入ってきた山田先生はなぜだかふらふらとしている。

「今日は、ですね……みなさんに転校生を紹介します。転校生とい  
いますか、すでに紹介は済んでいるといえますか、ええと……」

クラス全員もそこそこ反応したらしく、一斉に騒がしくなる。

「じゃあ、入ってください」

「失礼します」

聞き覚えのある声が聞こえた。

「シャルロット・デュノアです。皆さん、改めてよろしく願ひし  
ます」

クラス全員がぽかんとした。

「ええと、デュノア君はデュノアさんでした。ということでは  
ああ……また寮の部屋割りを組み立て直す作業が始まります……」

「え？デュノア君って女……？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「って、西城君、同室だから知らないってことは――」

「ちょっと待って！昨日って確か、男子が大浴場使ったよね！？」

ザワザワザワッ！教室が一斉に喧噪に包まれる。

バシーン！教室のドアが蹴破られたかのような勢いで開く。

「一夏あっ……！！」

鈴の顔は烈火の如く怒り一色だった。

「死ね……！！！」

「ここで死にたくない。蓮、すまん」

鈴のＩＳアーマー展開、それと同時に両肩の衝撃砲がフルパワーで開放される。

一夏は蓮を盾にして迎え撃つ。

（くそ、ゼロは今はない。どうする？）

為す術がなく、蓮は瞳を閉じた。

ズドドドドンッ！



「蓮、大丈夫？」

シャルロットの声が聞こえ、瞳を開いた。

衝撃砲が直撃する寸前に、シャルロットが助けてくれたようだ。

「ああ、大丈夫だ」

そして、盾を失った一夏は、ラウラが間に割り入ってAICで衝撃砲を相殺して助かった。

「助かったぜ、サンキュ。……っていうかお前のISもう直ったのか？ すごいな」

「……コアはかろうじて無事だったからな。予備パーツで組み直した」

「へー。そうなん——むぐっ!？」

いきなり、ラウラは一夏の胸ぐらを掴み、引き寄せて、キスした。

「!?!?!?!?!」

その場の全員があんぐりとしている。

「お、お前は私の嫁にする！ 決定事項だ！ 異論は認めん！」

「……嫁？ 婿じゃなくて？」

「日本では気に入った相手を『嫁にする』というのが一般的な習わ

しだと聞いた。故に、お前を私の嫁にする」

「あ、あつ、あ……！」

鈴は声にならない声をあげていた。

「アンタねえええっ！！」

ジャキン！再び衝撃砲が開く。

「待て！俺は悪くない！どちらかというと被害者サイドだ！」

「アンタが悪いに決まってるでしょうが！全部！絶対！アンタが悪い……！」

一夏は生命の危機を感じて、教室の後ろ側出口から脱出を試みる。

ビシュンッ——！

鼻先をレーザーがかすめ、おそろおそろ一夏はそちらに顔を向けた。

「ああら、一夏さん？どこかにおでかけですか？わたくし、実はどうしてもお話しなくてはならないことがあります。ええ、突然ですが急を要しますの。おほほほ……」

セシリアの手には『スターライトMk？』そして遅れて、ISアーマーが全身を包みこむ。

一夏は出入り口からの脱出を諦め、窓から脱出しようとする。

ダンッ！

目の前にいきなり日本刀が突き立てられた。

「……一夏、貴様どういふつもりか説明してもらおうか」

「待て待て待て！説明を求めたいのは俺の方で——おわあっ!？」

聞く耳持たん！とばかりに鋭い斬撃が襲いかかってき、宛先のない逃亡をはじめめる。

ぼすっ。

「ほへ？」

一夏は半ば自動化した動きで、顔を上げた。

「……………」

蓮がいた。

「……………」

「……………」

しばらく沈黙が続いた。

「一夏、人を盾にするとは、いい度胸だな」

「あのー……蓮？あれはだな、条件反射でやったことで、わざとし

たんじゃないし、そしてなぜ武器を持ってあるんだ？ゼロはないんだろ？」

「ああ、ゼロは今とある天才のところにある。それにこの銃はシャルロットに借りた」

蓮の手にはシャルロットが使っている五五口径アサルトライフル《ヴェント》だった。

そしてシャルロットは……

「一夏、人を盾にしちゃったらいけないよ」

パンッ！と軽く炸薬の弾ける音が響いて左腕の盾がパージされる。そこにあつたのは六九口径パイルバンカー『灰色の鱗殻』グレイスケール。通称『盾殺し《シールド・ピアース》』を出した。

「「「「さて、一夏<sup>さん</sup>！」「」「」」」

「は、はい！」

「「「「死ね！」「」「」」」

ドカアアアアンッ！！！！

と大きな音が鳴り響き、一夏は窓を突き破り飛んでいく。そして、蓮が追撃する。

「一夏、短い間世話になった」

そう言って蓮は、一夏に踵落としを食らわし、落下しているところ

をシャルロットに拾ってもらい、教室に戻った。

「なんだ？このほか騒ぎは」

と千冬が教室に入ってきた。

「で、織斑は何処だ？」

と聞かれたので、割れた窓の下を指差し、そこを千冬が見ているうちに、蓮は自分の席に戻ろうとした瞬間。

ぱしっ

千冬に首根っこを掴まれた。

「西城、なぜ地面に人型の穴がある？」

「知りません」

「そうか……。そういえば、お前はまだ事情聴取がまだだったな。では、生徒指導室に行くぞ」

そう言って千冬は、蓮を引きずって生徒指導室に向かった。

シャルロットの証言では、生徒指導室（地獄）から蓮らしき、悲鳴が聞こえたらしく、その後生徒指導室（地獄）から帰ってきた蓮は、魂が抜けていたらしい。

（蓮SIDE OUT）

## 16話 鬼のHR + 遅刻 Ⅱ 死

シャルロットSIDE)

「ゴメンね、手伝ってもらっちゃって」

「気にするな」

放課後の廊下、赤い夕日が差し込む中蓮とシャルロットは並んで歩いていた。2人は今月の学校行事である臨海学校について書かれているプリントを持っている。

「でも、よかったの？今日は一夏達と街に行くはずだったんでしょ？」

「別にいい。大体、シャルロットがいらないんなら行っても意味がない」

「えっ？」

「プリントの手伝いでも、好きな相手と一緒にいたいからだ」

そう言った蓮の頬がわずかに赤く染まっていた。

「蓮……」

「シャルロット……」

2人しかいない廊下でお互いに相手だけを映した瞳。そこに言葉はいらなかった。

オレンジ色の光景の中、2人の影が徐々に重なって――

「――あ、れ？」

ぼーっとした頭で状況を確認する。

場所はIS学園1年生寮の自室。時刻は早朝6時半。

「……………」

シャルロットはまだはつきりしない意識のままだったが、2回まばたきをしたところでやっと現状を把握した。

「夢……」

はああああ……つと深く深く深海二万マイルほどのため息が漏れる。

（ああ、せめてもう10秒くらい見れてれば……）

夢の残骸に思いを馳せ、その名残を惜しかむ。

シャルロットは先程まで見ていた夢をお気に入りビデオを見るような感覚で、もう一度頭の中で再生をする。

「……………」

ぼっ、とシャルロットが赤くなった。

（が、学校の廊下で、なんて……）

胸に手を当てると、ドキドキと早鐘を打っているのがわかる。

（ぼ、僕は何を考えてるんだろうね……）

先月の学年別トーナメント以降、本来の性別に戻り、今は蓮とは別々の部屋になっている。

けれど、1週間に2回くらいは今と同じような夢を見て、違うとわかってるのに隣のベッドに蓮の姿を求めて視線をやるのだった。

「あれ？」

隣のベッドにルームメイトの姿がない。

それも、最初からそのベッドは使った形跡がない。

「……まあ、いいや」

それよりも夢の続きである。今すぐ眠りにつけば、もしかしたら続きから見れるかもしれないと思い、シャルロットはまた眠りにつこうとまぶたを閉じた

（でも、せっかく夢なら、もうちょっとエッチな内容でも僕は全然構わな——）

「な、何を言ってるんだろうね、僕はっ」

カーッと赤くなった顔を隠すように頭のでっぺんまで布団を被ると、ドキドキと高鳴る心臓をなだめるのに苦心するシャルロットだった。

（シャルロットSIDE OUT）

（一夏SIDE）

「ん……………」



窓の外では早く入れろとばかりに朝日が差している。

ふにふにゆっ。

「ん………」

この部屋に聞こえるはずのない声が聞こえた。  
一夏は蓮と同じ部屋になっている。

（この部屋には、俺と蓮しかいないはずなのに、女の声が聞こえたぞ）

何か、予感めいたものが一夏の脳裏をよぎり、がばっ！と布団をめくる。と、そこには――

「ら、ら、ラウラ！」

ドイツの代表候補生、ラウラ・ボーデヴィツヒ。しかも衣服を纏っていない。身につけているのは左目の眼帯と待機形態のIS――右太ももの黒いレッグバンドのみ。長い銀髪が腰のラインをかなでている。

「ん……。なんだ……？朝か……？」

「ば、バカ！隠せ！」

「おかしいことを言う。夫婦とは包み隠さぬものだと言いたぞ」

「それはそうかもしれんが……って違うわ！服着ろ、服！」

一夏の混乱はそっちのけ、ラウラは一度目をこするとそれだけでいっつもと同じ顔立ちになる。

「日本ではこういう起こし方が一般的と聞いたぞ。将来結ばれる者同士の定番だと」

「……お前に間違った知識を吹き込んでいるやつは誰なんだ？」

一夏が困り果てる中、突然一夏の頭の脳裏に名案が浮かぶ。

「ラウラ」

「なんだ？」

「俺は奥ゆかしい女が好きなんだ」

「ほう」

すこし驚いたようにわずかに目を開くラウラ。続けて、言葉を噛みしめるように2回うなづく。

「だがまあ、それはお前の好みだろう？」

「え？」

「私は私だ」

心の在処を指し示すように胸に手を当てる。

「……………」

「だ、大体、お前が言ったことではないか……好きなようにしろと言ったくせに……卑怯だぞ……」

堂々と胸に当てていた手も、今はまるで一夏の視線から隠しているかのように見える。

「か、隠せと言った割りにはご執心なようだが？」

「なっ……！？ば、バカ！違う！そうじゃない！」

「で、では、見たいというのか？朝から大胆なやつだな、お前は……」

「だあっ！待てい！」

シーツをゆるめたラウラに一夏は慌てる。また隠させようとするのだが、ひらりとかわされて一夏はベッドの上ですんばたと狭いながら大立ち回りをさせられてしまう。ちなみに現在早朝朝6時過ぎ。

「このっ……！」

なんとかシーツの端を掴んでラウラの動きを取り押さえた、はずなのだが、一夏が上になった体勢を逆手にとって足払いをされた。

「お前はもう少し組み技の訓練をすべきだな。し、しかし、そうだな……。ね、寝技の訓練をしたいというのなら、私が相手になってやらないでもないが……」

そう言ってラウラは頬を赤らめる。

「ば、バカ！女がそういうことを口にするな！」

「ほう。お前の口から言いたいのだな？よ、よかろう」

「違う！ってか蓮、助けてくれ！」

と一夏はルームメイトの蓮に、助けを求める。

「……………」

しかし、蓮は一夏を見向きもせずキーボードを叩いている。

コンコン。

「い、一夏、いるか？せっかくだし朝食と一緒にしようかと思うのだが」

箒が一夏を誘いに来た。

「一夏？寝ているのか？もう起きないと朝食に間に合わないぞ」

二度目の呼びかけにも返事がなく、思い切ってドアノブに手をかけると、鍵がかかってなく部屋に入った。

「入るぞ、一夏。早く起きて支度を――」

「げ」

「む？」

びしり。箒の表情が、動きが、全身が固まる。

只今の状況。

ラウラは一夏の唇を奪おうと覆い被さっている。

一夏は抵抗らしい抵抗を見せてない。

蓮は一夏たちを見向きせずキーボードを叩き続けている。

「一夏あっ！ななっ、何をしているかこの軟弱者っ！」

しゅらん、と箒は一息で真剣を抜刀。一夏に向ける。

「な！？待て、箒！これは違うぞ！」

「何が違うというのだ、何が！ええい、おとなしく斬られろ！」

「だああっ！やめろ、やめろってバカ！」

「バカとはなんだ、この大バカ者があっ！」

「だああっ！蓮、助けてくれ！……って蓮は何処だああっ！」

一夏が蓮に助けを求めるが、蓮はすでに部屋を出ていた。

その後、早朝のドタバタ騒ぎは寮長の山田先生が大あわてで飛んで来て静められた。

（一夏SIDE OUT）

（蓮SIDE）

時間が過ぎ、場所は変わって、1年寮食堂にいる。  
ちなみに左隣に一夏。一夏の左隣にラウラ。一夏の正面に箒が座っている。

そしてまた部屋の時よりはマシだが、3人が騒がしかった。

（こいつらのせいで、予定が狂った。仕方ないか……）

と思いながら、朝食を食べる。

「わああっ！ち、遅刻っ……遅刻するっ……！」

声の主はばたばたと忙しそうに食堂に駆け込んできて、余っている定食からとりあえず一番近くにあったものを手に取り、蓮の右隣に座る。

「珍しいな」

「う、うん、ちょっと……その、二度寝しちゃったから……」

シャルロットは急いで食べている。

「そういえば、蓮って昨日の夜からずっとなんかしてなかったか？」

突然一夏が聞いてきた。

「ああ、昨夜から新しいゼロシステムを作っている」

「って言うことは、寝てないのか？」

「え？蓮って昨夜から寝てないの？ダメだよ。ちゃんと寝ないと」

「10分だけ寝ている」

「いや、10分はおかしいだろ」

キーンコーンカーンコーン。

予鈴が鳴った。

「うわあっ！い、今の予鈴だぞ、急げ！」

一夏が慌てて立ち上がった時には一夏1人で、蓮、箒、ラウラ、シヤルロットはすでに食堂を出て猛ダッシュしていた。

「お、置いていくな！今日は確か千冬姉——じゃない、織斑先生のHRだぞ！」

千冬のHR　＋　遅刻　＝　死  
という感じになる。

「私はまだ死にたくない」

「右に同じく」

「お前もさっさとこい」

「ごめんね、一夏」

生徒玄関へと到着した。

「ぐっ……」

突然、体中に激痛が走った。

（くそ、まだ無理があるか……）

「蓮、大丈夫？」

「ああ、大丈夫だ。シャルロット、行くぞ」

「え？／＼」

リミッターを2つ外して、シャルロットをお姫様抱っこをして、あつという間に3階に到達した。

「着いたぞ」

「え？あ、ありがとう／＼」

「おう、朝からご苦労なことだ」

なぜか、千冬が教室にいた。

「言ったはずだ。許可なく外したら、どうなるか分かっているなと」

すばあんっ！

千冬の本気の出席簿アタックを食らい、蓮は気絶した。  
ちなみに箒とラウラはその隙に着席。一夏はその後に着席した。



「西城とデュノアは放課後教室を掃除をしておけ。二回目は反省文提出と特別教育室での生活をさせるのでそのつもりでな」

「はい……」

その後、シャルロットは蓮を席に運んだ。

キンコンカンコン。

チャイムが鳴りHRが始まると同時に、蓮が目覚めた。

（（（あれを受けてすぐに起きるなんて、本当に人間なの？）（（（（（

とクラスメイト一同は思った。

「俺の体は異常だからな」

（（（（心読まれた！）（（（（（

何で。とクラスメイト一同が思いながらも、HRが始まる。

「今日は通常授業の日だったな。HR学園生とはいえお前達も扱いは高校生だ。赤点など取ってくれるなよ」

IS関係の授業よりは少ないが、一般科目の授業もある。そしてテスト中間がなく期末が存在する。そのときに赤点を取ると夏休みを補修で過ごさなければいけなくなる。

「それと、来週から始まる校外特別実習期間だが、全員忘れ物などするなよ。3日間だけとはいえ学園を離れる。自由時間もあるが羽目を外し過ぎないように」

7月には臨海学校があり、3日間のうち初日はフルで自由時間のため、無駄にテンションが高い。

「では、これでHRを終了する。本日も各人しっかりと勉学に励め」

今日は山田先生が居ないのは、臨海学校の下見に行っているかららしい。そのため山田先生の授業を千冬が受け持つらしい。しかし、それは蓮にとってはどうでもいいことだった。

・放課後・

あれから時間が過ぎ、今日全ての授業が終わり、蓮とシャルロットは教室の掃除をさせられている。

「迷惑かけた」

「そんなこと無いよ。どのみち遅刻だったし」

「そうか……」

「それに……2人きりになりたかったから……」

「何か言ったか？」

「な、何でもないよ／＼／」

最後は小声で言ったため蓮には聞こえずシャルロットは慌てて取り繕い机を運ぼうとした。

「ん、んんゝ！」

「無理するな。俺が運ぶ」

シャルロットが運ぼうとしているのは、教科書全部置きっぱなしの机だった。

「へ、平気だよ。一応これでも専用機持ちなんだし、体力は人並みに――」

と、言葉が続けたシャルロットは重量に負けて足を滑らせる。蓮はとっさに後ろから体を支えた。

「無理するな」

「う、うん……。あ、ありがとう」

後ろ側に滑ったシャルロットを背中から支えたので、ちょうど抱きしめるかのような格好になっている。

「悪い。離れる」

「あ……。別に、よかったのに」

「何か言ったか？」

「な、なんでもないっ」

「そうか……」

そして掃除を終え、2人は寮に戻った。

く連SIDE OUTく

## 17話 西城 蓮の睡眠時間の報告

＼一夏SIDE＼

23..30

（これより西城 蓮の睡眠時間を測定します。現在対象は作業中）  
なぜ一夏がこんな事をしているのかと言うと、今日の夕食の後にシヤルロットに頼まれた。しかも盾殺し《シールド・ピアース》で脅しながら。

00..00

（ええと、対象は未だに作業中……眠い）

蓮は黙々と作業を続け、一夏は睡魔に襲われながらも耐える。

00..30

（アイツ何時になったら寝るんだ？）

キーボードを叩く音が部屋に響く。

（そういえば、新しいゼロシステムを作っているって言ってたな。  
どんなものなんだ？）

01..00

（早く寝てくれ。俺も寝たい）

一夏の願いがかなったのか、作業をやめて寝始めた。

（ええと、01..00より睡眠を確認。時間測定を始める）

一夏はストップウォッチを押した。

（只今5分経過。状況に変化無し）

一夏は蓮のノートパソコンのディスプレイを見た。

「なんだこれ？」

一夏の目の前には意味のわからない配列が並べられていた。

（そろそろ10分だな）

手元のストップウォッチはもうすぐ10分になろうとしていた。  
すぐさま、一夏はベッドに潜り込んだ。

01..10

それからさらに5分がたち、蓮が目覚めて作業を再開した。

（10分経過。対象起床、作業を再開。すげえ、マジで10分しか  
寝てない）

03..00

あれから2時間近くがたった。

（ええ、対象はシャワールームに入室。……俺はいつまで起きればいいんだ？）

シャワールームから水音が響く。

03..05

再び一夏はノートパソコンのディスプレイを見た。

「うわあっ！」

一夏が見たのは、さらに複雑な配列が並べられていた。

「うっ……」

意味のわからない配列を見て一夏は、気分が悪くなりベッドに潜り込んだ。

03..10

それから5分が経ち、シャワールームから水音が聞こえなくなった。

（対象はシャワールームから退室。……ああ、今日は水着買いに行かないと）

と、一夏は思った。もうすぐ臨海学校で初日は一日中自由時間で、一夏は泳ぎたいらしい。

蓮も同じ思いだろうが、今はゼロシステムを完成させるのが最優先なのだろう。

03..30

（対象は只今作業中。状況に変化無し）

04..30

あれから1時間が経った。

（対象は作業を中断。読書を開始）

06..00

あれから1時間半が経った。

（対象は読書をやめて作業を再開……ああ、6時になっちゃまった。早く寝たい）

06..30

（対象は作業続行中。……ああ、めっちゃくちゃ眠い）

07..30

あれから1時間が経ち、蓮が部屋を出た。

（対象は部屋を退室。おそらく朝食に向かった模様。……もう無理……寝る）



一夏は寝てしまった。

以上が織斑 一夏の西城 蓮の睡眠時間の報告である。因みに、3  
時間後にラウラに叩き起こされた。

＼一夏SIDE OUT＼

## 18話 買い物

（何故だ。何故このような状況になっている）

ただいまの状況。

場所は試着室。

中にいる人物は、蓮とシャルロット。

シャルロットは水着に着替えている。

蓮はシャルロットに背を向ける。

取り敢えず回想を入れます。by 作者

「数十分前」

「さっさと必要なものを買うか……」

週末の日曜に来週からはじまる臨海学校の準備をするため、街に来ていた。

（このままだと、ゼロシステムが予定通りに完成するか心配だな）

と、思いながらいつの間にか、水着売り場についていた。

「さっさと買って帰るか……」

IS学園に入る前から束の助手をしていたため、そこそこ金を持っている。

「これでいいか……」

蓮はシンプンな黒色の水着を買い、学園に帰ろうとした。

「そのあんだ」

「ん？」

「その水着、片付けておいて」

と、見ず知らずの相手からいきなり言われる。

「自分でやれ」

「ふうん、そういうこと言うの。自分の立場がわかってないみたいね」

そう言って女性客は警備員を呼ぼうとする。

「あっ、蓮！そこに居たんだ。もう、時間になっても来ないから探したんだよ」

ちょうどいいタイミングでシャルロットが来た。

「あんたの男なの？ 舐くらいしっかりしなさいよね」

と、女性客が言った瞬間、蓮は女性客を殴りたくなった。

「まったく、これだから男は……」

そんなことをぶつぶつ言いながら女性客は立ち去っていった。

「すまない。助かった」

「そんなの当然だよ。あ、そうだ。ちよつと来て」

「？」

と、シャルロットは蓮の手を引っ張り、試着室に入っていった。

「……どういことだ」

「その……水着を見てほしくて。す、すぐ着替えるから待ってっ」

「だったら1度外に――」

「だ、ダメ！」

と、呼び止められる。

「だ、大丈夫。時間はかからないから」

言うなり、シャルロットはいきなり上着を脱ぎ出した。

「おわあっ!？」

蓮は慌ててシャルロットに背を向け、シャルロットは水着に着替え始めた。

ここで回想終了です。by 作者

「い、いいよ……」

「あ、ああ……」

見てもらうために着替えたので当然なのだが、早速蓮の視線を体にかけてシャルロットは落ち着かなくなる。

シャルロットが着ている水着は、セパレートとワンピースの中間のようなもので、色は夏をイメージしたようなイエローで、正面は胸の谷間を強調するようになっている。

「どう……かな？」

「い、良いと思う」

「じゃ、じゃあ、これにするねっ」

「あ、ああ。俺は出る」

今度はシャルロットに引き留められる前に試着室を出ようとドアを開けた。

「……ここにも馬鹿が一匹」

「え？」

ドアを開けた場所に立っていたのは千冬と山田先生だった。その後ろには、千冬に捕まった一夏とラウラがいた。

「はあ、水着を買いにですか。でも駄目ですよ、二人で試着室に入るのには感心できませんよ。教育的にもダメです」

「」「はい……」「」

4人は正座をして、山田先生に説教されていた。

「ところで山田先生と千冬ね——織斑先生はどうしてここに？」

一夏が話題を逸らした。

「私たちも水着を買いに来たんですよ。あ、それと今は職務中ではないですから、無理に先生って呼ばなくても大丈夫ですよ」

「そろそろ出てきた方がいいんじゃないか？」

どこからかギクツという音が聞こえた。

「そ、そろそろ出てこようかと思ってたのよ」

「え、ええ。タイミグを計っていたのですわ」

というわけで柱の影から、鈴とセシリアが出てきた。

「なにをこそそしているかと思って、ずっと気になってたんだがな」

「女子には男子に知られたくない買い物があるの!」

「そ、そうですわ! まったく、一夏さんのデリカシーのなさにはいつもながら呆れてしまいますわね」

一夏は聞かなきゃ良かったと思った。

「さっさと買い物を済ませて退散するでしょう」

ふう、とため息混じりにそういったのは千冬だった。

「あ、あー。私ちょっと買い忘れがあったので行ってきます。えーと、場所がわからないので鳳さんとオルコットさん、ついてきてください。それにデュノアさんとボーデヴィツヒさんも」

山田先生は何かひらめいたのか、生徒4人を連れてどこかに行った。

「……まったく、山田先生は余計な気を遣う」

「え?」

「ふう……。言っても仕方ない、か。一夏、蓮」

「なんででしょうか? 織斑先生」

「な、なんですか？ 織斑先生」

一夏は久しぶりに下の名前を呼ばれたので、どうにもぎくしゃくした反応を返してしまう。

「今は就業中ではないからな、名前でいい。私たちはこの場ではただの姉弟だろう。まあ、1人は義理の弟だがな」

どうも、姉弟水入らず（1人は義理の弟）——ということらしい。

「で、一夏、蓮。どっちの水着がいいと思う？」

2人に見せたのは、セクシーな黒水着と、機能的重視の白水着の2つ。

（（これは……黒だな））

と、2人の意見が合致した。

「——白の方」

「黒」

一夏はなるべく平然を装っていたようだが、千冬にはお見通しだった。

「黒の方か」

「いや、白の——」



「諦めろ一夏」

「そうだ。お前は昔から気に入った方を注意深く見るならな」

あっさりと見抜かれた一夏は、少々落ち込んだ。

「まったく、弟が余計な心配をするな。大体、私がその辺りにいる程度の男になびくような女に見えるか？」

「いや、見えないけど……。でも千冬姉、彼氏とか作らないのか？  
そういう話、1度も聞いたことないしさ」

「手のかかる第二人が自立してから考える。で、お前の方はどうな  
んだ？」

「え、俺？何が？」

「何が何も、お前は彼女を作らないのか？そうだな……。ラウラ  
なんかはどうだ？色々問題はあるだろうが、あれで一途なやつだ  
ぞ。容姿も悪くはあるまい。それにキスした仲だろ？」

狼狽する一夏を見て、さっきまで苦笑だった千冬はいつの間にか微  
笑をたたえていた。

「まんざらでもないか？」

「いや、そういうのはなんつうか、まだよくわかんねーって……」

「ふむ、そうか。容姿は好きな方か？嫌いな方か？」

「それも……うーん。まあ、その、可愛くはありと思うけどさ」

「ほう」

「ラウラは可愛いよ——って、何を言わせるんだよ！」

「勝手に言ったのはお前だろう」

「うぐ、そ、それより蓮はどうなんだ？」

突然一夏がふってきた。

「何がだ？」

「彼女を作らないのかって話だ」

「そうだな……。シャルロットはどうなんだ？ さっき試着室に一緒に入った仲だろう？」

少し前の一夏と同じく、狼狽した。

「それで実際どうなんだ？ その馬鹿と違って、シャルロットの気持ちに気付いているんだろ？」

「はい」

「どうなんだ？ 付き合わないのか？」

「巻き込みたくないんです」

「どういうことだ？」

「それはあなたが生きていくために、必要な情報ですか？」

「「……………」」

しばらく沈黙が流れた。

「俺は先に帰らせてもらう」

と、言って蓮は2人の前から立ち去った。

蓮SIDE OUT

一夏SIDE

「千冬姉。蓮に何があったんだ？」

一夏は蓮の『巻き込みたくない』の意味がわからなかった。

「私にもわからん。ただ——」

「ただ？」

「ただ言えることは、あいつは私たちが知らない闇を知っていることぐらいだ」

と、言って千冬はレジの方に歩いていった。

19話 臨海学校1日目 午前 7月のサマーサターン降臨!?

「海っ! 見えたあっ!」

トンネルを抜けたバスの中でクラスの女子が声を上げる。  
一方蓮はと言うと

「zzz……」

バスに乗ってからずっと、シャルロットの隣で寝ている。  
左手首にシャルロットが付いているブレスレットは、昨日の買い物で蓮にプレゼントしてもらったらしい。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

千冬の言葉で全員がさっとそれに従う。

言葉通りほどこなくバスは目的地である旅館に到着た。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「「よろしくお願いします」」」

千冬の言葉が終わると同時に全員が挨拶をする。この旅館は毎年使われているようで、着物姿の女将さんがお辞儀を返してきた。

「はい、こちらこそ。今年の1年生も元気があってよろしいですね」  
外見から想像できる年齢は三十代。しっかりとした大人の雰囲気

纏っている。

「あら、こちらが噂の？」

ふと、蓮と一夏と目があつた女将さんが千冬に尋ねた。

「ええ、まあ。今年は2人男子が居るせいで浴場分けが難しくなつてしまつて申し訳ありません」

「いえいえ、そんな。それに、2人ともいい男の子じゃありませんか。2人ともしっかりしてそうな感じを受けますよ」

「コイツ（蓮）はともかくアイツ（一夏）はそういう感じがするだけですよ」

千冬は一夏の頭を押さえる。

「お、織斑一夏です。よろしく願ひします」

「西城蓮です。よろしく願ひします」

「ご丁寧にどうも。清洲景子です」

女将さんの名前は清洲景子というらしい。再度、こちらに向けて丁寧なお辞儀をしてきた。

「不出来の弟でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生ったら、弟さんにはずいぶん厳しいんですね」

「コイツ（蓮）にくらべて、いつも手を焼かされていますので」

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになってますから、そちらをご利用ください。場所がわからなければ従業員に訊いてくださいまし」

女子一同は、はーいと返事をする。と旅館の中へと向かう。

「織斑、西城、お前たちの部屋はこっちだ。ついてこい」

千冬に呼ばれ、ついていった。

「えーっと、織斑先生。俺たちの部屋ってどこになるんでしょうか？」

「黙ってついてこい」

いきなり言論封殺され、黙ってついていった。

「ここだ」

「え？ここって……」

「……………」

ドアにばんと張られた紙は『職員室』と書いている。

「最初は個室という話だったんだが、それだと絶対に就寝時間を無視して女子が押しかけるだろうということになってだな」

はあ、とため息をついて千冬は続ける。

「結果、私と同室になったわけだ。これなら、女子もおいそれと近づかないだろう」

「そりゃまあ、そうだろうけど……」

「一応言っておくが、あくまでも私は教員だということを忘れるな」

「はい、織斑先生」

「了解」

「それでいい」

部屋の中に入る許可が下り、部屋に入った。

「一応、大浴場も使えるが男のお前たちは時間制だ。本来ならば男女別になっているが、何せ1学年全員だからな。お前たち2人のために、他が窮屈な思いをすることはおかしいだろう。よって、一部の時間だけ使用可能だ。深夜、早朝に入りたければ部屋の方を使え」  
「わかりました」

「了解」

「さて、今日は1日自由時間だ。荷物も置いたし、好きにしろ」

「えっと、織斑先生は？」

「私は他の先生との連絡なり確認なり色々がある。しかしまあ――」

ごほん、と咳払いする。

「軽く泳ぐくらいはするとう。どこかの弟2人がわざわざ選んでくれたものだしな」

「そうですか。蓮は？」

「俺はゼロシステムの調整をする」

そう言って蓮はノートパソコンをカバンから出して、作業を始めた。  
コンコン。

「織斑先生、ちょっとよろしいですかー」

「ええ、どうぞ」

その返事を聞いて山田先生がドアを開ける。そうすると、ちょうど入り口からの直線上に立っていた一夏と目があった。

「わあっ、織斑君！」

「いや、そんなに驚かなくても……」

「ご、ごめんなさい。つつい忘れていました。織斑君と西城君は織斑先生のお部屋でしたね」

「山田先生。確かこれはあなたが提案したことだったはずだが？」



「は、はいっ。そうです、はいっ。ごめんなさい！」

山田先生は千冬のじろりとした視線を受けた。

「さて織斑、私たちはこれから仕事だ。どこへでも遊びに行つてこい。それと西城、お前もさっさと作業を終わらせて遊びに行つてこい」

「了解」

「はい。それじゃあさっそく海にでも」

「羽目を外し過ぎんようにな」

千冬の注意にもう一度ちゃんと返事をして、一夏は部屋を出た。

「……………」

「……………」

一夏と箒は更衣室のある別館へ向かう途中にばったり出くわした。そして2人の目の前に珍奇な光景が広がっている。道ばたにウサギの耳が生えていて、しかも『引っ張ってください』という張り紙が貼ってあった。

「なあ、これって――」

「知らん。私に訊くな。関係ない」

言い切る前に即否定された。

「えーと……抜くぞ？」

「好きにしろ。私には関係ない」

そう言ってすたすたと歩き去ってしまった。

1人残された一夏は、仕方なくそのウサミミを思いっきり引っ張った。

すぽっ。

「のわっ!？」

力の余った一夏は盛大にすっころぶ。

「いてて……」

「何をしていますの？」

「お、セシリアか。いやな、今このウサミミを――あ」

「!?!い、一夏さんっ!」

一夏の視線に気がついたセシリアは、ばばっとスカートを押さえて

後ずさる。

「す、すまん。その、だな。ウサミミが生えていて、それで……」

「は、はい？」

セシリアは素っ頓狂な声で訊き返す。

「いや、東さんが――」

キイイイイン……………ドカーカーン！

謎の飛行物体は盛大に地面に突き刺さった。しかもその見た目は――

「「に、にんじん……………」」

「あっはっはっ！引っかかったね、いっくん！」

ぱかっとなんて二つに割れたにんじんの中から笑い声とともに登場したのは、件の天才・篠ノ之東だった。

「やー、前はほら、ミサイルで飛んでたら危うくどこかの偵察機に撃墜されそうになったからね。私は学習する生き物なんだよ、ぶいぶい！」

束の格好は不思議の国のアリスでそのアリスが来てそうな青と白のワンピース。束は一夏の手からウサミミを受け取って装着した。

「お、お久しぶりです、束さん」

「うんうん、おひさだね。本当に久しいねー。ところでいっくん。箒ちゃんどれっくんはどこかな？」

「えーと……。蓮は職員室で箒は……」

「まあ、この私が開発した箒ちゃん探知機ですぐ見つかるよ。じゃあねいっくん。また後でね！」

すったったーと走り去った。

「い、一夏さん？今の方は一体……」

「束さん。箒の姉さんだ」

「え……？ええええっ！？い、今の方が、あの篠ノ之博士ですか！？現在、行方不明で各国が探し続けている、あの！？」

「そう、その篠ノ之束さん」

そこでセシリアの背中にサンオイルを塗る約束をして、更衣室に向かった。

＼一夏SIDE OUT＼

＼蓮SIDE＼

時間帯はだいたい鈴が溺れて一夏が助けるところ辺り。

「これで完了だな」

「完成したのか？」

部屋にいた千冬が聞いてきた。

「8割りほどです」

「あとの2割は？」

「機体にインストールいて、最終調整です」

「そうか、お前もさっさと遊びに行ってこい」

「了解」

蓮は部屋から出て別館の更衣室に向かった。

「やあ、れっくん」

「どうも、篠ノ之博士」

場所は一夏がウサミミを抜いたところで、その場所にはまだにんじ  
んが突き刺さっていた。

「それでゼロは？」

「完成したよ。ゼロシステムはどうなの？」

「8割りほどです」

「そう、後はインストールして最終調整だね。んじゃ明日『紅椿』

と一緒に持ってくるから」

そう言って東は去って行った。

着替えて海に行く途中に高速で走るラウラとすれ違った。

「あ、蓮、こっちこっち」

シャルロットが蓮を見つけると蓮を呼んだ。

「ビーチバレーやろうよ」

「ちょうど1人かけたから入ってくれ」

「了解した。それでルールは？」

「タッチは3回まで、スパイク連発禁止、キリのいい10点先取で1セットだ」

「わかった。始めるぞ」

「ふっふっふっ。7月のサマーデビルと言われたこの私の実力を…  
…見よ！」

いきなりのジャンピングサーブ。しかもスピードといい角度といいなかなかだ。

「任せて！」

そう言ってシャルロットはレシーブした。



この日蓮は7月のサマーサターンと言う異名を与えられた。  
結果は蓮（7月のサマーサターン）の活躍により、ぼろ勝した。

「す、すごいね。蓮」

「そうか？ 訓練次第でできるようになる」

「いや、絶対無理だから！」

「そろそろお昼の時間だな。シャルロットは「あの、無視！？ 無視  
なんですか！？」 黙れ」

一夏がうるさかったので片手で顔面を掴み、海に向けて一夏を投げ  
た。

「そろそろお昼の時間かな？ 蓮、午後はどうするの？」

「しばらく休んでからまた海に出る」

「そっか。じゃあお昼に行こ。それと蓮と一夏って結局どこの部屋  
だったの？」

「あー、それ私も聞きたい！」

「私も私も！」

「俺たちは——」

「——俺たちは織斑先生の部屋だ」



と、いつの間にか帰ってきた一夏が言うと、さっきまでワクワクとした顔をしていた女子一同がぴしっと凍り付いた。

「だからまあ、遊びに来るのは危険だな」

「そ、そうね……。で、でも織斑君と西城君とは食事時間に会えるしね！」

「だね！わざわざ鬼の寝床に入らなくても——」

「誰が鬼だ、誰が」

一同ギギギギ……と軋んだ動作で首を動かした。

「お、お、織斑先生……」

「おう」

千冬は蓮と一夏が選んだ水着を着ており、女子一同を色んな意味で圧倒した。

「……一夏、鼻の下伸びてる」

「なっ……！？しゃ、シャルロット？何を言ってるんだよ。ははは……」

「見とれてたくせに」

「一夏はシスコンで、織斑先生はブラコンだからな」

と、言った瞬間――

ぱしっ

「西城、何か言ったか？」

千冬に片手で顔面を掴まれた。

「い、いえ、何も」

「そうか」

「え？」

蓮は拘束を解いてくれるのかと、思ったがそのまま海に向かって投げた。

「そら、お前たちは食堂に行って昼食でもとってこい」

「先生は？」

「私はわずかばかりの自由時間を満喫させてもらおうでしょう」

その言葉通り、教師陣にはほとんど自由時間がないのだろう。

「じゃあ、俺たちは昼飯に行ってきます」

「集合時間には遅れるなよ」

「はい」

「了解」

(い、いつの間に?)

と、それだけ言って蓮と一夏とシャルロットは別館へと向かった。

## 20話 臨海学校1日目 午後

時間はあつという間に過ぎ、現在7時半。大広間3つを繋げた大宴会場で蓮たちは夕食を取っていた。

「うん、うまい！昼も夜も刺身が出るなんて豪勢だなあ」

「そうだね。ほんと、IS学園って羽振りがいいよ」

そう言ってうなずいたのは蓮の左隣のシャルロット。

夕食のメニューは刺身と小鍋、それに山菜の和え物が2種類。それに赤だし味噌汁とお新香。

「あー、うまい。しかもこのわさび、本わさじゃないか。すげえな、おい。高校生のメシじゃねえぞ」

「蓮、本わさって何？」

「本物のわさびをすりおろしたもののことだ」

「えっ？じゃあ、学園の刺身定食でついてるのって……」

「あれは練りわさびで、ワサビダイコンとかセイヨウワサビなどが原料だ。着色したり、合成したりして見た目と色を似せたものだ」

「ふうん。じゃあこれが本当のわさびなんだ？」

「そう。でも練りわさでも最近はおいしいのが多いぞ。店によっては本わさと練りわさを混ぜて出したりするから」

と、蓮の説明したあと、一夏がつけたしの説明をした。  
ちなみに一夏は蓮の右隣。

「そうなんだ。はむ」

（おい、さっきこいつ何を食った？）

「っっっっっ！！」

案の定、シャルロットは鼻を押さえて涙目になった。

「大丈夫か？」

「ら、らいひょうぶ……」

鼻声で返事をしながら、にこりと笑顔を浮かべようとするシャルロットだったが、その笑顔は涙目に崩れていまいち決まっていなかった。

「ふ、風味があって、いいね……。お、おいしい……。よ？」

蓮はシャルロットの優等生ぶりに少々呆れていた。

「っ……う………」

ちなみに一夏の右隣ではセシリアがさっきからずっとうめいている。

「大丈夫か？セシリア。顔色良くないぞ」

「だ……い……よう、ぶ……ですわ……」

次第にプルプルと震えだしたセシリアは、英国人としてのプライドなのかなるべく平然を装って箸を手にした。

「い、いただき……ます……」

味噌汁を飲むものにも難儀している。

「お、おいしい……ですわ、ね……」

どう見ても無理をしているように見える。

「セシリア、正座が無理ならテーブル席の方に移動したらどうだ？  
うちのクラスでも何人か行ってるし、別に恥ずかしくないだろ」

ちなみにその多国籍や多民族・多宗教というのを考慮して、正座ができない生徒は隣の部屋にあるテーブル席が利用できる。

「へ、平気ですわ……。この席を獲得するのにかかった労力に比べれば、このくらい……」

「？」

「一夏、女の子には色々あるんだよ」

「そうなのか」

「そうなの」

「う、ぐ……、くう……」

セシリアはさっきから2回も刺身を取り損ねている。

「セシリア」

「移動は、しませんわ」

「しかし、食事が進まないだろ。食べさせてやろうか？」

「い、一夏さん、今のは本当ですよ！？そ、その！食事を、食べさせてくれるというのは……！」

「う、うん？別に、いいぞ。それに刺身、カワハギだぞ。鮮度とかが落ちたらもったいない」

「そ、そうですわね！ええ、ええ！せっかくの料理が傷んでしまつては、シェフに申し訳ありませんものね！で、では。お願いしますわ」

そう言つてセシリアは一夏に箸を預ける。それを受け取つて、一夏はさっそく刺身を一切れつまむ。

「セシリア、わさびは平気だったか？」

「わさびは少量で……」

どうやらわさびが苦手らしい。

「じゃあ」

「は、はい。あー……」

ん、と言おうとしたところで問題が発生した。

「あああーっ！セシリアずるい！何してるのよ！」

「織斑君に食べさせてもらってる！卑怯者！」

「ズルイ！インチキ！イカサマ！」

「全員静かにしろよ」

と、言った瞬間

「お前たちは静かに食事することができんのか」

千冬が来て、その声に場の全員が凍り付く。

「お、織斑先生……」

「どうにも、体力があり余っているようだな。よかろう。それでは今から砂浜をランニングしてこい。距離は……そうだな。50キロもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！とんでもないです！大人しく食事をします！」

そう言って各自の席に戻るのを確認してから、千冬は一夏を見た。

「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました。というわけでセシリア、悪いけど自分で――」



「……………」

ぷくくくくという感じでふくれ面をしている。

「あのだな、ええと……」

「ええ、ええ、わかってます。一夏さんはお姉さんが大切ですね」

「セシリア、代わりと言ってはなんだけど、後で部屋に来てくれよ」  
一夏は小声でセシリアにそう言うと、セシリアは2度ぱちくりとまばたきをした。

「後で部屋に……？それは――」

がばっ！と、いかなる一夏の手を握ったセシリアは熱の入った小声で答える。

「はい！わかりました！じゅ、準備がありますので少々お時間をいただきますが、必ず！」

（バカだ）

ちなみにさっきの会話は蓮に聞こえていた。

く蓮SIDE OUTく

くセシリアSIDEく

「♪」

浮かれているのが歩調にも現れている。今にもスキップをしそうな足取りは、だんだんと早足になって目的の場所へと向かった。  
——ところが。

「……………」

「……………」

部屋の前、その入り口のドアに張り付いている女子が2名。

「鈴さん？ それに箒さんまで。一体そこで何を——」

「シッ!!」

鈴がそう言うなりセシリアの口を塞ぐ。

状況がわからずにもがいていると、ふとドアの向こうから声が聞こえた。

『千冬姉、久しぶりだからちょっと緊張してる？』

『そんな訳あるか、馬鹿者。——んっ！す、少しは加減をしろ』

『はいはい。んじゃあ、ここは……と』

『くあっ！そ、そこは……やめっ、つうっ!!』

『すぐに良くなるって。だいぶ溜まってたみたいだし、ね』

『あああっ!』

「こ、こ、これは、一体、何ですの……」

ひくひくと口元を震わせ、引きつった笑みを浮かべながらそう尋ねるが、返ってきたのはただただ沈黙だけだった。

「……………」

「……………」

箒も鈴も、その様子はまるでお通夜さながらだった。

『じゃあ次は——』

『一夏、少し待て』

2人の声が途切れる。あれ？と思ってドアにぴたりと耳を寄せた3人が——

バンッ！！

「「へぶっ！！」」

思いつきり、ドアに殴られた。

打撃の刹那、反射的にもれた声は十代女子にあるまじき響きをしていた。

「何をしているか、馬鹿者どもが」

「は、はは……」

「こ、こんばんは、織斑先生……」

「さ、さようなら、織斑先生っ!!」

脱兎のごとく逃走開始――が、鈴と箒は首根っこを取られ、セシリアは浴衣の裾を踏まれて終了した。

「盗み聞きとは感心しないが、ちょうどいい。入っていけ」

「「「えっ?」」」

予想外の言葉に目を丸くする3人。

「ああ、そうだ。他の2人――ボーデヴィツヒとデュノアも呼んでこい」

「は、はいっ!」

首根っこを開放された箒と鈴は駆け足で2人を呼びに行く。

「おお、セシリア。遅かったじゃないか。じゃあはじめようぜ」

ぽんぽんとベットを叩きながら一夏はセシリアを呼ぶ。

「え、あの、織斑先生もいらっしゃいますし、その……」

「?別にいいんじゃないか。俺も体が温まってるし、早くはじめよう」

「い、いえ、でも、こういうのは、その、雰囲気が……」

どうにも困ったセシリアがちらりと千冬を見ると、向こうは「私に構わずはじめろ」と無言で告げてきた。

（か、構わないなんてできるわけがないでしょうに……！ううつ……！お、女は度胸、ですわ……！）

そう心の中で叫んで、半ばヤケクソ気味にベッドに横たわる。

「セシリア。うつぶせになってくれ」

「え？え？う、うつぶせで……しますの？」

本で読んだのと違うことに戸惑いながら、ベットにうつぶせになる。

「じゃあ、はじめろぞー」

「はっ、はいっ！」

思わず裏返ってしまった声を恥じらう余裕もないほどセシリアの心臓は、暴れていた。

「ん、しょっ……」

ギュウウウウウウウウウ~~~~ツ。

「！？いたたっ！い、い、いっ、一夏さん！？な、な、なにをして——あうううっ！」

「何って、指圧」

「し……あつ……？」

「そう、腰の」

「腰の……」

きよんとしたセシリアは、一夏の言葉をオウム返しにする。

「え、ええと、一夏さん。部屋に誘ったのは、もしかしてこの……」

「おう。マッサージをサービスしようと思ってな」

……………。

カア、と。カラスが鳴き、心の中でセシリアが泣いた。

「ぶ、無様です……わたくし……」

「どうしたんだ？セシリア。痛かったか？」

「ええ、とても……致命的なほどに……」

「そ、そりゃあ悪かった。すまん。優しくする」

「もう何でもいいです……」

そのあとも、一夏はマッサージを続け、セシリアは次第に眠くなってきた。

(ん……。眠くなって……。きましたわ……)

ぼーっとした頭で考えながら、次第にその思考も緩やかになっていく。

「(いい匂い……)」

もう半分眠りに落ちてしまったセシリアは、残りの半分も匂いを感じながら眠りに落ちはじめようとする。ところが突然――

ムニユツ!!

「!?!?!?!?」

いきなりお尻を驚づかみにされて、完全に眠りかけた意識が一気に覚醒する。

(い、い、い、一夏さん!?!ま、マッサージとはいえ、そんな、大胆な……!)

ドキンッドキンツと高鳴る胸を右手で押さえ、おそろおそろ振り向くと――

「おー、マセガキめ」

千冬が遠慮なくセシリアのお尻を握っている。その顔はイタズラが成功した顔で、けれどタチが悪いことも子供っぽさのかけらもない。

「しかし、歳不相応の下着だな。そのうえ黒か」

「え……きゃあああっ!?!」

今日はいている下着は、この日の為に用意した『特別な下着』なのだ

「……………」

一夏が顔を赤くして視線を逸らす。

「せ、せつ、先生! 離してください!」

真っ赤になりながらも叫ぶと、思いの外あっさりと千冬はどいた。

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、15歳」

「い、い、いつ、インコっ……!?!」

「冗談だ。——おい、聞き耳を立てている4人。そろそろ入ってこい」

ぎくっぎくっぎくっぎくっ。

「「「「……………」」」」

数秒の沈黙の後ドアがゆっくり開いた。

立っていたのは箒に鈴にシャルロットにラウラ。全員が旅館の浴衣姿である。

「一夏、マッサージはもういいだろう。ほれ全員好きところに座れ」



ちよいちよいと手招きをされて、4人はおずおずと部屋に入り、言われたとおり、各人が好きな場所に座った。

「ふー。さすがに2人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。すこしは要領よくやればいい」

「いや、そりゃせっかく時間を割いてくれてる相手に失礼だって」

「愚直だな」

「千冬姉、たまには褒めてくれても罰は当たらないって」

「どうだかな」

その会話を聞いて他のメンバーも状況を理解した。その間に一夏は部屋を出て行った。

「「「「……………」」」」」

「おいおい、葬式か通夜か？いつものバカ騒ぎはどうした」

「い、いえ、その……」

「お、織斑先生とこうして話すのは、ええと……」

「は、はじめてですし……」

「まったく、しょうがないな。私が飲み物を奢ってやろう」

と、言うのと千冬は旅館の備う付けの冷蔵庫を開け、中から飲み物を5人分取りだしていく。

「ほれ。ラムネとオレンジとスポーツドリンクにコーヒー、紅茶だ。それぞれ他のがいいやつは各人で交換しろ」

全員が啞然としている中、千冬はビールを片手に上機嫌な様子でベツドにかける。

「ふむ。本当なら一夏か蓮に一品作らせるところなんだが……それは我慢するか」

いつもの『織斑先生』と目の前の人物とが一致せず、女子全員がまたぽかんとしている。特にラウラは、さっきから何度もまばたきをしている。

「あ、あのー。仕事中なんじゃ……?」

「堅いことを言うな。それに、口止め料はもう払ったぞ」

と、言うところできっと女子一同が飲み物の意味に気づいて「あつ」と声を漏らした。

「さて、そろそろ肝心の話をするか」

2本目のビールをラウラに言って取らせ、また景気のいい音を響かせて千冬が続ける。

「お前ら、あいつのどこがいいんだ?」

あいつ、と言っているが全員が誰を指しているかわかっていた。

一夏——しかない。

「わ、私は別に……以前より腕が落ちているのが腹立たしいだけですの」

と、ラムネを傾けながら箸。

「あたしは、腐れ縁なだけだし……」

スポーツドリンクのフチをなぞりながら、もごもごと言う鈴。

「わ、わたくしはクラス代表としてしっかりしてほしいだけです」

さっきの行動の反発か、ツンとした態度で答えるセシリア。

「ふむ、そうか。ではそう一夏に伝えておこう」

しれっとそんなことを言う千冬に、3人はぎょつとしてから一斉に詰め寄った。

「」「言わなくていいです!」「」

その様子をはっはっはっとな笑い声で一蹴して、千冬はまた缶ビールを傾ける。

「で、お前は?」

さっきから一言も発してないラウラに、千冬が話を振る。

「つ、強いところが、でしょうか……」

「いや弱いだろ」

何でもないことのように言う千冬に、珍しくラウラは食ってかかった。

「つ、強いです。少なくとも、私よりも」

そうかねえ……と言う千冬は、3本目のビールを空ける。

「まあ、強いかは別にしてだ。あいつは役に立つぞ。家事も料理もなかなかだし、マッサージだってうまい。それにあいつに料理を教えたのは蓮だ」

女子一同は蓮に料理スキルがあることに驚いた。

「というわけで、付き合える女は得だな。どうだ、欲しいか？」

え!?!と4人が顔を上げる。それからおずおずと、ラウラが尋ねた。

「く、くれるんですか？」

「やるかバカ」

ええ……と心の中で突っ込む4人。

「女ならば、奪うくらいの気持ちで行かなくてどうする。自分を磨けよ、ガキども」

3本目のビールを口にする千冬は、実に楽しそうな表情でそう言った。

「それで、デュノアは蓮のどこがいいんだ？」

「僕——あの、私は……やさしいところ、です……」

声の小ささとは裏腹にそこには真摯な響きがあった。

「そうか。お前はあいつのことをどこまで知っている？」

「父親に捨てられたことです」

「そうか。良かったな。あいつはお前の気持ちに気づいている」

それを聞いた4人はシャルロットをうらやましそうに見つめていた。

「だが、あいつは深い闇の中にいる。好きならば闇から救ってやれ」

「は、はい！」

その返事はシャルロットの覚悟の現れだった。

＼セシリアSIDE OUT＼

## 21話 ダークネスウィング・ゼロ カスタム

〈蓮SIDE〉

合宿2日目。今日は午前中から夜までISの各種装備試験運用とデータ取りを行う。

「さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように。専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

はい、と一同が返事をして作業を始めた。

「ああ、篠ノ之。お前はちよつとこっちに来い」

「はい」

打鉄用の装備を運んでいた箒さ、千冬に呼ばれてそちらへ向かう。

「お前には今日から専用――」

「ちーちゃ~~~~ん!!!」

ずどどどど……!と砂煙を上げながら人影が走ってくる。

「やあやあ!会いたかったよ、ちーちゃん!さあ、ハグハグしよう!愛を確かめ――ぶへっ」

飛びかかってきた束を片手で顔面を掴み、思いっきり指が食い込んでいた。

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンくろーだねっ」

そしてその拘束から抜け出し着地をして、箒の方を向く。

「やあ！」

「……どうも」

「えへへ、久しぶりだね。こうして会うのは何年ぶりかなあ。おつきくなったね、箒ちゃん。特におっぱいが」

がんっ！

「殴りますよ」

「な、殴ってから言ったあ……。し、しかも日本刀の鞘で叩いた！ひどい！箒ちゃんひどい！」

頭を押さえながら涙目になって訴える束。そんな2人のやりとりを、一同はぼかんとして眺めた。

「え、えっと、この合宿では関係者以外——」

「んん？珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいて他にいないよ」

「えっ、あっ、はいっ。そ、そうですね……」

あっけなく轟沈した。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の束さんだよ、はろー。終わり」

そう言った瞬間にぼかんとしていた一同も、やっと目の前の人物が何者であるか気づいたらしく、わずかに騒がしくなる。

「はあ……。もう少しまともにできんのか、お前は。そら1年、手が止まってるぞ。こいつのことは無視してテストを続けろ」

「こいつはひどいなあ、らぶりい束さんと呼んでいいよ？」

「うるさい、黙れ」

そんなやりとりに、山田先生がおずおずと割り込んだ。

「え、えっと、あの、こういう場合はどうしたら……」

「ああ、こいつはさっき言ったように無視してもらって構わない。山田先生は各班のサポートをお願いします」

「わ、わかりました」

「むむ、ちーちゃんが優しい……。束さんは激しくじえらしい。このおっぱい魔神め、たぶらかしたな〜！」

言うなり、山田先生に飛びかかる。



「きゃああっ!? な、なんっ、なんなんですかあっ!」

「ええい、よいではないかよいではないかー」

「やめろバカ。大体、胸ならお前も十分あるだろうが」

「てへへ、ちーちゃんのえっち」

「死ね」

どかっと本気の蹴りを食らって砂浜に顔から突っ込む。

「それで、頼んでおいたものは……?」

ややためらいがちに箒がそう尋ねる。それを聞いた束の目がキラーンと光った。

「うっふっふっ。それはすでに準備済みだよ。さあ、大空をご覧あれ!」

ズーンッ!

「のわっ!?!」

いきなり、激しい衝撃を伴って、金属の塊が2つ砂浜に落下してきた。

「じゃじゃーん! これぞ箒ちゃん専用機こと『紅椿』! そしてこれが――」

真紅の装甲を身を包んだ機体が1つ目の金属の塊から出てきた。

「——れっくんの専用機『ダークネスウィング・ゼロ カスタム』だよ!」

そして2つ目の金属の塊から——『黒』が、現れた。

全ての光りを拒絶する闇のような漆黒を纏ったISが、翼で自分の身を包み操縦者を待っていた。

「『ダークネスウィング・ゼロ カスタム』……俺の新しいIS」

そして、束の方を見るとすでにフィッティングとパーソナライズをはじめていた。

「はじめるぞ、ゼロ」

蓮は束と同じく空間投影のキーボードを呼び出し、ゼロシステムのデータをインストールを行う。

その間、紅椿の様子を見ていた。

「速いな」

と、思っているとインストールが終了して、最終調整にはいった。

三分後

「れっくん、調整は終わったかな?」

「今終わった」

「んじゃ、試運転もかねて飛ばうか」

「了解」

蓮はゼロに乗り込み、

「行くぞ、ゼロ」

紅椿以上の速度であつという間に300メートルほど上空で翼を開いた。

「は、速い」

「『紅椿』を越えている」

（やはりリミッターをつけているか……）

『当たり前だよー、だってフル稼働で世界を4日で潰せるからね』

と、聞いた瞬間一夏達は驚愕した。

『じゃあ、追加武装を試そうか』

言うなり、束は十六連装ミサイルポッドを三機呼び出し、光の粒子が集まって形を成すと、次の瞬間一斉射撃を行った。

「ファング！」

と、武器の名を呼ぶと、前側の翼の裏から十二機のビットが射出され、四十八発のミサイルを全て撃墜し、十二機のビットが翼の裏側

に戻ってきた。

「じゃあ、次はこれね」

と、言うといきなりビームが迫り、右手を突き出しもう一つの武装を使った。

「え!？」

「う、ウソだろ」

「ビームを」

「打ち消した」

「どうやって」

「ふ、ふ、ふふう♪あれはね、『ゼロ・フィールド』って言ってね、ビーム兵器は打ち消して、実弾兵器はそれなんだよ。でもね、エネルギー消費が激しいから、エネルギー兵器のエネルギーを吸収できるようにしちゃったぜブイ」

実際にエネルギー残量を見ると60%程で、ビームを防いだため少し回復していた。

「ゼロシステムの起動実験を行う」

「それじゃあ、行くよ!」

言うなり、十六連装ミサイルポッドが十機、ビットのようなものが

二十機現れ、それを確認すると蓮は瞳を閉じた。

「ゼロシステム、起動」

と、言うのとゼロの胸部にある緑色の球体が輝くと同時に、ビットとミサイルが蓮を襲う。

「動きが良くなっている」

「スペックが上がっている訳でもないし」

「まるで未来が見えているみたいですわ」

「……………!?!」

ラウラはシュヴァルツェア・レーゲンのハイパーセンサーを部分展開して、蓮を見て驚いた。

「どうした? ラウラ」

「あいつ……………目を閉じている」

「「「「!?!」」」」

それを聞いて、5人はすぐさまハイパーセンサーで蓮を見る。

「本当に目を閉じている」

「どうやって、動いているんだ?」

「なるほどね、パイロットに未来を見せるシステムか」

「それはどういことですか？」

「あれはおそらく、戦況のデータを瞬時に取り込みパイロットにその状況にあり得る未来を見せるシステムみたいだね」

ゼロシステムを起動してから、5分がたちミサイルとビットを全て撃墜した。

「ゴホッ」

ゼロシステムの稼働限界時間に到達し、蓮は血を吐いた。

（体の負担は消えないか）

と、思いながら着地する。

「たっ、た、大変です！お、おお、織斑先生っ！」

いつも以上に慌てている山田先生が来た。

「どうした？」

「い、こっ、これをっ！」

渡された小型端末の画面を見て千冬表情が曇る。

「特命任務レベルA、現時刻より対策をはじめられたし……」

「そ、それが、その、ハワイ沖で試験稼働をしていた」

「しっ。機密事項を口にするな。生徒たちに聞こえる」

「す、すみませんっ……」

「専用機持ちは？」

「ひ、1人欠席していますが、それ以外は」

なにやら、2人は小さな声でやりとりしている。しかも、数人の生徒の視線に気がついてか、会話ではなく手話でやりとりをはじめた。

「そ、そ、それでは、私は他の先生たちにも連絡してきますのでっ」

「了解した。――全員、注目！」

山田先生が走り去った後、千冬はパンパンと手を叩いて生徒全員を振り向かせる。

「現時刻よりIS学園教員は特殊任務行動へ移る。今日のテスト稼働は中止。各班、ISを片付けて旅館に戻れ。連絡があるまで各自室内待機すること。以上だ！」

「え……？」

「ちゅ、中止？なんで？特殊任務行動って……」

「状況が全然わかんないんだけど……」

不測の事態に、女子一同はざわざわと騒がしくなる。

「とっとと戻れ！以後、許可無く室外に出たものは我々で身柄を拘束する！いいな！！」

「「はっ、はいっ！」「」」

全員が慌てて動きはじめる。

「専用機持ちは全員集合しろ！織斑、西城、エルシア、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、凰！——それと、篠ノ之も来い」

「はい！」

妙に気合いの入った返事をした筈を見て蓮は嫌な予感を感じた。



## 22話 ブリーフィング

「では、現状を説明する」

旅館の一番奥に設けられた宴会用の大座敷で、蓮たち専用機持ち全員と教師陣が集め、照明を落とした薄暗い室内に、大型の空間投影ディスプレイが浮かんでいる。

「2時間前、ハワイ沖で試験稼働にあったアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS『銀の福音』シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があった」

いきなりの説明に、一夏は面を食らう。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから二キロ先の空域を通過することがわかった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

未だに状況が飲み込めない一夏を置いて代表候補生の面々と教師陣は開示されたデータを元に相談をはじめ。その間蓮は何かを感じて、空間投影のディスプレイとキーボードを呼び出す。

「広域殲滅を目的とした特殊射撃型……わたくしのISと同じく、オールレンジ攻撃を行えるようですね」

「攻撃と機動の両方を特化した機体ね。厄介だわ。しかも、スペック上では甲龍より上……」

「この特殊武装が曲者って感じはするね。ちょうど本国からリヴァ

イヴ用の防御パッケージが来てるけど、連続しての防御は難しい気がするよ」

「しかも、このデータでは格闘性能が未知数だ。持っているスキルもわからん。偵察は行えないのですか？」

セシリア、鈴、シャルロット、ラウラは真剣に意見をかわしている。

「無理だな。この機体は超音速飛行を続けている。最高速度は時速2450キロを超えるとある」

「1回きりのチャンス……ということとはやはり、一撃必殺の攻撃力を持った機体で当たるしかありませんね」

山田先生の言葉に、全員が一夏の方を見る。

「え……？」

「一夏、あんたの零落白夜で落とすのよ」

「それしかありませんわね。ただ、問題は――」

「どうやって一夏をそこまで運ぶか、だね。エネルギーは全部攻撃に使わないと難しいだろうから、移動をどうするか」

「しかも、目標に追いつける速度が出せるISでなければいけないな。超高感度ハイパーセンサーも必要だろう」

「ちよっ、ちよっと待ってくれ！別に俺じゃあなく蓮の方が適任じゃないか？」

確かにゼロにはツインバスターライフルがあるし、目標に追い付く速度が出せる。

「どうする西城。お前が行くか？」

「いや、目標は織斑にあたらせる」

「どういうことだ？」

「これを見ろ」

と、言うど大型のディスプレイには、大量のISが映っていた。

「数はざつと100機。おそらく、トーナメントで襲撃したISの量産型。スペックもそれなりにあるだろう」

「そうか、織斑、やれるか？」

「やります。俺が、やってみせます」

「よし。それでは作戦の具体的な内容に入る。現在、ゼロ以外で最高速度が出せる機体はどれだ？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズが。ちょうどイギリスから強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』が送られて来ていますし、超高感度ハイパーセンサーもついています」

「オルコット、超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

「ふむ……。それならば適任――」

だな、と言おうとした千冬さんをいきなり底抜けに明るいう声が遮る。

「待った待った。その作戦はちょっと待ったなんだよ！」

しかも、声の発生源である天井からは、束の首がさかさに生えていた。

「……山田先生、室外への強制退去を」

「えっ！？は、はいっ。あの、篠ノ之博士、とりあえず降りてきてください……」

「とうっ★」

くるりと空中で1回転して着地した。

「ちーちゃん、ちーちゃん。もっといい作戦が私の頭の中にナウ・プリンティング！」

「……出て行け」

「聞いて聞いて！ここは断・然！紅椿の出番なんだよっ！」

「なに？」

「紅椿のスペックデータ見てみて！パッケージなんかなくても超高

速機動ができるんだよ！」

束の言葉に応えるように数枚のディスプレイが千冬を囲むように現れる。

「紅椿の展開装甲を調整して、はいはいっと。ホラ！これでスピードはばっちり！」

聞き慣れない言葉に一夏が首をひねっていると、束が千冬の隣に立って説明をはじめた。

「説明しましょうそうしましょう。展開装甲というのはだね、この天才の束さんが作った第四世代型のISの装備なんだよ。具体的には白式の《雪片式型》に使用されてます。試しに私が突っ込んだ」

「「え!?!」」

この言葉には、さすがに一夏以外の専用機持ちも驚いた。

「それで、うまくいったのでなんとなく紅椿の全身のアーマーも展開装甲にしてあります。システム最大稼働時には、スペックデータはさらに倍プッシュだ★」

「ちよっ、ちよっと、ちよっと待ってください。え？全身？全身が、雪片式型と同じ？それって……」

「うん、無茶苦茶強いね、一言でいうと最強だね」

一夏を含む全員がポカンとしている。していないのは千冬と蓮とア

リアだけだった。

「ちなみに紅椿はより発展したタイプだから、攻撃・防御・機動と用途に応じて切り替え可能。これぞ第四世代型の目標である即時万用対敵機<sup>ルチロール・アクトレス</sup>つてやつだね。にやはは、私が早くも作っちゃったよ。ぶいぶい」

「束さん。ゼロは何世代なんですか？」

一夏が今まで疑問に思ったことを聞いた。

「ゼロはねえ……強いて言えば第零世代かな」

「「「「「第零世代？」」「」「」」」」」

「だってゼロは私が作ったんじゃないんだよ」

「え？それってどういうことですか？」

「ゼロはねえ、れっくんの「言うな！」……」

突然蓮が声を荒げた。

「博士、紅椿の調整にどれくらいの時間がかかりますか？」

「れ、蓮さん！？」

驚いた声をあげたのはセシリアだった。専用機持ちの中でも高機動パッケージを持っているのが自分だけだったため、当然作戦に参加できるものと思っていたようだ。

「わ、わたくしとブルー・ティアーズなら必ず成功してみせますわ！」

「そのパッケージは量子変換<sup>インスタール</sup>してあるのか？」

「そ、それは……まだですが……」

痛いところを突かれたのか、勢いを失ってもごもごと小声になってしまった。

「ちなみに紅椿の調整時間は7分あれば余裕だね★」

「よし。では織斑・篠ノ之2名による目標の追跡及び撃墜、西城は敵機の殲滅を目的とする。作戦開始は30分後。各員、ただちに準備にかかれ」

ばん、と千冬が手を叩き、全員が準備を始めた。

## 23話 闇の翼 海に散る

時刻は11…30。

7月の空はこれでもかとはかりに晴れ渡り、容赦のない陽光が降り注いでいる。

「来い、白式」

「行くぞ、紅椿」

「行くぞ、ゼロ」

全身が光に包まれ、アーマーが構成される。

「じゃあ、箒。よろしく頼む」

「本来なら女の上に男が乗るなど私のプライドが許さないが、今回だけは特別だぞ」

作戦上、移動のすべてを箒に任せるので、一夏は箒の背中に乗っかる形になった。

「それにしても、たまたま私たちがいたことが幸いしたな。私と一夏が力を合わせればできないことなどない。そうだろう？」

「ああ、そうだな。でも箒、先生達が言ったけどこれは訓練じゃないんだ。実戦では何が起きるか分からない。十分に注意をして――」

「無論、わかっているさ。ふふ、どうした？怖いのか？」



「そうじゃねえって。あのな、箒——」

「ははっ、心配するな。お前はちゃんと私が運んでやる。大船に乗ったつもりでいればいい」

「……………」

一夏はどうにもすっきりしない不安をかかえたまま、紅椿の背中へと乗った。

『織斑、西城、篠ノ之、聞こえるか?』

ISのオープン・チャンネルから千冬の声が聞こえる。

『織斑、篠ノ之の作戦の要は一撃必殺だ。短時間での決着を心がける』

「了解」

「織斑先生、私は状況に応じて一夏のサポートをすればよろしいですか?」

『そうだな。だが、無理はするな。お前は紅椿を使い始めてからの実戦経験は皆無だ。突然、なにかしらの問題が出るともかぎらない』

「わかりました。できる範囲で支援をします」

箒のそれは一見落ち着いた返事のようにだがやはり口調は喜色に弾んでいた。

『――西城』

「なんですか？」

オープン・チャンネルからプライベート・チャンネルに切り替わり  
千冬の声が届く。

『お前から見て成功率はどのくらいだ？』

「篠ノ之が浮かれたせいで50%ほどだろう。俺も早く片付けて、  
救援に行くが織斑には意識させた方がいい」

『そうしよう。もしものときは頼むぞ』

「了解」

それからしばらく一夏は千冬とプライベート・チャンネルで話した。

『では、はじめ！』

一気に300メートルまで飛翔し、所属不明機の殲滅に向かう。

一夏たちと途中別れて、現空域で待機している。

「目標を補足。ツインバスターライフル エネルギー充填開始」

2丁のバスターライフルを呼び出し、連結して発射態勢にはいる。  
敵は射撃型と近接格闘型の2つのタイプに別れていた。

——ツインバスターライフル エネルギー充填率97%——

「ターゲットロックオン……ダークネスウイング・ゼロ カスタム。  
目標を破壊する」

ツインバスターライフルの引き金を引き、大きな光が無人機たちを  
襲い100の内10前後が消滅した。

「引き続き、敵機の殲滅を行う。……ファング！」

12機のビットをサーベルモードにして射出し、ツインバスターラ  
イフルを収納して、風殺と風雷呼び出して無人機を斬る。

「これで38機……」

あれから10分ほどがたち、残りは62機。しかし、蓮の体力はか  
なり消耗していた。

『——西城、聞こえるか？』

突然、千冬から通信が入った。

「なんですか？」

『織斑が撃墜された』

「篠ノ之は？」

『現在、織斑を背よって離脱中だが、福音の追撃で離脱できない。救援に行けるか？』

「了解」

『頼む』

最後の一言は声が震えていた。

「行くぞ、ゼロ」

ビットを回収して、最後にバスターライフルを撃ち1機を撃ちおとした。

「どこにいる……」

無人機たちをふりほどき、福音と交戦していたところに着いた。

「……………そこか」

紅椿を見つけ、救援に行く。

その途中に福音は光の弾丸を撃ち出す。

「篠ノ之、離脱しろ」

蓮は光の弾丸をゼロ・フィールドで相殺する。

「お前はどうするのだ」

「俺はまだ戦える。俺があいつの相手をする」

「だが」

「行け！怪我状況では早くしないと織斑は死ぬぞ」

「わ、わかった」

そう言って箒は一夏を背よって離脱した。

「織斑先生」

『なんだ？』

「今から福音の足止めをします」

『お前まさか……、よせ！お前1人では』

「足止めをしないと、福音を取り逃がす。なら」

『やめろ、蓮！やめろ！』

蓮は強引に通信を切り、風殺と風雷を呼び出し福音と戦闘をはじめ  
る。

「エネルギー残量が50%……いつまで耐えられるか」

蓮は高速で福音を斬り掛かるが、福音は高速で避けるまたは、両手で弾くか受け流す。

「流石は、攻撃と機動の両方を特化した機体だ」

「La……………♪」

甲高いマシンボイス。その刹那、ウイングスラスターは砲門全てを開き、光の弾丸を撃つ。

「ちっ、これ以上ゼロ・フィールドを使うわけには」

蓮は光弾をかわし、また斬り掛かる。

——六時の方向に敵機が多数接近中——

と、ゼロのハイパーセンサーが告げる。

「ちっ、来たか。……ファング！」

12機のビットをサーベルモードで射出する。

基本的には、蓮が福音と近接格闘型の無人機でビットは射撃型の無人機にあてる。

「ちっ、無駄に機動がいい」

福音の機動性はリミッターをつけたゼロと同等である。

「リミッター解除のコードを知っていれば」

次第に、福音に押されはじめる。

「くっ」

風殺と風雷で斬り掛かり、福音はその刃を――

「なっ!？」

両手の手のひらで握りしめる。

――警告! 後方の敵IS射撃体勢に移行。トリガー確認、初弾エネルギー――装填――警告! ロックオンを確認――警告!

「しまった」

福音のウィングスラスターの36の砲門全てを開き、後方の射撃型の無人機は全ての砲口を蓮に向けて一斉に撃つ。

ズドオオオオンッ!!!

蓮を中心に黒煙が広がっていた。

く蓮SIDE OUTく

くアリアSIDEく

「……………」

彼女は今、何者かに電話をかけていた。

『どうした？02』

02とは、アリアの識別番号である。

「織斑一夏が墜ちました。捕獲しますか？」

『いや、お前にはX-01の抹殺と福音の捕獲をしてもらう。無人機部隊が全滅してから、捕獲を行え』

「了解しました。マスター」

そう言ってアリアは電話を切った。

「行くわよ、エクシア」

全身が光に包まれ、クラス対抗戦のときに現れた青い機体を構成して、飛翔した。

＼アリアSIDE OUT＼

＼箒SIDE＼

「……………」

旅館の一室。壁の時計は4時前を指している。

ベッドで横たわる一夏は、もう3時間以上も目覚めないままだった。その傍らに控えている箒は、もうずっとこうしてうなだれている。

（私はもう……ISには……）



1つの決心をつけようとしたときに、突然ドアが乱暴に開く。

「あー、あー、わかりやすいわねえ」

遠慮無く入ってきた女子は、うなだれたままの箒の隣までやってくる。

その声は——鈴だった。

「……………」

「あのさあ」

話しかけてくる鈴に、箒は答えない。答え、られない。

「一夏がこうなったのって、あんたのせいなんですよ？」

「……………」

「で、落ち込んでますってポーズ？——っざけんじゃないわよ！」

突然烈火の如く怒りをあらわにした鈴は、うなだれたままだった箒の胸ぐらを掴んで無理矢理に立たせる。

「やるべきことがあるでしょうが！今！戦わなくて、どうすんのよ！」

「わ、私……は、もうI Sは……使わない……」

「ッ——！！！」

バシンッ！

頬を叩かれ、支えを失った箒は床に倒れる。

そんな箒を再度鈴は締め上げるように振り向かせた。

「甘ったれてんじゃないわよ……。専用機持ちっつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じゃないのよ。それともアンタは——」

鈴の瞳が、箒の瞳を直視する。

「戦うべきに戦えない、臆病者か」

その言葉で箒の瞳、その奥底の闘志に火がついた。

「——ど……」

口から漏れたか細い言葉は、すぐさま怒りを纏って強く大きく変わる。

「どうしろと言うんだ！もう敵の居場所もわからない！戦えるなら私だって戦う！」

やっと自分の意志で立ち上がった箒を見て、鈴はため息をついた。

「やっとやる気になったわね。……あーあ、めんどくさかった」

「な、なに？」

「場所ならわかるわ。今ラウラが——」

言葉の途中でドアが開きそこには、真っ黒な軍服に身を包んだラウラが立っていた。

「出たぞ。蓮が目標と交戦をはじめた場所で目標を確認した。何らかのステレスフィールドがはられているが、広範囲に展開していて効力が薄いようだ。ゼロの微弱な反応と衛星による目視で発見したぞ」

ブック端末を片手に部屋の中に入ってくるラウラを、鈴はにやりとした顔で迎える。

「さすがドイツ軍特殊部隊。やるわね」

「ふん……。お前の方はどうなんだ。準備はできているのか」

「当然。甲龍の攻撃特化パッケージはインストール済みよ。シャルロットとセシリアの方こそどいなのよ」

「ああ、それなら――」

ラウラがドアの方へと視線をやる。そして、それはすぐに開かれた。

「たった今完了しましたわ」

「準備オッケーだよ。いつでもいける」

専用機持ちが全員揃うと、それぞれが箒へと視線を向けた。

「で、あんたはどうするの？」

「私……私は――」

ぎゅうつと拳を握りしめる筈。それはさっきまでの後悔とは違う、決意の表れだった。

「戦う……戦って、勝つ！ 今度こそ、負けはしない！」

「決まりね」

ふふんと腕を組み、鈴は不敵に笑う。

「じゃあ、作戦会議よ。今度こそ確実に墜とすわ」

「ああ！」

「……………！？」

ラウラはブック端末を見て驚愕した。

「どうしたの？ ラウラ」

「ダークネスウィング・ゼロ カスタムの反応が

消えた――」

〔 箒SIDE OUT 〕

〔 蓮SIDE 〕

福音の光弾と射撃型の無人機の射撃を直撃して、蓮を中心に黒煙が広がる。

「ちっ、全方位展開だと、効果が薄いか……」

蓮はさっきの攻撃をゼロ・フィールドで防いだ。しかし、全方位展開では効果が薄れるためゼロはダメージレベルBになって、蓮は負傷した。

「残り48機……」

蓮の体力はもう限界で、福音について行くのが精一杯で、気を抜けば福音や無人機に墜とされるような状況だった。

「残り47機……」

福音の攻撃を避けながら、無人機を破壊する。  
そして、残り45機になろうとしたとき――

「グハッ……」

何者かに背中から腹部に刺され、後ろを振り向くとそこには――

「ア……リ……ア」

そこには、エクシアを纏ったアリアがいた。

「くそっ たれ……が」

蓮は最後にツインバスターライフルを呼び出し最大出力で、無人機に向けて撃ち、逃げ遅れた14機が消滅し、蓮は崩れるように海面へと墜ちていった。

く蓮SIDE OUTく

## 24話 覚醒

〔第SIDE〕

海上200メートル。そこで多数の無人機と戦闘をしていた『銀の福音』は、近接格闘型の無人機のブレードを両手で掴んで《銀の鐘》を近距離で打ちだそうとした。

次の瞬間、超音速で飛来した砲弾が頭部を直撃、近距離にいた無人機を巻き込んで、大爆発を起こした。

「初弾命中。続けて砲撃を行う！」

5キロ離れた場所に浮かんでいる砲撃パッケージ『パンツァー・カノニア』を装備した『シュヴァルツェア・レーゲン』とラウラは、福音が反撃に移るよりも早く次弾を発射した。

（敵機接近まで……4000……3000——くっ！予想よりも速い！）

あっという間に距離が1000メートルを切り、福音がラウラへと迫る。

「ちいっ！」

砲撃仕様はその反動相殺のために機動との両立が難しい。

対して、機動に特化した福音は300メートル地点からさらに急加速を行い、ラウラへと右手を伸ばす。

——避けられない！

しかし、ラウラはにやりと口元を歪めた。

「――セシリア!!」

伸ばした腕が突然上空から垂直に降りてきた機体によって弾かれる。青一色の機体――強襲用高機動パッケージ『ストライク・ガンナー』を装備した『ブルー・ティアーズ』によるステレスモードからの強襲だった。

『敵機Bを認識。排除行動へ移る』

「遅いよ」

セシリアの射撃を避ける福音を、真後ろから別の機体が襲う。

それは先刻の突撃時にセシリアの背中に乗っていた、ステレスモードのシャルロットだった。

ショットガン2丁による近接射撃を背中に浴び、福音は姿勢を崩すが、一瞬のことで、すぐさま3機目の敵機に対して《銀の鐘》による反撃を開始した。

「おっと。悪いけど、この『ガーデン・カーテン』は、そのくらいじゃ落ちないよ」

リヴァイブ専用防御パッケージは実体シールドとエネルギーシールドの両方によって福音の弾雨を防ぐ。

防御の間も得意の『高速切替』でアサルトカノンを呼び出し、タイミングを計って反撃を開始する。

『……優先順位を変更。現状からの離脱を最優先に』



全方位にエネルギー弾を放った福音は、次の瞬間全スラスターを開いて強行突破を計る。

「させるかあっ!!」

海面が膨れあがり、爆ぜる。

飛び出してきたのは『紅椿』とその背中に乗った『甲龍』だった。

「離脱する前にたたき落とす!」

福音へと突撃する紅椿。その背中から飛び降りた鈴は、機能増幅パツケージ『崩山』を戦闘状態に移行させる。

新たに増設した2つの衝撃砲が一斉に火を噴いた。

『!!!』

肉薄していた紅椿が瞬時に離脱し、その後ろから衝撃砲による弾丸が一斉に降り注ぐ。

「やりましたの!?!」

「———まだよ!」

拡散衝撃砲の直撃を受けてなお、福音はその機能を停止させてはいなかった。

『《銀の鐘》最大稼働———開始』

両手をいっぱい広げ、さらに翼も自身から見て外側へと向ける。  
——刹那、眩いほどの光が爆ぜ、エネルギー弾の一斉射撃がはじま

った。

「くっ!!」

「箒! 僕の後ろに!」

前回の失敗をふまえて、紅椿は防御機能を限定してある。代わりに防御をシャルロットに任せている。集団戦闘の利点を最大利用した役割分担である。

「それにしても……これはちょっと、きついね」

防御専用パッケージであっても、福音の異常な連射を立て続けに受け続けるのは危うかった。

そうこうしている間にも物理シールドの1枚、完全に破壊される。

「ラウラ! セシリア! お願い!」

「言われずとも!」

「お任せになって!」

後退するシャルロットと入れ替わりにラウラとセシリアが左右から射撃を開始する。

「足が止まればこっちのもんよ!」

そして直下からの鈴の突撃。双天牙月による斬撃のあと、至近距離からの拡散衝撃砲を浴びせる。――狙いは、頭部に接続されたマルチスラスター《銀の鐘》。

「もらったあああっ!!」

エネルギー弾を全身に浴びながら、鈴の攻撃は止まらない。

同じく拡散衝撃砲の弾雨を降らせ、互いに深いダメージを受けながら、ついにその斬撃が福音の片翼を奪った。

「はっ、はっ……! どうよ——ぐッ!？」

片側だけの翼になりながら、それでも福音は体勢を立て直し、鈴の左腕へと回し蹴りを叩きこむ。脚部スラスターで加速されたそれは、一撃で鈴の腕部アーマーを破壊し、海へ墜すとす。

「鈴! おのれっ——!!」

箒は両手に刀を持ち、福音へと斬りかかる。

その急加速に一瞬反応を失った福音の、右肩へ刃が食い込んだ。

(獲った——!!!)

その思った刹那、左右両方の刃を手のひらで握りしめる。

「なっ!？」

刀身から放出されるエネルギーで装甲が焼き切られるが、お構いなしに福音は両腕を最大にまで広げ、残ったもう1つの翼が砲口を開放して待っていた。

「箒! 武器を捨てて緊急回避しろ!」

しかし、箒は武器を手放さない。

(……ここで引いて、何のための……)

エネルギー弾がチャージされ、光が溢れる。そして、それは一斉に放たれた。

(何のための力かつ!!)

エネルギー弾が触れる寸前にぐるんと一回転する。その瞬間、爪先の展開装甲からエネルギー刃を発生させる。

「たああああっ!!」

かかと落としのような格好で残った片翼を切り落とし、海面へ墜ちていった。

「はっ、はあっ、はあっ……!!」

「無事か!?!」

珍しくラウラの慌てた声を聞きながら、箒は呼吸をゆっくりと落ち着けていく。

「私は……大丈夫だ。だが、奴らはなぜ攻撃してこない?」

蓮と福音が戦っていた無人機たちは、箒たちが来てから、箒たちの戦闘を傍観していた。

「わからん。だが、私たちの――」

「勝ちだ」と言おうとしたその時、海面が強烈な光の球によって吹き飛んだ。

「!?!」

球状に蒸発した海は、まるでそこだけ時間が止まっているかのようにへこんだままだった。その中心、青い雷を纏った『銀の福音』が自らを抱くようにうずくまっている。

「これは……!?! 一体、何が起きているんだ……?」

「!?! まずい! これは――『第二形態移行』だ!」

ラウラの叫んだ瞬間、まるでその声に反応したかのように福音が顔を向ける。

無機質なバイザーに覆われた顔からは何の表情も読み取れない。けれど、そこに確かな敵意を感じて、各 I S は操縦者へと警鐘を鳴らす。

しかし――遅かった。

『キアアアア……!?!』

まるで獣の咆哮のような声を発し、福音はラウラへと飛びかかる。

「なにっ!?!」

あまりに速い動きに反応できず、ラウラは足を掴まれる。

そして、切断された頭部から、ゆっくりと、エネルギーの翼が生え

た。

「ラウラを離せえっ！」

シャルロットはすぐさま武装を切り替えて近接ブレードによる突撃を行う。

けれど、その刃は空いた方の手で受け止められて止まった。

「よせ！逃げろ！こいつは——」

その言葉は最後まで続かず、ラウラは眩いほどの輝きと美しさを併せ持ったエネルギーの翼に抱かれようとした瞬間——

「「!?!」」

福音は2人を掴んでいた手を離し、その場を離れた。

刹那、さっきまで福音がいた所に大きな光が通り過ぎる。

「この威力……まさか、ツインバスターライフル。ということとは……」

突然、海中から飛び出した。

「蓮!」

海上200メートルほどに蓮の姿があった。

〈 第SIDE OUT 〉

〈 蓮SIDE 〉

（死ぬのか？俺は……こんなところで）

エクシアに刺され、海に墜ちた。幸いにもISの絶対防衛が働いたため、衝撃を軽減してくれていた。

（まだ……死ぬわけには）

「力を欲しますか……？」

（誰だ……？）

目を開き、そこには――。

「ここは……どこだ？」

そこには、荒野が広がっており目の前には、大きなクレーターがあった。

すると突然、後ろから声を投げかけられた。

「力を欲しますか……？」

声が聞こえた方を振り向くと、そこには女性が立っていた。

その姿は、黒い二対の翼を持った、堕天使さながらの格好だった。

「力を欲しますか……？何のために……」

ヒュオオオオオオ……！！

風だけが蓮と女性の間にある。

「……俺には、成し遂げたいことがある」

「成し遂げたいこと……」

「ああ、だから俺は力を求める」

「そう……」

女性は、静かに答えてうなずいた。

「ならば、解き放ちなさい。あなたの中に眠る力を……」

「俺の中に眠る……力？」

「そう……」

「わかった。……行くぞ、ゼロ」

すると、突然眩い光に包まれ、目を閉じる。

そして、目を開けるとさっきまでいた荒野ではなく、海中だった。

突然、右腕のアーマーが勝手に部分解除して、リミッターであるブレスレットの花びらのようなものが、2つ砕けた。

——《Wing System》起動。機体修復開始。修復完了まで一極限定モードで再展開します——

と、ゼロのハイパーセンサーが告げるとゼロのアーマーが解除され、その後すぐにゼロのアーマーが両手と両足が部分展開され、蓮の背中から黒い一對エネルギーの翼が生えた。



「行くぞ、ゼロ」

そして、2丁のバスターライフルを呼び出し、連結して発射態勢にはいる。

「ターゲットとの誤差修正完了」

そして、ツインバスターライフルの引き金を引き、大きな光が福音に向けて、直進した。

「西城蓮……これより戦線に復帰する」

勢い良く海中を飛び出した。

現在の状況。

福音『第二形態』になっている。

無人機残り21機。

専用機持ち全員無事。

「敵無人機部隊の殲滅を再開する」

そう言ってエネルギーの翼を広げ、無人機に向けて福音と同じ攻撃をした。

「敵無人機の殲滅完了。続いて『銀の福音』の停止を行う」

蓮は2丁のバスターライフルを収納して、風殺と風雷を呼び出して福音に斬り掛かる。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルBで対処する』

エネルギー翼を大きく広げる。そして次の回避の後、福音の掃射反撃がはじまった。

「嘗めるな！」

蓮はそれをエネルギー弾で相殺し、左手の風雷を収納して、左手で福音の頭を掴み海面に叩きつけようとするが、福音はエネルギー翼で蓮を掴み、エネルギー弾雨を零距离で仕留めようとする。

「甘い」

蓮は福音のエネルギー翼で包まれた瞬間に、エネルギー翼で自分の体を包んだ。

「蓮！」

零距离でエネルギー弾雨を食らわされる。

「ふん、……甘いな」

福音がエネルギー翼を広げ離れる。そこには、黒いエネルギーの球体があった。

——機体修復完了。再展開可能——

そして、黒いエネルギーの球体から黒いエネルギー翼を広げた無傷の蓮がいた。

「行くぞ。ゼロ、再展開」

両手両足のアーマーを解除して、その後すぐにゼロが展開された。

「ふん、やっと来たか」

「ああ、みんな、無事か!？」

白式第二形態・雪羅を纏った一夏が来た。

「一夏っ、一夏なのだな!？体は、傷はっ……!」

慌てて声を詰まらせる箒の元へと飛んで、一夏は答える。

「おう。待たせたな」

「よかった……よかった……本当に……」

「なんだよ、泣いてるのか？」

「な、泣いてなどいないっ!」

ぐしぐしと目元をぬぐう箒に、一夏は優しく頭を撫でる。

「ちょうどよかったかもな。これ、やるよ」

「え……?」

一夏は持ってきたものを箒に渡す。

「り、リボン……？」

「誕生日、おめでとうな」

「あっ……」

「それ、せっかくだし使えよ」

「あ、ああ……」

「じゃあ、行ってくる。――まだ、終わってないからな」

言うなり、一夏は蓮の隣に行った。

「遅刻だ。馬鹿者」

「すまん。ってか、その翼は？」

「話しは後だ。それより――」

「ああ、わかってる。再戦と行くか！」

一夏は雪片式型を右手だけで構え、斬り掛かる。

それをひらりとものけぞってかわした福音を、蓮のエネルギー翼から弾雨が襲う。

「墜ちろ！」

しかし、福音は弾雨を弾雨で相殺する。

『敵機の情報を更新。攻撃レベルAで対処する』

エネルギー翼を大きく広げ、さらに胴体から生えた翼を伸ばし、福音の掃射がはじまった。

「そう何度も食らうかよ!」

一夏は避けようとはせず、左手の新兵器《雪羅》を構えて前へと飛ぶ。

——雪羅、シールドモードへ切り替え。相殺防御開始——

キンッ!という甲高い音を鳴らして、左腕の雪羅が変形し、それから光の膜が広がって、弾雨を消して行く。

「無駄だ!」

蓮は片側のエネルギー翼で自分の体を包み弾雨を相殺して行く。

『状況変化。最大攻撃力を使用する』

福音の機械音声がそう告げると、翼を自身へ巻き付け球状になって、翼が回転しながら一斉に開き、全方位に対して嵐のようなエネルギーの弾雨を降らせる。

「ちっ」

一夏は雪羅のシールドモードで相殺しようとするが、蓮が一夏の前に立ち、エネルギー翼で相殺する。

「織斑、シールドモードは極力使用するな」

「わかった」

一夏は右手の雪片と左手の雪羅、それぞれから零落白夜の光刃を作り出して、再度福音へと飛び込んだ。

「ぜらあああっ!!」

一夏が零落白夜の光刃がエネルギー翼を断つ。

「ちっ」

そして、蓮が片側のエネルギー翼を断つが、回避されてしまい失った翼は再度構築される。

「織斑、白式のエネルギー残量は？」

「残り20%だ。お前は？」

「残り80%だ。デュノアからエネルギーをもらってこい」

「わかった。「一夏!」箒!」

「一夏、これを受け取れ!」

紅椿の手が、白式へと触れる。

「な、なんだ……? エネルギーが——回復!? 箒、これは——」

「今は考えるな！福音を止めるんだ！」

「おう！」

「織斑、俺が動きを止める」

「頼む」

蓮は福音に接近して、福音の両手を掴む。

「やれ！一夏！」

「今度は……逃がさねえええっ！」

最後の突きを回避しようと、福音は蓮に翼全てで一斉射撃を行うが、蓮のエネルギー翼で相殺され、蓮が福音に離れた瞬間に一夏が福音の胴体へと零落白夜の刃を突き立てた。

「おおおおおっ！！」

エネルギー刃特有の手応えを感じながら、さらに一夏は全ブースターを最大出力まで上げる。

押されながらも、一夏の首へと手を伸ばす福音。その指先が喉笛に食い込んだところで、福音はやっと動きを停止した。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

アーマーを失い、スーツだけの状態になった操縦者が海へと墜ちていく。

「しまっ——!?!」

「——ったく、ツメが甘いよ、ツメが」

鈴が海面接触ギリギリで操縦者をキャッチした。

「終わったな」

「ああ……。やっと、な」

「いや、まだだ」

「なに?」

「おい。いつまで高みの見物をしている」

しかし、誰も出てこない。

「ちっ」

蓮はバスターライフルを呼び出し、誰もいない所に撃った。

「ふん、……やっと出てきたか——」

蓮が撃った所の真横から青いISが現れた。

「——アリア」



## 25話 暴走

「あ、アリアさんですの？」

「でも、トーナメントの時と機体が違うよ」

「当たり前だ。アストレイは代用機だ」

「ということは、アリアは」

「ああ、俺たちの敵だ」

と、言った瞬間に蓮は風殺と風雷を呼び出し、エクシアに斬り掛かる。

エクシアは2本のブレードで受け止め、鏖迫り合いになる。

「やはり、織斑の捕獲よりも俺の抹殺を優先したか」

「ええ、我々にとってあなたは邪魔者ですから」

「蓮！」

「来るな！こいつの狙いはお前と福音だ！」

「どういうことだ？」

「速く離脱しろ！」

「よそ見る余裕があるのかしら？」

鏢迫り合いの状態からエクシアに刺されたところを蹴られ体制を崩す。

「ぐっ」

蓮は追撃するエクシアに向けて、エネルギー翼から弾雨を降らす。

「！」

急なことで、無理やり避けたため多少被弾した。

「やるな。流星は超兵ってことか」

「知ってたのね」

「ああ、並み外れた身体能力が超兵の特徴だからな」

そう言って、再び切り合う。

「お前に指示をしているのは誰だ？」

「あなたをよく知っている人よ」

「そうか。……なら」

鏢迫り合いになり、至近距離でエネルギー弾を撃つ。

「くっ」

さっきの爆発で2本のブレードを手放した。

「力尽くでも聞かせてもらう」

蓮は風殺と風雷でエクシアに斬り掛かり、エクシアは2本のビームサーベルを取り出して受け止める。

「お前はWing Systemを使わないのか？」

「生憎、私はXを持ってないので」

「そうか。だからと言って、手は抜かないぞ」

と、言ってエクシアのビームサーベルを2つ叩き落とした。

「これで！」

「くっ、トランザム！」

風殺と風雷がエクシアを切り裂こうとした瞬間、エクシアが消えた。

「またか……」

蓮の目の前には、赤いエクシアがいた。

「制限時間があるので、手早く仕留めさせてもらいます」

エクシア右腕のソードの攻撃を辛うじて、防いでいる。

「さっきまでの威勢はどうしました？」

「ほざけ。ゼロシステム起動」

と、言うどゼロの胸部にある緑色の球体が輝き、エクシアの一撃をかわす。

「!？」

「たとえどれだけ速くても、未来が見える俺が有利だ」

それから、エクシアの攻撃は全て避けられるか、受け止められる。

「その程度か？」

「くっ」

エクシアはビームダガーを取り出して、蓮に向けて投げる。

「くだらん」

蓮はそれを風雷で弾く。

「フアング！」

翼の裏側から8機のビットをシュウティングモードで射出する。  
なぜ8機なのかと言うと、福音と無人機に4機破壊されたからです。

「くっ」

エクシアは右腕のソードをライフルモードと左手首付近のビームバ

ルカンで、ビットを迎撃する。

「なかなかだな」

さっきので、エクシアは2機のビットを破壊した。

——ゼロシステム停止まであと2分——

「そろそろ終わりにする」

残りのビットを回収して、風殺と風雷で斬り掛かる。

「トランザムもそろそろ終了だろ？」

「ええ、だから——」

「「終わらせる！」」

蓮は風雷で右腕のソードを受け止め、風殺でエクシアを切り裂くが、もう一本のビームダガーで受け止める。

——ゼロシステム制限時間到達しました。システムを停止します——

と、ゼロのハイパーセンサーが告げる。

（血を吐かない？　どういうことだ？　まあ、今は好都合だ）

左手のビームダガーを叩き落とし、風殺で斬ろうとした。

「「!？」」

2人が離れ、さっきいた所にビームが通りすぎる。  
そして、撃ってきた方を見るとそこには、何もなかった。

「どこにいる。くっ」

突然、後ろから撃たれたがそれほどシールドエネルギーを削られなかった。

（トランザムを使ったにしては、威力が低い。ということはBT兵器か？）

それから、ビームを紙一重でかわす。

「どうする？アリア。あのビット、明らかお前も狙っているぞ」

「そのようね」

「どうする？共同戦戦でもするか？」

「OKよ」

そして、2人は共同でビットの迎撃をはじめた。

（このビット、ゼロのフアングより速い）

迎撃をするが、ビットの動きが速く破壊できない。

「！」

（BT兵器ではなく、ファング）

ビットの1機がサーベルモードで突っ込んでくる。

（しまった。避けれない）

ビットは蓮の背後から突き刺そうとした、その瞬間、蓮の間に影が割り入ってきた。

「!？」

アリアが蓮の盾になり、ビットに刺されアーマーを失い落下する。

「アリア！」

蓮は両手のアーマーを部分解除して、アリアをキャッチした。

「しっかりしろ！おい！アリア！」

「西…城…蓮」

彼女の声はとても弱々しかった。

「なぜ庇った？」

「あなた…を殺す…のは私…の任務…です。だから、私…以外の…人に殺…され…ないで…ください…ね」

と、言ってアリアは瞳を閉じてぐったりとし、肌からはアリアの体が冷たくなった。

「馬鹿者。……自分で殺そうとした相手を庇うな」

「おうおう。ずいぶん感動的じゃねえか」

「!?!」

突然、声が聞こえその方を見た。

「西城……優也」

「久しぶりだな。X-01いや、我が息子よ」

「蓮。誰なんだ?それに西城って」

離脱していなかった一夏が来た。

「アリアを頼む」

と、言っで一夏にアリアを預け、左目の眼帯を外した。

「蓮。お前目の色が」

そう、蓮の左目は赤ではなく、黒に染まっていた。

蓮は一夏を無視して西城優也のもとに行く。

「なぜ貴様が生きている?」

「朝田に助けられたんだよ」



「そうか。じゃあ今度は、跡形なく殺してやる」

と、言って右腕のリミッターの1つを外す。  
そうすると、エネルギー翼の色が濃くなる。

「なんだそれは？」

「リミッターだ」

「ずいぶんと、しょうもない物をつけやがって」

と、言っつて優也は大型ブレードで斬り掛かり、蓮は風殺と風雷で受け止める。

「なぜアリアを殺した？」

「決まっている。使い物にならないからだ。どうした？泣いてるのか？赤の他人だぞ？」

「黙れ！」

蓮は大型ブレードをはねのけ、追撃をかけるが大型ブレードで受け止められる。

「くっ」

蓮は至近距離でエネルギー弾を撃つ。

「どうやら、覚醒したようだな」

「どういうことだ？」

「普通Wing Systemの翼の色は白のはず。だが、お前の翼の色は黒だ。しかも、できないはずの攻撃ができるということだ」と、言ってから斬り掛かり、風殺と風雷で受け止められる。

「「フアング！」」

と、言っでビットが射出され全部ぶつかり合っで爆発する。

「まだあるんだよ！」

そして、2機のビットが射出され、ビットは一夏たちの方へ向かった。

「しまっ「よそ見する暇があるのか！」くそっ」

すると突然、爆発音が聞こえ、優也を蹴り飛ばして、一夏たちの方を見る。

「!？」

煙の中から出てきたのは――

「シャル…ロット………」

負傷したシャルロットで、出血のせいで気絶していて、今はラウラがキャッチしている。

「……………」

「よそ見してんじゃねえよ」

と、言って大型ブレードで背中を斬ら落下する。

「蓮！」

そして、蓮は海に沈んだ。

―シャルロットをやったのは誰だ？―

（西城優也だ）

―お前は どうしたい？―

（跡形もなく殺す）

―力を欲するか？―

（ああ、だから俺に力を……力をよこせ）

突然、右腕のアーマーが勝手に部分解除して、リミッターの最後の1つが碎けた。

――《Wing System》をX<sup>イクス</sup>モードに移行――

と、ゼロのハイパーセンサーが告げ、ゼロが黒いエネルギーに包まれ、アーマーの形状が変わる。

「……………」

形状の変化が終わり、アーマーは最低限で展開しており、背中には黒い一对のエネルギー翼と別の黒い翼があり、そして、両手には黒い炎が纏っていた。

「……………」

勢いよく海中を飛び出し、優也に突っ込む。

「!？」

凄まじいスピードで優也は吹き飛ばされる。

「なんだ？」

上にいる蓮を見た。

「ははははっ、成功だ！成功したぞ！Wing Systemと、ISの融合が！名前は……X<sup>イクス</sup>Wingだ」

「……………」

蓮は無言で風殺と風雷を呼び出し、斬り掛かる。

「スピードが上がっている」

「…す……」

「はあ？」

「殺す……」

「暴走してやがる。全くとんだ出来損ないだ。だからよ——」

鏢迫り合いから蓮をはねのけて、大型ブレードで斬る。

蓮はそれを風殺と風雷で受け止められるが——。

「殺してやるよ」

風殺と風雷は刀身が折れて、蓮の体を切り裂く。

「……………」

蓮は左手で大型ブレードを掴み、右手には光の粒子が1本の刀へと形を変え、現れた刀は刀身に黒い炎が纏っている。

「……………！」

そして、蓮はその刀を振り下ろす。

「ちっ」

優也は大型ブレードを収納して、離れながら左腕についているハンドガンを撃つ。

「……………」

蓮はそれを避け斬り掛かる。

優也はそれを右手に大型ブレードを呼び出して、鏢迫り合いになる。

「あの野郎、面倒な武器入れやがって」

「……………」

蓮は鎧迫り合いから、2門のビーム砲を展開して、プラズマを帯びた黒いビームを撃つ。

「ちっ」

優也はそれを紙一重で避け離れるが、蓮は続けてプラズマ砲を撃ちながら、刀を降って黒いエネルギー弾を放つ。

「ちっ。つくづく殺すのが面倒なガキだ」

接近してくる蓮をハンドガンで撃ちながら、距離をとる。

「!?!」

蓮は瞬時加速で優也の背後に回り、刀で背中を斬り、プラズマ砲を撃つ。

「ちっ。これ以上の戦闘は無駄か」

現在の優也のISのダメージレベルはCを越えており、修復不可能状態になっている。

「ちっ、次はちゃんと殺してやる」

と、言って優也は離脱して行くのを蓮は、プラズマ砲と左手にツインバスターライフルを展開して撃ち、エネルギー翼からは、エネル

ギー弾雨を降らせる。

それを蓮は、優也の姿が見えなくなるまで続けた。

「……………」

優也の姿が消え、蓮は空中に浮いているだけだった。

「無事か？蓮」

「……………」

一夏が蓮に近寄って、話し掛けるが蓮は黙ったままだった。

「帰るぞ、蓮」

「……………」

一夏が蓮の肩をさわった瞬間――

「!？」

蓮が斬り掛かってきた。

「おい!どうしたんだよ、蓮!」

「…す………」

「え?」

「殺す………」

蓮はためらいもなく一夏に刀を振り、一夏は雪片で受け止められるが吹き飛ばされる。

「一夏さん！」

セシリアは吹き飛ばした一夏に追撃をかけようとする蓮を、《ライトMk?》の射撃で妨害する。

蓮はセシリアに向けて加速して、海面に叩き落とす。

『いっくん、聞こえる?』

「束さん」

『逃げて。今のれっくんは暴走してるの。だから――』

「止めます」

『ダメ!逃げ』

一夏は通信を切って、蓮を止めに行く。

「おおおっ！」

一夏が雪片で斬り掛かるのを、左に少し避け雪片の刃に当たらず、左手に一夏の頭を掴み海面に叩きつけようとする。

「一夏！」

ラウラが八〇口径レールカノン《ブリッツ》で、蓮を撃つ。



蓮は一夏を離して、避けてエネルギー弾雨をラウラに向けて降らす。

「たああああっ!!」

箒が雨月と空裂で斬り掛かる。

蓮は空裂を刀で受け止め、雨月を左手で掴む。

「なっ!？」

刀身から放出されるエネルギーを、左手に纏っている黒い炎で相殺する。

そして、2門のビーム砲を展開して撃とうとする。

「箒!」

一夏が荷電粒子砲を撃ち、蓮に直撃して蓮は吹き飛び、一夏に突っ込もうとした瞬間、一夏たちの間に誰かが割り入ってきた。

〈蓮SIDE OUT〉

〈シャルロットSIDE〉

「う……………」

朦朧とする意識のなか、周りを見渡す。  
隣には福音の操縦者が横になっている。

「目が覚めたのね」

近くには鈴がいて、空は今も誰かが戦っている。

「誰が戦ってるの」

「今一夏たちが蓮と戦ってる」

「え！？どうして？」

「蓮が……暴走してるの」

シャルロットが気絶してからなにが、あったか鈴に話してもらった。

「行かなきゃ」

「はあ？あんた何考えてるの？死ぬ気？」

現在、シャルロットは負傷していて、リヴァイヴはダメージレベルがCになっていて、到底今の蓮と戦えるような状態ではない。しかし、シャルロットは鈴を無視して蓮のもとへと向かう。

（蓮は僕が止める）

一夏の荷電粒子砲が蓮に直撃して、一夏に突っ込もうしてわずかしが残ってないエネルギーで瞬時加速を使って、蓮と一夏の間に割り入った。

「シャルロット！」

一夏が叫び、蓮が何の躊躇もなくシャルロットを刀で突き刺そうとする。

全員が最悪の事態を想定した。

しかし――

「「「「え!?!」」」」

シャルロットと刀の間に見えない壁があるかのように、ぴたっとシャルロットの手前で止まる。

「蓮?」

「……………」

蓮は先ほどから、エネルギー翼の色が薄くなっていくぐらいしか変化がない。

それからしばらくして、エネルギー翼が消えた。

「ゴホッ」

黒いエネルギー翼が消え、いきなり蓮は血を吐いた。

「蓮!」

「シャ……ル……ロット……」

ゼロのアーマーが解除され、海に落下するのをシャルロットがキャッチして、戦いが終わった。

シャルロットSIDE OUT

## 26話 帰還

〽一夏SIDE〽

「作戦完了——と言いたところが、お前たちは独自行動により重大な違反を犯した。帰ったらすぐ反省文の提出と懲罰用の特別トレーニングを用意してやるから、そのつもりでいろ」

「……はい」

一夏たちの帰還は、それはそれは冷たいものだった。

腕組みで待っていた千冬にきつく言われ、大広間で30分以上正座している。

蓮は帰還してすぐに、救護班がどこに運んだ。

「あ、あの織斑先生。もうそろそろそのへんで……。け、けが人もいますし、ね？」

「ふん……」

怒り心頭の千冬に対して、山田先生はおろおろわたわたとしている。さつきから救急箱や、水分補給パックを持ってきたりと忙しい。

「じゃ、じゃあ、一度休憩してから診断しましょうか。ちゃんと服を脱いで全身見せてくださいね。——あっ！だ、男女別ですよ！わかってますか、織斑君!？」

『脱いで』のあたりで女子がそれとなく自分の体を隠したのを見て、一夏は軽く傷ついた。

「それじゃ、みなさんまずは水分補給をしてください。夏はそのあたりも意識しないと、急に気分が悪くなったりしますよ」

はいと返事をして、一夏たちはそれぞれにスポーツドリンクのパックを受け取る。

「……………」

「な、なんですか？ 織斑先生」

じーっとこっちを睨んでいたので、一夏は居心地悪さからつい口を開いてしまった。

「……………しかしまあ、よくやった。全員、よく無事に帰ってきたな」

「え？ あ……………」

なんだか照れくさそうな顔をしていたように見えたが、すぐに背中を向けられて表情は見えなくなる。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

女子一同一夏を見て——もとい、睨んでいる。

「あの、織斑君？みんなの診察をしますから、ええと——」

「「「とつとと出てけ！」「」「」」

5人の声に押されて、一夏は慌てて廊下に脱出。  
ぴしゃりと閉じた襖に、一夏は背中を預けて深く息を吐いた。

「ふう……」

（仲間を、守れたよな。俺と——白式は）

〈一夏SIDE OUT〉

〈束SIDE〉

「紅椿の稼働率は絢爛舞踏を含めても四十二パーセントかあ。まあ、こんなところかな？」

ディスプレイに浮かぶ各種パラメータを見ながら、その女性が無邪気に微笑む。子供のように。天使のように。月明かりが照らすその顔は、いつもと変わらない。その顔は、篠ノ之束その人だった

「んー……ん、ん」

鼻歌を奏でながら、別のディスプレイを呼び出し、白式第二形態の戦闘映像を眺める

「はー。それにしても白式には驚くなあ。まさか操縦者の生体再生がまで可能だなんて、まるで――」

「――まるで、『白騎士』のようだな。コアナンバー001にして初の実戦投入機、お前が心血を注いだ一番目の機体に、な」

音もなく千冬が姿を現す。漆黒のスーツを着た姿は、静かな威厳に満ちていた。

「やあ、ちーちゃん」

「おう」

お互いに振りむかない。背を向けたままでもどんな顔をしているかわかっているように。

「ところでちーちゃん、問題です。白騎士はどこに行ったんでしょか？」

「……白式を『しろしき』と呼ばば、それが答えなんだろう？」

「ぴんぽーん。さすがちーちゃん。白騎士を乗りこなしたただけのことはあるね」

かつて『白騎士』と呼ばれた機体はそのコアを残し解体され、第一世代作成に大きく貢献した。そしてそのコアは、とある研究所襲撃事件を境に行方不明になり、いつしか『白式』と呼ばれる機体に組み込まれていた。

「それで、うふふ。たとえばの話、コア・ネットワークで情報をやり取りしていたとするよね。ちーちゃんが一番最初の機体『白騎士』

と二番目の機体『暮桜』が。そうしたら、もしかしたら、同じワンオフ・アビリティを開発したとしても、不思議じゃないよねえ」

「……………」

千冬は、答えない。しかしそれに構わず束は続ける。

「それにしても、不思議だよねえ。コアは初期化してあったのにねえ。私がしたから確実なだけだね」

「不思議なこともあるものだな」

千冬は、次は私の番と言うように話し始める。

「……そうだな。私も少したえ話をしよう」

「へえ、ちーちゃんが。珍しいねえ」

「例えば、とある天才が一人の男子の高校受験場所を意図的に間違えさせ、そこにあるISをその時だけ動けるようにする。ことが出来るとして、そうすると、本来男子が使えないはずのISが使える、ということになるな」

「ん？でも、それだと継続的に動かないよねえ」

「そうだな。お前は、そこまで長い間同じことをしないからな」

「えへ。飽きるからね」

「……で、どうなんだ？とある天才」



「どうなんだろうねー。うふふ、実のところ、白式がどうして動くのか、私にもわからないんだよねえ。いっくんはIS開発に関わってないはずなのにね」

「ふん……。まあいい。次のたとえ話だ」

「多いねえ」

「嬉しいだろう？」

「違うね、と返して束は千冬の話に耳を傾ける。

「とある天才が、大事な妹を晴れ舞台でデビューさせたいと考える。そこで用意するのは専用機と、どこかのISの暴走事件だ」

束は答えない。そして、千冬も言葉を続ける。

「暴走事件に際して、新型の高性能機を作戦に加える。そこで天才の妹は華々しく専用機持ちとしてデビューというわけだ」

「へえ、不思議なたとえ話だねえ。すごい天才がいたものだね」

「ああ、すごい天才がいたものだ。かつて、12カ国の軍事コンピュータを同時にハッキングするという歴史的な事件を自作した、天才がな」

束は答えない。千冬も、もう言葉は続かない。

「ねえ、ちーちゃん。れっくんがゼロに乗って戦う理由知ってる？」

「知らないな」

「じゃあ、いずれ聞いてみなよ。それと、今の世界は楽しい？」

「そこそこにな」

「そうなんだ」

岬に吹き上げる風が、一度強くうなりを上げた。

「-----」

その風の中、何かをつぶやいて……束は消えた。  
忽然と。突然と。

「……………」

千冬は息を吐き出して、後頭部を押しつけるように木に寄りかかる。  
その口元から漏れる声は、潮風に流れて消えた。

## 27話 蓮の過去

〽一夏SIDE〽

翌朝。朝食を終えて、すぐにIS及び専用装備の撤収作業に当たる。そうこうして10時を過ぎたところで作業は終了。全員がクラス別のバスに乗り込む。

「あゝ……」

座席にかけた今の一夏は、一言で言うところボロボロ。

昨日は1時間近く追い回されたあげく、旅館を抜けたのが千冬にばれ大目玉を食らい、睡眠時間は3時間強。それプラス、重労働で死に掛けている。

「すまん……誰か、飲み物持っていないか……？」

しんどくて一夏は、周りに声をかけてみたが、

「……ツバでも飲んでいろ」とラウラ。

「知りませんわ」とセシリア。

鈴は二組なのでいない。蓮はあれから目を覚まさず、今は別の車を手配してその中にいる。一夏は最後の希望である箒へ視線を向ける。

「なっ……何を見ているか！」

赤くなったかと思うと、いきなりチョップを出してきた。

「ふ、ふんっ……!」

結局、全員飲み物をくれないらしい。

「うー……しんど……」

「「「い、一夏っ」」」

「はい？」

三人の声が同時に聞こえて、一夏は振り向くと同時に、車内に見知らぬ女性が入ってきた。

「ねえ、織斑一夏くんっているかしら？」

「あ、はい。俺ですけど」

一番前にいたことが幸いしすぐに返事を返す。女性は、20歳くらいでブルーのカジュアルスーツを着ている

「君がそうなんだ。へえ」

女性はそう言うと、一夏を興味深そうに眺める。

「あ、あの、あなたは……?」

「私はナターシャ・ファイルス。『銀の福音』の操縦者よ」

「え————」

予想外の言葉に一夏が困惑していると、頬にいきなり唇が触れた。

「ちゅっ……。これはお礼。ありがとう、白いナイトさん」

「え、あ、う……。？」

「じゃあ、またね。バイ」

「は、はあ……。？」

ナターシャはそのまま手を振りながらバスから降りて行った。

＼一夏SIDE OUT＼

＼ナターシャSIDE＼

「……………」

バスから降りたナターシャは、目的の人物を見つけてそちらへと向かう。

「おいおい、余計な火種を残してくれるなよ。ガキの相手は大変なんだ」

そう言ってきたのは、千冬だった。

ナターシャは、その言葉に少しだけはにかんで見せる。

「思っていたよりもずっと素敵な男性だったから、つい」

「やれやれ……。それより、昨日の今日でもう動いて平気なのか？」

「ええ、それは問題なく。――私は、あの子に守られていましたから」

ここで言う『あの子』とは、つまり暴走によって今回の事件を引き起こした福音のことを指していた。

「――やはり、そうなのか？」

「ええ。あの子は私を守るために、望まぬ戦いへと身を投じた。強引なセカンド・シフト、それにコア・ネットワークの切断……。あの子は私のために、自分の世界を捨てた」

言葉を続けるナターシャは、さっきまでの陽気な雰囲気など微塵も残さず、その体に鋭い気配を纏っていく。

「だから、私は許さない。あの子の判断能力を奪い、全てのI Sを敵に見せかけた元凶を――必ず追って、報いを受けさせる」

福音はコアこそ無事であったが、暴走事件を招いたことから今日未明に凍結処理が決定された。

「……何より飛ぶことが好きだったあの子が、翼を奪われた。相手が何であろうと、私は許しはしない」

「あまり無茶なことはするなよ。この後も、査問委員会があるんだろ？ しばらくおとなしくしておいたほうがいい」

「それは忠告ですか、ブリュンヒルデ」

IS世界大会『モンド・グロッソ』その総合優勝者に授けられる最強の称号・ブリュンヒルデ。  
千冬はその第一回受賞者であったが、正直その名前で呼ばれることはすきではなかった。

「アドバイスさ。ただのな」

「そうですか。それでは、おとなしくしていきましょう。……しばらくは、ね」

一度だけ鋭い視線を交わしあった2人は、これ以上言葉なくお互いの帰路に着く。

——またいずれ。

そんな言葉が、2人の背中にはあった。

〈ナターシャSIDE OUT〉

〈蓮SIDE〉

「う……………」

全身に痛みを感じ蓮は目覚めた。

「蓮？」

「デュノア……」

朦朧とする意識の中で、蓮の視界に入ったのはシャルロットだけではだれもいなかった。

「あの場に居た専用機持ちと、織斑先生を呼べ」

「うん、わかった」

そう言ってシャルロットは、保健室をでて一夏たちを呼びに行った。

（あの男……まだ生きていた……それに、朝田まで……あいつらはまだあの計画を）

ガチャ。

「蓮、もう大丈夫なのか？」

「ああ、大丈夫だ」

「西城、聞かせてもらどうぞ。今回のことを」

「ああ」

全員が保健室に入って、適当なところに座ったのを確認して、蓮は話を始めた。

「あのISに乗っていたのは、俺の……父親だ」

「「「「「………」」」」」

「俺が3歳のときだ。そのとき両親が離婚して俺はあの男に引き取



られた。あの男は亡国機業の研究者で超兵計画を編み出した」

「超兵？」

聞きなれない言葉に、一夏は蓮に聞いた。

「最強の兵士を作るために編み出された計画で、人並み外れた身体能力の持っている。アリアもその1人だ。俺はその計画で、体中を改造さ、同類を殺させた」

そう言って蓮は左目の眼帯を取る。

「実験は順調に進み、今度はWing Systemを体内に埋め込む実験に移った」

「Wing Systemってあの翼のことか？」

「そうだ、今までに成功したことのない実験だったが成功したため、俺には試験体X-01という識別番号を新たに与えられた。その後、実験は続いたが、進展がなくついに処分に踏み切った。俺はそれを逃れようと、研究所にいる人間をすべて殺したはずだった――」

「なのに、あの男は生きていた」

と、言ったのは千冬だった。

「ああ、そしてそいつを助けたのは、朝田佳祐。ともに超兵計画にかかった人間だ」

「「「「「……………」」」」」」

「話は以上だ」

「西城、お前がゼロに乗って戦う理由は何だ？」

千冬は先日、束が言っていたことを聞いた。

「俺は……超兵とそれにかかわった人間を抹殺することだ」

「死ぬかもしれないぞ？」

「ふん……命なんて安いものだ、特に俺のは」

と言って蓮は立ち上がった。

「お前たちでは、超兵には勝てない。それと、邪魔をするならお前達も殺す」

そして蓮は保健室を出て行った。

## 28話 研究者

「……………」

あらから、蓮は一度、部屋に戻り屋上にいた。

「俺は超兵。戦うだけのために作られた存在……」

夜の風は夏なのに涼しく感じた。

——PPPP

突然、通信が入った。

「……なんのようだ？ボーデヴツヒ」

「蓮……シャルロットがさらわれた」

「だからどうした」

「なに？」

「俺には関係ない」

「関係はあるぞ。さらった奴は亡国機業ファントム・タスクの研究者だと言った」

「!?!」

それを聞いて蓮は通信を切った。

く蓮SIDE OUTく

くラウラSIDEく

「……………」

蓮の話が終わり、全員が各自の部屋に戻った。

「ラウラ……僕はどうしたらいいんだろう？」

「……お前はあいつを闇から救い出すと決めたのだろうか？」

「うん……」

「だったら。救い出す方法を考えればいい。時間はたくさんあるのだからな」

コンコン。

「一夏か？」

ラウラがドアを開けろとそこには、白衣を着た男がいた。

「デメエではねえな。どこだ？」

「貴様……何者だ！」

「ああん？何者か？そうだな……亡国機業フアントム・タスクの研究者とでも名乗っておくか」

「なっ!？」

突然、背後に回られラウラは気絶した。

「デメエがシャルロット・デュノアだな？」

「だったら何ですか？」

「なに、試験体X－01をおびき寄せる餌になってもらうだけだ」と、言って白衣の男はシャルロットを気絶させ、どこかに連れ去った。

「う、あ……………」

しばらくたって、ラウラは目を覚ました。

「シャルロット？」

親友の名を呼ぶが、返事がない。

（あの男を倒せるのは、教官か蓮しかない）

と、思いラウラは蓮に通信をつないだ。

＼ラウラSIDE OUT＼

＼蓮SIDE＼

「……………」

蓮は部屋に戻りコア・ネットワークを使って、シャルロットの現在位置を割り出そうとした。

「ちッ」

しかし、ステルス潜伏モードにされたのか、ジャミングされているのか、リヴァイヴの反応が見つからなかった。

——♪

突然、携帯が鳴った。しかもディスプレイには『非通知』と表示されていた。

『—————よう。久しぶりだなあ試験体X—01』

「……朝田」

電話をかけてきたのは、優也を助けた朝田佳祐だった。蓮はすぐに空中投影のディスプレイとキーボードを呼び出し逆探知をはじめた。

『シャルロット・デュノアってガキは、俺が預かった』

「だからどうした」

『おうおう。冷たいね。知ってるんだぜ、お前がこのガキのこと好きだってことおよお』

「黙れ。すぐに殺しに行つてやる」

このやり取りをしているうちに、逆探知は終わっており、居場所が特定した。

『まあ、返り討ちにしてやるがなあ』

と、言って朝田は電話を切った。朝田がかけていた場所は学園が少し離れた、ビルだった。

「……………ここか……………」

蓮がいるのは、学園から少し離れた、ビルの入り口の前にいた。服装は学園の制服ではなく、黒色の動きやすい服装できた。

「Wing System……機動」

リミッターを2つ外して、Wing Systemを機動させて、飛翔した。朝田がいたのは、三階で少数の部下と、机にはシャルロットが寝ていた。右手に光の粒子が右手に集まり、一振りの刀を形成し、黒い炎が刀身に纏う。そしてガラスを蹴り破り朝田に斬りかかる。

「よつと」

振りかぶったときに赤椿の雨月のように、刀からエネルギー弾が放たれ、ほかの部下の目の前に着弾し吹っ飛び気絶した。

「殺しに来たぞ。朝田」

「返り討ちにしてやるよ。X－01」

朝田も刀を取り出し、構える。

「……………」

「おらよ！」

ガキン！と刃がぶつかり合う音が鳴り響く。それが何回も続く。

「ちい、ちよろちよろと」

蓮は緩急をつけて、次々と斬撃を繰り出す。

「ちい。あれを使うか……………」

佳祐はいったん離れて、左手を高く上げて『カチン…………』と指を鳴らした瞬間、蓮の身に異変が起きた。

「あああああっ！！！！！！」

突然、激しい頭痛に襲われ、鍊は悲鳴を上げる。



「ふん……ふははははははははは！……！！。ざまあねえぜ！」

朝田は、頭痛に苦しむ蓮を蹴り飛ばし、懷からなぞの装置を出した。

「これはなあ、脳量子波を人工的に発生させる装置でなあ。共鳴や干渉などの弊害するんだよ。まあ、Xを持つ奴は同じXを持つ奴の脳波じゃあいけねえけどな」

「まさか……まだXが……」

「ああ、新しいXが出来たんだよ。まあ、テメエはここで死ぬんだ。楽に逝かせてやるからおとなしくしてろやあ」

佳祐は刀を上段に構え、振り下ろす。

ガキン！！とビルに鳴り響いた。

29話 もう一つの人格

「ああ？」

頭痛に苦しんでいたはずの蓮が、刀を持って佳祐の斬撃を受け止めた。しかも、苦しんでいる様子もなく平然としていた。

「ははっ……はははははははははは！！」

鏑迫り合いから、佳祐を吹き飛ばし、突然、狂ったこのように笑い出した。

「ちい、あのがきついに狂いやがった」

「はははははは。おらあ！！」

高速で佳祐に接近して、連続で斬撃を繰り出す。

「おらあ！おらあ！おらあ！どうした朝田あ！！！」

「調子に乗ってんじゃねえよ、ガキがあ!!!!」

蓮の斬撃を防ぐが、押され始める。

「はははは、楽しいよな蓮よお」

「ああん？ テメエ、何もんだあ？」

「俺かあ？俺はなあ……西城零だあ！！」

また、鏢迫り合いから、佳祐を吹き飛ばした。

「そらよお！」

そこから、黒いエネルギー弾を放つ。

「ちい」

佳祐はそれを避けるが、零の次の一撃に反応が遅れた。

「ぜらあああああああ！！！！」

零の一撃をなんとか防ぐが、態勢を崩してしまい隙が出来た。零は  
 尽かさず、その隙に一撃を与える。

「ぐあああああああああああああああああああああああ  
あああああ!!!!!!!!!!!!!!」

その一撃は、佳祐の左腕を切断して、左肩からは血が大量に出血していた。

「ぐああああ……嘗めやがって……」

佳祐は右ポケットから、煙球を投げて、姿をくらしました。

「ちい、逃がしたか……」

「う、あ……」

気絶から目を覚ました佳祐の部下を見て、零はまた興奮した。

「はははははっ、ちょっとは楽しませてくれるんだろうなああ！  
！！」

目を覚ました佳祐の部下数名は一人目が斬り殺されると、敵わないとわかり逃げようとする。

「ああん？追いかけてここ？いいぜやってやるぜええ！！」

黒いエネルギー翼で、目標を追いかける。  
おもちゃ

「ひいい。や、やめて「死ねえ！」ぎやあああ！！」

「おらおらおらああ！！。逃げろ逃げろお。もっと俺を楽しませろ  
おお！！」

数分後……。

「や、やめてくれえ！たのむ、やめてくれええ！！」

「残念だったなあ。テメエはここで死ぬんだ」

そう言って、零は男の腹に刃を軽く刺す。

「ああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！  
！！」

「どうよ、一方的な暴力になす術もなく、命をすり減らしていく気分は？」

零はさらに刃を沈めていく。

「うわっふ、アッー、アッー、やめてくれ！やめてくれ！アッアッ、アッー！」。

「こいつは命乞いって奴だなアゝ最後はなんだアゝ？ママか？恋人か？今頃、走馬灯で、子供の頃からやり直してる最中かア！？まあここで死ねやあああああああ！！！！！」

刃が男の体を貫通して、刀身に纏っていた黒い炎は男の体を燃やしている。

「はははは、楽しいよな蓮、れええー！！！！！！ん！！！」

数分後……………。

「……………」

少し前の零はいなくなり、今はいつもの蓮に戻っていて、服は敵の血で少し汚れていた。

「すまなかった、シャルロット……………」

蓮はシャルロットは抱き上げて、連れて帰った。

（俺がいることで、周りに迷惑をかけるだけか…………）

コンコン。

ガチャ。

「なんだ……シャルロット!？」

「大丈夫だ。眠っているだけだ」

と、言って蓮はシャルロットをベットに運ぶ。

「……その血は誰のものだ？」

「お前には関係ない」

と、言って蓮は部屋を出て行った。

## 用語解説と人物紹介及びI S紹介？

名前 西城優也

身長 不明

体重 不明

年齢 不明

趣味 不明

好きな物 不明

人 不明

食べ物 不明

嫌いな物 不明

人 不明

食べ物 不明

専用I S 『スローネツヴァイ』 ↓ 『?????』

蓮の実の父親で、亡国企業の研究員で超兵計画の第一人者でもあり、篠ノ之束以外で唯一コアを作れる人間。

10年前に蓮の脱走で蓮に殺されかけたが、朝田佳祐により助けられた。

現在、ツヴァイは修復不可能状態にある。

名前 朝田佳祐

身長 不明

体重 不明

年齢 不明  
趣味 不明

イメージキャラクター 木原 数多（とある魔術の禁書目録）

好きな物 不明

人 不明

食べ物 不明

嫌いな物 不明

人 不明

食べ物 不明

専用IS 『??????』

西城優也と同じく、亡国企業の研究員で超兵計画の関係者でありWing Systemを作った人物。

10年前に蓮の脱走の時の生き残りで、西城優也を助けた人物。

現在、左腕切断と専用ISを所持していない。

名前 西城零

身長 169?

体重 53?

年齢 15歳

趣味 人殺し

イメージキャラクター ヒイロ・ユイ（新機動戦記ガンダムW）

好きな物 血

食べ物 特になし

嫌いな人 殺しがいのない奴



食べ物 特になし

専用IS「ダークネスウイング・ゼロ カスタム」

装備品 眼帯（左目） 首飾り ブレスレット（リミッター）

蓮のもう一つの人格で、人殺しを好む性格。10年前の研究施設での大量殺人をしたときから、でてきたが蓮も研究員を殺したため最近までは、別人格があることに気付かなかった。

## IS 紹介

機体名「ダークネスウイング・ゼロ カスタム」

世代 第零世代

機体イメージ ウイングガンダム ゼロ（新機動戦記ガンダムW Endless Waltz）

機体カラー 黒

待機状態 ネットクレス

篠ノ之束によるカスタム化と蓮の新たなゼロシステムを搭載した。全スペックが現行ISをはるかに凌駕しており、リミッターがついてある。

ゼロシステムは新たに蓮が作ったシステムで、一定時間（5分間）機体が戦況のデータを瞬時に取り込みパイロットにその状況からあり得る未来を見せるが、体への負担が大きく使用後血を吐く。

## 武装

ビームサーベル×6

ツインバスターライフ

フアング×12

サーベルモードと、シュウティングモードの2つのモードが使える。

ゼロ・フィールド

実弾兵器は逸れ、ビーム兵器は打ち消す特殊なバリアで、全方位展開ができるが効果が薄れる。

1回の使用でシールドエネルギーを大量消費するため、エネルギー兵器のエネルギーを吸収する。

ワンオフアビリティ

『バーストモード』

性能 エネルギーを1まで、消費し4分間ISの機動力と武器の威力を、5倍にする。

機体名「X<sup>イクス</sup>Wing」

機体イメージ 最低限のアーマーと、背中のエネルギー翼と翼（フリーダムガンダムの翼）

機体カラー 黒

ISとWing Systemが融合(?)した姿。  
両手に放出される黒い炎はエネルギーでできており、撃ち出すことも可能。

右腕のリミッターを全て外さないと、発動しない。  
現在、制御不可能で、XWingがゼロの第二形態なのかは不明。

武装

ビームサーベル×6

バラエーナ・プラズマ収束ビーム砲

背部ウイング内に計2門装備された高出力ビーム砲。  
ツインバスターライフルに次ぐ威力を持っている。

黒の鐘  
ブラック・ベル

銀の福音の《銀の鐘》と同じ。

ワンオフアビリティ

『バーストモード』

性能 エネルギーを1まで、消費し4分間ISの機動力と武器の威力を、5倍にする。

## 用語解説

### 《超兵計画》

最強の兵士を作るために編み出された計画で、人並み外れた身体能力の持っている。

### 《Wing Project》

Wing Systemを体に埋め込んで、さらに最強の兵士を作る計画で、蓮に埋め込むまでは拒絶反応により失敗する。適合した者には識別番号にXが付けられる。

現在、蓮以外でXを持つ者は確認されていない。

ちなみに蓮の識別番号は『被験体X-01』

### 《脳量子波》

超兵（Xを持つ者）が扱う脳波で、Wing Systemが体内に埋め込まれているためと考えられる。脳量子波を発生させることで、人が持っている空間認識能力・攻撃回避能力・反射能力などが高くなり、高い戦闘力を得ることができる。

超兵に付加されている脳量子波は他のXとの共鳴や干渉などの弊害も併せ持つ。

### 《人工脳量子波発生装置》

朝田佳祐が作り出した装置で、人工的に脳量子波を発生させて、Xを持つ者の脳量子波に共鳴や干渉などの弊害する装置。

## 《Wing System》

朝田佳祐が作り出したシステムで、システムを体に埋め込むが蓮に埋め込まれるまで、起動時に力に耐えきれず消滅した。適合した者には識別番号にXが付けられる。

現在、蓮以外でXを持つ者は確認されていない。翼の色は本当なら白なのだが、蓮は黒い翼が現れる。

ISが開発されWing Systemはスペックを1.5倍にする。

エネルギー兵器だけに限って防御できる。

本当は攻撃に使用はできないのだが、蓮の翼は攻撃に使用できる。

現在、右腕に付けているリミッターを4つ外すと暴走するため、3つが限界。

1つ外すと光弾の威力が福音の半分。

2つ外すと威力が福音と同等。

3つ外すと1.5倍。

4つ外すと2倍になる。

原因は不明だが、Wing Systemを起動中にゼロシステムを連続で起動できるが、Wing Systemを停止すると使用した分の体への負担がくる。1回分の吐血量の関係上、1日に3回が限界。

Wing System起動時にしか使えない武装

紅桜

Wing System起動時にしか使えない刀で、刀身には黒いエネルギーが炎のように纏っている。

能力は相手のバリアをエネルギー消費無しで切り裂くことができる。

他には、刀からエネルギー弾を放つ。  
要するに雪片と雨月の合体版。

### 30話 蓮VS敵IS三機

シャルロットSIDE

翌日、目が覚めたシャルロットにラウラが昨日のことを話した。

「つまり、僕が眠っている間に蓮に助けられたってことだね」

「そうだ。しかしお前を助けることはおまけでしかないだろう。私ファントム・タスクが亡国機業の研究者のことを話したら即通信を切った」

「けど……僕は蓮にお礼が言いたい。僕、蓮の部屋に行って来る」

そして、シャルロットは蓮の部屋に行った。ラウラもシャルロットについていった。

シャルロットSIDE OUT

蓮SIDE

「……………」

蓮は部屋にいて、ハッキングをしている。ちなみに一夏は前に真耶に部屋変え、今は別々になっている。

「……………」

突然、キーボードを叩く手が止まり、ディスプレイを見た。

「ここから、10キロ先熱源が3つ。あの3機か……」

ノートパソコンの傍には、封筒があった。それには『退学届け』と書かれていた。

蓮は窓から飛び出して、ゼロを展開して飛翔した。

蓮SIDE OUT

シャルロットSIDE

シャルロットとラウラは今、蓮の部屋のドアの前に立っている。

コンコン。

『……………』

ノックをするが、反応がない。

「出かけているのか？」

ガチャ。

「「!？」」

ドアが開き、おそろおそろ部屋に入る。

「蓮、いないの？」

部屋中を探すが、蓮の姿はなかった。



「ん？」

ラウラは机に置いてある、封筒を手取る。

「シャルロット」

「ん？なに？これって退学届けもしかして……織斑先生に伝える」

と、言ってシャルロットは封筒を持って、千冬のもとへ行った。

シャルロットSIDE OUT

蓮SIDE

学園から6キロ先に3機はいた。

「今回の目的はX-01の抹殺と白式の強奪よ」

「了解」

彼女達は目的地のIS学園に向かっていた。

「「！？」」

突然、3人をビームが襲う。

3人はすぐにそれを避けた。その先には――

「X-01」

ゼロを纏った蓮がいた。

「デユナメス、キュリオス、ヴァーチェを確認。ダークネスウィング・ゼロ カスタム。目標を破壊する」

蓮はツインバスターライフルを収納して、ビームサーベル6本を持って斬りかかる。

それをキュリオスが、ビームサーベルで受けとめる。

「アリアの仇、撃たせてもらうわ」

「ならば、仲良くアリアのところに連れて行ってやる。フアング！」

蓮はフアングをシュウティングモードで射出する。

（先にヴァーチェを潰す）

瞬時加速で一気にヴァーチェとの間合いを詰め、ビームバズーカを破壊する。

「アリス、離れて」

スナイパーライフルで牽制して、蓮とヴァーチェを離れさせる。

「ちっ」

蓮はまた瞬時加速でデユナメスとの間合いを詰めるが、キュウリオスに止められる。

「今よ」

右にデュナメスがスナイパーライフルを構え、左にヴァーチェが両肩のビームキャノンの砲口を蓮の向ける。

「ちっ……Wing System機動」

蓮は左手に持っているビームサーベルを収納して、右手首を部分解除してリリミッターを2つ外して、Wing Systemを起動してエネルギー翼でビームを防ぎ、至近距離でキュウリオスにエネルギー弾を当てる。

「なっ、速い」

紅桜を展開して斬りかかるが、瞬時にデュナメスは回避するが、スナイパーライフルを破壊する。

「クリス、逃げて」

ヴァーチェがビームキャノンを撃ち蓮とデュナメスを離れさせる。

「その機動性では」

ヴァーチェのビームキャノンを軽やかに避けて、間合いを詰めて紅桜の刃がヴァーチェに触れる寸前に――

「ナドレ！」

ヴァーチェの装甲がパージされ、別の機体が現れたと同時に、ゼロが動かなくなった。

「有効範囲内に存在するコア・ネットワークとリンクする全ての機体を、強制的に制御下に置く。これがナドレの真の能力。IS操縦者へのトライアルシステム。今よ、シエル、クリス」

「了解！」

キュウリオスとデユナメスが同時にビームサーベルで蓮に斬りかかる。

「ぐあああああああ！（まだか？ゼロ）」

「もう一撃！」

キュウリオスとデユナメスのビームサーベルが、迫ってくる。

——コア・ネットワークの切断を確認——

と、ゼロのハイパーセンサーが告げた。

「「「え？」」」

2本のビームサーベルが蓮に触れる寸前で、蓮は回避してキュウリオスの背中を斬ったが、かすったていどだった。

「コア・ネットワークを切断した……なら」

ナドレは何かのスイッチを出して、押した。

「！あああああああああ！……！！！！！！！！」

またあの時と同じく、激しい頭痛に襲われ、蓮は悲鳴を上げる。

「これで」

再びキュウリオスがビームサーベルで斬る。

「終わりよ」

そして止めの一撃は――

蓮SIDE OUT

シャルロットSIDE

「お、織斑先生！」

「なんだ？デユノア。騒がしいぞ」

「これを……」

千冬に渡したのは、蓮の部屋に置いてあった『退学届け』と書いてある封筒だった。

「あの馬鹿者……」

「教官！これを」

ラウラが持ってきたのは、蓮のノートパソコンでディスプレイには、学園から6キロ先に4つの熱源が映っていた。千冬は4つのち1つが蓮であることに気がついた。

「よし、織斑、篠ノ乃、オルコット、デュノア、凰、ボーデヴィツヒに学園外でのIS使用の許可をだす。西城をつれて帰って来い」

「「はい！」」

そして、シャルロット達は、蓮を連れ帰るために、蓮のもとへ向かった。

シャルロットSIDE OUT

蓮SIDE

「終わりよ」

止めの一撃は――

「え？」

紅桜によって受け流された。

「ハハハ！ハハハハ！オラァ！」

受け流すことで態勢を崩したキュウリオスを蹴り飛ばす。

「ハハハ！ハハハハ！三対一か？おもしれえきやがれ雑魚ども！」

「まさか……脳量子波が効いてない」

ナドレはビームサーベルを持って、零に斬りかかる。

「ああん？」

それをひらり、とかわされ背中を斬られる。

「何なのあれ！？」

デュナメスはビームピストルを2丁をだして撃つが、かわされて間合いを詰められる。

「雑魚はさっさと死ねえ！」

ビームピストルが破壊されて、装甲もぼろぼろになるまで斬られた。

「ちっ、こんなもんならまだ昨日のほうがましだったな。まあ、1回死ねやあ！」

『蓮！』

「ああん？」

刀を振り下ろそうとしたとき、突然通信がはいり、デュナメス、キウリオス、ナドレは撤退した。

「ちっ、逃がしたか。後は任せるぜ、蓮」

「待て、貴様！」

『帰ろうぜ。蓮』

「何しに来た」

『なにしにって、お前を連れ戻しに来た』

と、聞いて蓮は紅桜を握らしめた。

「……………言っただ。邪魔をするなら、お前たちを殺すと」  
蓮は瞬時加速で間合いを詰め、斬りかかる。

『何しやる』

「俺の邪魔をするからだ」

『ふざけるな!』

一夏は雪羅のクローで攻撃するが、避けられてしまう。

「だったら、俺を殺してみろ。その刀で斬り殺せ! 己のエゴで斬れ  
! 無慈悲なまでに!」  
ゆきひら

『俺は……誰も殺さない』

「わかった……だったらこうする」

蓮はツインバスターライフルを展開して銃口を――

『逃げろ、箒!』

箒に向けた。

「死ね」





「超兵を殺すのが俺の使命だ」

「それがこれか？」

千冬は封筒を見せる。

「お前のことだ。周りに迷惑をかけると思ってのこれだろ？」

「では、織斑達に向けての攻撃の意図は？」

「周りから自分を避けさせようと考えたのだろう。まあ、あいつらは仲間をそう簡単に見捨てない」

「仲間……」

「これは受け取らない。あいつらに説明するのが面倒だからな」

千冬は蓮の前で退学届けを破った。

「監視のためか？」

「いいや。お前は貴重な戦力だからな。保護だ」

そう言って千冬は椅子から立ち上がる。

「それから、私たちは姉弟だ。そのことは、忘れるなよ」

と、言って千冬は保健室を出て行った。

### 31話 自宅訪問

「……………」

翌日。蓮は朝からずっと学園の屋上にいた。時刻は11時を過ぎていた。

「……なんのようだ。ブリュンヒルデ」

「その名で呼ぶな。お前にこれを渡しにきた」

と言って千冬は、ポケットの中から青いブレスレットを出す。

「エクシアの待機状態だ。お前が持っていたほうがいいと思ってな」

そう言って千冬は、それを蓮に渡した。

「あと。たまには家に帰ってこい。家族なのだからな」

と言って千冬は、蓮の前から立ち去った。

「家族……」

と呟きながら、ブレスレットを見る。突然なにか思いつき、ゼロを展開して飛び立った。

「♪」

ここは篠ノ之束の秘密ラボ。この場所を知っているのはほんの数人しかない。そのラボに蓮は来た。

「やあ、れつくん。君が直接束さんのところに来るなんて、珍しいね」

「これをゼロに組み込んでほしい」

と言って出したのは、エクシアのコアだった。

「いいよ。しばらくゼロを預かるね」

「頼む」

と言って蓮はラボを出て行った。

蓮SIDE OUT

シャルロットSIDE

数日後

「あら。奇遇ですわね。シャルロットさん」

「うん。奇遇だね。セシリア」

今2人がいるのは、一夏の家の前にいる。

「あれ、シャルロットとセシリアか？どうした」

「えっ!？」

いきなり後ろから声をかけられ、振り向く。

そこには、ホームセンターの買い物袋を下げた一夏が立っていた。

「ど、どうも。ご機嫌いかがかしら、一夏さん。ちょうど近くを通りかかったので、少し様子を見に来ましたの」

「一夏。蓮いるかな？」

「ああ、いるぞ。まだたぶん寝てると思うけど。上がって行けよ。あんまり盛大なもてなしはできないけどな」

そして2人は一夏の家に上がった。

「しかし、来るなら来るで誰か1人ぐらい事前に連絡くれよ」

「仕方ないだろう、今朝になってヒマになったのだから」

「そうよ。それとも何？いきなり来られると困るわけ？エロいものでも隠す?」

その後他の3人が来ていつもの面々がそろって、今は昼食を取っている。結局大人数になってしまったため、昼食は簡単に作れるざるそばになった。

「わ、わたくしは、ケーキ屋さんに寄っていて忙しかったので」

「ご、ごめんね。うっかりしちゃってて」

「ちなみに私は突然やってきて驚かせてやろうと思ったのだ。どうだ、うれしいだろう」

そばつゆに次の麺をいれながら、しれっとラウラがそう告げる。

（この自信が時に羨ましい……）

と全く同時に思った4人だった。

「それで、この後はどうしたもんかな。うちはあんまりみんなで遊べるものとかないぞ」

「まー、そういうだろうと思って、あたしが用意してきてあげたわよ。はい」

そう言って鈴がよこした紙袋には、トランプから花札、モノポリーに人生ゲーム、その他様々なカードゲームとボードゲームが溢れていた。

「じゃ、全員でやれそうなやつから行くか」

そうやって一夏が取り出したのは、バルバロッサという名前のゲームだった。

「ほう、我がドイツのゲームだな」

ドイツ国旗を見つけたラウラが腕組みをしながら少し嬉しそうにする。その時にドアが開いた。

「なぜお前たちがいる」

「あ、蓮起きたか。昼飯作ろうか？」

「必要ない」

と言って冷蔵庫から取り出したのは、『十秒チャージ』だった。

「おい、お前昨日もそれじゃなかったか？」

「気にするな」

『気にしろよ！』と全員が心の中で叫んだ。

「みんな」

「」「」「了解！」「」「」

「？」

部屋に戻ろうと、リビングのドアを開こうとした瞬間、蓮は全員に後ろに引っ張られ椅子に座らされた。

「なんのつもりだ」

「せっかくだし、ゲームでもしようと思ってな」

「勝手にしろ」

一通りゲームの内容を説明し、経験者である鈴と一夏は最初説明役に回るということで、ゲームが始まった。

こねこねこねこね……。

「できたっ」

「それじゃ、スタートね」

シャルロットからサイコロを振り、ゲームが開始される。

「えーと、1、2、3、と」

「あ、宝石を得ましたわ」

「私は……質問マスか。よし、ではラウラの粘土に質問するぞ」

「受けて立とう」

「ちなみに回答は『はい』『いいえ』『わからない』よ。『いいえ』を出されるまで質問できるから、最初は大分類ではじめるとお得ね」

鈴の説明を聞きながら、ふむふむと箒がうなづく。



ラウラの粘土は『ゴゴゴゴ……』と静かな威圧を放っているような円錐状のなにかで、まったく見当が付かない。

「それは地上にあるものか？」

「うむ」

「よし……では、それは人間より大きいか？」

「そうだ」

ということは、道具の類ではない。しかし、人間より大きいということかなり限定されてくるはずなのだが、まだ全員がわからなかった。

「それは都会にあるものか？」

「どちらともいえないな。あると言えばあるが、ないと言えない」

この答えでさらに全員が頭を悩ませた。特に、ほぼ全員が東京タワーだと思っていたので、この回答は混乱しか生まなかった。

「人間の作ったものか？」

「ノーだ」

「はい、質問終了。箒はこのまま回答もできるけど、する？」

「う、うむ。そうだな。外しても失点はないようだし答えよう」

「じゃ、答えをどうぞ」

「油田だ！」

ずびしっ！物体を差して筭が答える。

「違う」

がくっとうなだれる筭だったが、蓮を含め全員が『なぜ油田？』と筭の回答にもちんぷんかんぷんの顔をするのだった。

そんなこんなでゲームは進み、中盤を過ぎる。

「そろそろ正解しないと、当てられた人も得点入らないわよ」

ちなみにシャルロットの作った馬と、蓮のツインバスターライフルはすぐに当てられてしまい、本人に得点は入らなかった。蓮の造形は完璧なのだが、『なぜツインバスターライフル？』と全員が気になっていた。このあたりの進行時点での正解による得点がバルバロッサの特徴であり、ベストなのは『そう言われればそう見えるような』造形である。中盤で正解されることにより、正解者だけでなく制作者にも得点が入るというルールなのだ。

残りは、ラウラとセシリアで、筭が作った『井戸』はシャルロットの質問がうまかったこともあり、ベストタイミングで正解している。問題なのは、ラウラの謎の円錐物体、セシリアの謎の細胞体のようなもの二強だった。

「そ、それは、食べ物？」

「違いますわ」

「それは、生物か？」

「違いますわ」

「それはビルより小さいのか？」

「いや、巨大だ」

すでに自分の粘土が当てられている蓮と箒とシャルロットは、とにかくラウラとセシリアが何を作ったのかを必死で考えては質問をするが、かすりもしない。

そうこうしていて、とりあえずお試しのゲームは終了となった。

「で、ラウラ、これはなんなんだ？」

ずっと訊きたくて仕方なかった一夏が早速口を開く。

「何？ わからんのか。嫁失格だぞ」

「いやまあ、それはいいから。答えは？」

「山だ」

.....。

「は？」

「山だ」

二回、同じ言葉を繰り返すラウラ。

「いやいや待て待て！こんな山は尖ってないだろ！」

「むっ……。失礼なことを言うやつだな。エベレストなどはこんな感じだろう」

「それならエベレストに特定しねーとわかんねーって！」

「エベレスト以外にもこういう山はある」

あくまでも自分の粘土に間違いはないというラウラは、腕組みを崩さない。

「ま、まあ。ラウラ、正解されなかったから減点ね。それで、セシリアのは？」

「あら。誰もわからないのかしら？」

わかっていたら正解してるっつの、という言葉を一夏と鈴は飲み込む。

セシリアはもったいつけるように全員を一瞥して、それから右手を広げて大々的に言った。

「わが祖国、イギリスですわ！」

「「「「「……………」」」」」」

全員が沈黙。ちなみにこれまでの回答一覧は『潰れたジャガイモ』『原初細胞体』『ぐちゃくちゃのピザ』『藻』『ボロ布』『ケガをした犬』『ジャンプ中の猫』。

「まったくみなさんの不勉強には驚きますわ。一日一回世界地図を見ることをおすすめます」

『イギリスの形を知らないわけじゃねーよ!』とは、全員が言いたい反論だったが、黙っていることにした。ラウラ以上に自分の造形物に自信満々のセシリアを見ると、逆にそんなツツコミは野暮だと言う発想まで出てくるから不思議である。

「ま、まあ! 大体のルールはわかったでしょ! じゃ、次からはあたと一夏も入って全員でやるわよ」

二回戦が開始された。

「わかった、カマボコだ」

「ちがうわよ! しつつれーね、あんたは」

「ラウラのそれ、人……?」

「違う。なぜわからん。完璧な造形だぞ」

「今度こそわかったぞ、セシリアのはトマトだな?」

「箒さん、これがトマトに見えますの?」

わいわいと騒ぎつつ、楽しい時間はあっという間に過ぎていく。そして時刻が4時を過ぎたところで、唐突に予想外の人物がやってきた。

「なんだ、賑やかだと思ったらお前たちか」

織斑千冬、その人である。

私服姿は白いワイシャツにジーパンという行動的な人柄をよくあらわしているそれで、服の下では黒いタンクトップが豊満な胸を窮屈そうに押し込めていた。

「千冬姉、おかえり」

「ああ、ただいま」

すぐさま一夏は立ち上がって、千冬の側に行く。右肩のカバンを受け取ってかたづける様子は、執事かなにかのようですらある。

「昼は食べた？まだなら何か作るけど、リクエストある？」

「バカ、何時だと思っている。さすがに食べたぞ」

「そっか。あ、お茶でもいいだろうか？熱いのと冷たいのどっちがいい？」

「そうだな。外から戻ったばかりだし、冷たいのでも――」

と、そこまで言う前から千冬はふと気がつく。教え子のどうにも圧迫された雰囲気と、一夏の世話を羨ましそうに眺める視線とに。

「……いやいい。すぐに出る。仕事だ」

「え？そうなんだ。朝に作ったコーヒージェリー、そろそろ食べれるのに」

「また今度もらうさ。では、着替えてくる。ああ、蓮。あいつからだ」

ポケットから何かを出し、蓮に投げる。

「……ゼロ……」

千冬が渡したのは、待機状態のゼロだった。

「用事ができた。学園に戻る」

「え？それってどういう――」

聞く前に蓮は家を出る。

「蓮」

蓮のあとを追うと、ゼロを展開して飛び去る蓮の姿だった。光の粒子を放出しながら。

シャルロットSIDE OUT

蓮SIDE

ゼロで直接学園に戻った蓮は着替えて、第一整備室にいる。

（今はGN粒子が常時散布状態だが、これだとIS委員会にかぎつけられる。だとしたら任意で散布させるでもいいだろう。それにゼロ・フィールドは調整すればエネルギー消費量が抑えられるだろう。後はあれの量子変換だな）

と考えながら、ゼロの設定を変更していく。すべての作業が終了したのは六時だった。

蓮SIDE OUT

???  
SIDE

「――以上が、織斑一夏と西城蓮の報告になります」

薄暗い部屋、3人の女がテーブルを囲んでいる。

2人は席に着き、中央の1人は立っていた。それはさながら王に仕える忠臣のようで、室内には厳かな緊張感が横たわっていた。

「そろそろ動くべきかしらね」

中心の女がつぶやく。しかし、その声は透き通り澄み渡っていて、小声であってもしっかりと2人の耳に届いた。

「正直、この件に関しては、対応が遅すぎる気がします」

「各方面からの苦情も相当数……。もう、待つべきではないかと……」

じっと、王の言葉を待つ忠臣は、その視線を一度テーブルへと移す。室内の3人は、本年度の新入生の専用気持ちの多さ、完全なるイレギュラーの存在、そして福音事件時の男子生徒の暴走と謎のIS、その本格的な対応を迫られているのだった。

「……ふむ」



窓の外を眺めていた王が、くるりと身を翻す。

「決めたわ。そろそろ動き出しましょう。我らが我らであるために」

「では!？」

「近く、機を窺って接触します。あなたたちはバックアップを」

「りよ、了解しました!」

「承知……」

くすりと、王は笑みを浮かべる。

それはさながら獲物を見つけた猛禽類のようで。  
それはさながら冷徹なる氷河の女王のようで。

——ぞくり、と。

ぞくぞく、とさせる。

見るものを魅了して止まない、そんな笑みだった。

「覚悟してもらいましょう。織斑一夏、西城蓮」

満月を背に、女は微笑む。

ばちん、と扇子を閉じる音が静かに、しかし確かに響いた――。

??? SIDE OUT

### 32話 学園最強

蓮SIDE

「フアング！」

ガギインッ！と剣と剣がぶつかり合う音を響かせ、蓮対一夏、箒、セシリア、鈴、シャルロット、ラウラの試合が行われていた。数では、蓮が圧倒的に不利ではあるが、そこは超兵の実力で6人を圧倒している。

「くっ……！」

箒がフアングに翻弄され隙ができた。

「！？しまった」

「遅い」

気付いた時にはすでに遅く、ツインバスターライフルの餌食になった。

「あと五機」

「隙あり！」

突然後ろから、鈴が衝撃砲を撃ってきた。

「ゼロ・フィールド」

「え!？」

鈴が撃った衝撃砲はゼロ・フィールドで相殺され、鈴の後ろにまわり、ツインバスターライフルを撃ち、甲龍のエネルギーは尽きた。

「あと四機」

次に蓮が標的にしたのは、セシリアだった。ブルー・ティアーズのビットはすでに全部破壊されていた。

「くっ……!」

ブルー・ティアーズのライフルが破壊され、近接ブレードを展開する。

「はああああっ!!」

近接ブレードを持って突っ込んできたが、それをビームサーベルで受け流し、シューティングモードのファングの乱射で、ブルー・ティアーズのエネルギーが尽きた。

「あと三機」

残りは一夏とシャルロットとラウラだけとなった。

「ターゲット、ロックオン」

ツインバスターライフルの銃口を一夏に向ける。エネルギーチャージが終わり、ファングを一夏から離れさせる。一夏は驚いたようだ

が、お構いなしにツインバスターライフルを撃つ。

「そんなの、この雪羅なら」

一夏は、左手の雪羅をシールドモードに切り替え相殺していく。

「無駄だ」

「なに？」

一夏から離れさせたファングを一夏の後ろに移動させ、撃つ。蓮は一夏が雪羅で止めることを予想していた。程なくして白式のエネルギーギアが尽きた。

「あと二機。これで終わらせる……バーストモード——発動」

シールドエネルギーが一気に1まで減り、機体に赤いオーラを纏いシャルロットとラウラへ直進する。

「「!」？」

二人は蓮が来たことに気づき、すぐさま蓮から距離をとる。

「なんだあれは？」

「速すぎる」

ラウラはゼロの単一仕様能力を見たことがなかったため、驚いていた。

「行くぞ……」

「「!」?」

蓮が二人の間を通りすぎると同時に試合終了を告げるアラームが鳴り響いた。

この試合の勝者は蓮だった。

「くそー、なんで勝てないんだ?」

「あいつの前ではどんな作戦も通用しないということだろう」

前半戦と後半戦ともに一夏たちの敗北で幕を閉じた実戦訓練。その後片付けを終えて、いつもの面々は食堂に来ていた。

「しかしなんで蓮はあんなに強いんだ?」

「あいつは実戦なれしている。私以上に」

そして食事を進めるといつの間にか誰が一夏とペアを組むかの話しになっていた。

「あ。蓮、一緒に食べようぜ」

「……………」

一夏の呼びかけを無視して、蓮はべつのテーブルに着き食事を始めた。そこにシャルロットが近づいた。

「蓮、隣いい？」

「……勝手にしろ」

といって、食事を再開した。

それから十分ほどが過ぎて昼食が終わり、午後の実習に向けて再度アリーナへと向かった。

「やっぱり無駄に広いもんだ……」

蓮と一夏専用となっているロッカールームは、ただ静かだった。

一夏はISスーツを着替えると、白式のコンソールを呼び出して調整をはじめた。

「!？」

蓮が何かに気づき、後ろを振り向く。

「どうした」

「……………」

蓮は一夏を無視してあたりを見渡す。

「ここに居ることはわかっている。出て来い」

「……………」

といっても誰も出てこないと思ったら、誰かが出てきた。

「さすがだね。西城蓮くん」

蓮と一夏も知らない女子だった。

「んふふ」

（こいつ何者だ？リボンの色が二年。それにデータで見た気がする。確か――）

「それじゃあね。キミたちも急がないと、織斑先生に怒られるよ」

「え？」

二人は嫌な予感がして壁の時計を見る。……すでに授業開始から三分が過ぎていた。

「だあああっ！？や、やばい！まずい！」

そして蓮と一夏は全力で走った。

「……遅刻の言い訳は以上か？」

千冬が蓮と一夏を睨み付けている。

「いや、あの……あのですね？だから見知らぬ女子生徒が――」

「ではその女子の名前を言ってみろ」

「だ、だから！初対面の女子との会話を優先して、授業に遅れたのか」

「ち、違っ――」

しかし、そこに一夏の言葉が入り込む余地はない。ちなみに蓮はすでに諦めていた。

「デュノア、ラピッド・スイッチの実演をしろ。的はこいつらで構わん」

「……………」

「それじゃあ織斑先生、実演をはじめます」

「おう」

蓮の隣の一夏は何か期待していたようだが、絶望していた。



ふわりと空中へと進み出るシャルロット。その手に光の粒子が集まり、銃器を構成していく。

「あ、あの、シャル……ロット、さん」

「なになぁ？」

「織斑、ISを展開しろ」

「え？」

「はじめるよ、リヴァイヴ」

「ま、待つ——」

バラバラララッ！！

シャルロットが撃つと同時に、蓮はゼロを展開してゼロ・フィールドで防いだ。その隣では、一夏の悲鳴が聞こえた。

翌日。HRと一限目を使つての全校集会が行われた。内容は、今月行われる学園祭についてである。全校集会の名前の通り、全校生徒が集まっている。女子の数が半端なく、やっぱり騒がしい。

「それでは、生徒会長から説明させていただきます」

そう言った生徒会役員の一人。その声で、騒がしかったのがシーンとなる。

「やあみんな。おはよう」

「っ!？」

壇上に立つ生徒を見て唖然とする。

昨日、ロッカールームで会った生徒だったから。

声をあげそうになったが、何とか堪えてその人に視線を送る。

「ふふっ」

一瞬目が合い、笑みを浮かべる。

それを無視しながら会長の言葉を聞く。

「さてさて、今年は色々と立て込んでちゃんとした挨拶がまだだったね。私の名前は更識楯無。生徒の長よ。よろしくー」

微笑む生徒会長に、あちこちから熱っぽいため息が漏れた。

「では、今月の一大イベント学園祭だけど、今回に限り特別ルールを導入するわ」

扇子を取りだし、横へとスライド。それにあわせて、空間投影ディスプレイが浮かび上がる。

「その内容は、『各部対抗織斑一夏、西城蓮争奪戦』！」

ぱんっ！と小気味のいい音を立てて、扇子が開く。そして、ディスプレイに一夏と蓮の写真が写し出された。

「はあああ！？」

「ええええええええ！？」

一夏の叫びは、生徒達の叫びによりかきけされた。そして、一斉に一夏と蓮へと視線が集まる。

「静かに。学園祭では毎年各部活動ごとの催し物を出し、それに対して投票を行って、上位組は部費に特別助成金が出る仕組みでした。しかし、今回はそれではつまらないと思い」

扇子で二人を指す楯無。

「織斑一夏と西城蓮を、一位の部活動に強制入部させましょう！」

「おおおおお！」

「素晴らしい、素晴らしいわ！」

「こうなったら、やってやるわ！」

「今日からすぐに準備をはじめるわよ」

（このままだと面倒だ）

と思い、ゼロを展開して瞬時加速で楯無の真横でビームサーベルを

向ける。

「今すぐ撤回しろ」

「残念。生徒会長権限」

「ならば、お前を殺す」

ビームサーベルを振り楯無を斬った。悲鳴が聞こえるが無視する。

「……偽物か」

「ご名答。水で作った偽物よ」

その余裕を感じさせる声は、蓮の上から聞こえた。

「「……………」」

お互い武器を構えて、戦闘態勢にはいる。

「馬鹿者ども戦闘をするならアリーナでしろ」

それを見かねた千冬の声が二人を止めた。

「じゃあ、第一アリーナで」

「了解」

二人はISを解除して、第一アリーナに向かった。

「……………」

お互いの準備を終わらせ、向き合っている。観客席は全席満員。それどころか通路まで立って見ている生徒で埋め尽くされていた。楯無の機体はアーマーの面積が全体的に狭く小さい。

だが、それをカバーするように透明の液状のフィールドが形成されていて、まるで水のドレスのようだった。

そしてアクア・クリスタルと呼ばれるそのからも同じく水のヴェールが展開され、大きなマントのように楯無を包み込んでいる。

『それでは両者、試合を開始してください』

ビーツと鳴り響くブザー、それが切られる瞬間に蓮と楯無は動いた。

「なかなか早いわね。驚いたわ」

「それにしては余裕だな」

蓮はランスを弾き、腹部を蹴り距離をとる。

「フアング！」

蓮はフアングを六機をサーベルモードにして、楯無に向かわせるが、水のヴェールに入った瞬間に勢いを失い、水に捕らえられて止まっていた。

「ただの水ではない」

「そう。この水はISのエネルギーを伝達するナノマシンによって制御しているのよ。すごいでしょ？」

「どうでもいい」

残り六機をシューティングモードで牽制して、蓮は瞬時加速で楯無の背後にまわり、ツインバスターライフルを撃つ。

「甘いわ」

「チッ……！」

いつもの相手なら通用する戦術だが、簡単に避けられてしまった。

「学園最強も伊達ではないようだな」

「そういうこと」

「ならば少し本気を出す」

蓮は右手のアーマーを部分解除して、リミッターを1つ外す。

「Wing System……機動」

蓮の背中から一對の黒いエネルギー翼が現れた。

「それがWing Systemね。初めて見たわ」

「ゼロよ……俺を導いてくれ」

ゼロの胸部にある緑色の球体が輝き瞬時加速で、接近して紅桜で楯無を斬った。

「また、偽物か……無駄だ」

「!？」

今度は蓮の真後ろで、ランスでなぎ払うつもりだったが、紅桜で止められてしまう。

「ゼロが未来を見せている以上、お前に勝利はない」

「でもそのシステムは時間制限があるでしょ？」

楯無のランスは四連装ガトリング・ガンが内臓していて、近距離で撃つ。

「無駄だ」

しかしそれはシステムを通じて、見切っており回避し左手にビームサーベルを持ち、斬り続ける。

残像ができるほどのスピードの斬撃を楯無は、ランスで受けては逸らす、擦ったりする。斬撃が受け止められた瞬間に蓮は、エネルギー弾を撃った。

「……避けたか」

爆発による煙が晴れると、楯無は後方に引いていた。

——ゼロシステム制限時間に到達。システムを停止します——

「ねえ、西城くん。この部屋暑くない？」

「だからどうした」

「まあ、人の話は最後まで聞くものよ。今この部屋は、湿度が高いでしょう？」

「……何が言いたい？」

「つまり……こういう事よ」

瞬間、蓮の周りの空間が……

「チッ！」

「遅いわ」

爆発した。

「これで……倒せたかしら」



ISから伝達されたエネルギーを霧を構成するナノマシンが一斉に熱に転換し、対象物を爆破する能力『清き熱情』クリア・パッション。この一撃で、確かに仕留めた――

「やってくれる」

はずだった。

「……そういう西城くんも、何故倒れてないのかしら？」

「俺はただ翼で自分を包んだだけだ。もともとこの翼は防御に使うものだ。俺のは特別だがな」

（このまま持久戦で行くのは危険か？）

エネルギー残量は蓮の方が多いと思われるが、楯無の実力から考えると何か切り札がある可能性がある。

（ならば奴が切り札を使う前に仕留める）

「バーストモード――発動」

シールドエネルギーが一気に1まで減り、機体に赤いオーラを纏う。

「エネルギーを1まで、消費し4分間ISの機動力と武器の威力を、5倍にするだっけ？ 一撃入れば私の勝ちね」

「無駄だ」

蓮の声が聞こえるのは楯無の真後ろだった。

「すでにお前の負けだ」

「え？」

『試合終了。勝者――西城蓮』

アナウンスと同時に、歓声が聞こえた。後ろの楯無は呆然と立ち尽くしていた。

この日、最年少の生徒会長が誕生した。

### 33話 生徒会

同日、教室にて放課後の特別HR。今はクラスごとの出し物を決めるため、わいのわいのと盛り上がっていた。

「「却下／ふざけるな」」

えええええー！！と大音量のブーイングが響く。

その内容は

織斑一夏と西城蓮のホストクラブ

織斑一夏か西城蓮とツイスター

織斑一夏か西城蓮とポッキー遊び

織斑一夏か西城蓮と王様ゲーム

「あ、アホか！誰が嬉しいんだ、こんなもん！」

「ましな意見はないのか」

「メイド喫茶はどうだ」

そう言ってきたのは、なんとラウラだった。

「客受けはいいだろう。それに、飲食店は経費の回収が行える。

確か、招待券制で外部からも入れるのだろうか？それなら、休憩場としての需要も少なからずあるはずだ」

いつもと同じ淡々とした口調だったが、キャラに合わない。

「いいんじゃないかな？一夏と蓮には執事か厨房を担当してもら

えばオーケーだね」

「織斑君、執事！　いい！」

「それでそれで！」

「メイド服はどうするの！？　私、演劇部衣装係だから縫えるけど！」

「メイド服ならツテがある。　執事服も含めて貸してもらえるか聞いてみよう」

またも意外なラウラ。クラス全員が目丸くする。そして咳払いをする。

「——ごほん。　シャルロットが、な」

いきなり振られたシャルロットは困った顔をしていた。

「え、えっと、ラウラ？　それって、先月の……？」

「うむ」

「き、訊いてみるだけ訊いてみるけど、無理でも怒らないでね」

不安そうに告げるシャルロットに、クラスの女子は『怒りませんとも』と断言する。

かくして、一年一組の出し物はメイド喫茶改め『ご奉仕喫茶』に決まった。

「やあ」

「……………」

報告のために職員室にいたのだが、そこから出たら一人の女子と蓮が待っていた。

それは元生徒会長の更識楯無だった。

「……何か？」

「ん？ どうして警戒しているのかな？」

「そえれを言わせますか……」

遅刻騒動といい、学園祭騒動といい、騒ぎの元凶である楯無は涼しげな顔で一夏を楽しそうに眺めていた。

「ああ、最初の出会いでインパクトがないと、忘れられると思って」

「忘れませんよ、別に」

「織斑ついてこい」

先に蓮が歩き出し、その後ろを楯無と一夏がついていく。

「織斑、今日から更識がお前のコーチを勤めることになる」

「なんで？」

「そいつは元だが生徒会長だ」

「はい？」

「織斑くん。生徒会長という肩書きは一つの事実を証明しているんだよね」

ちやうど楯無が言葉が続けようとしたところで、前方から粉塵をあげる勢いの女子が竹刀を両手に襲い掛かってきた。

「覚悟おとおおっ！！」

「なっ……！！？」

蓮は、竹刀を避けて、回し蹴りを叩き込む。  
女子が壁にぶつかり気を失うのと同時に、今度は窓ガラスが破裂した。

「こ、今度はなんだ！？」

蓮の顔面を狙い、次々と矢が飛んでくる。見ると、隣の校舎の窓から和弓を射る袴姿の女子が見えた。

「借りるぞ」

倒れている女子の側にあった竹刀二本を蹴り上げて浮かせ、空中のそれをキャッチすると同時に片方を投げる。

割れたガラスから投擲されたそれはスコーンと弓女の眉間に当たり、撃破した。

「全ての生徒の長たる存在は――」もらったああああ！」

バンッ！と廊下の掃除用具ロッカーの内側から、三人目の刺客が現れる。

その両手にはボクシンググローブが装着されていて、軽やかなフットワークとともに体重を乗せたパンチで襲いかかってきた。

「最強であることだ」

蓮はボクシング女の初撃を避けて、竹刀を振りロッカーへ叩き込まれ沈黙した。

「まあ、簡単に説明するとだね、最強である生徒会長はいつでも襲っているのさ。そして勝ったなら、その者が生徒会長になる」

「はあ……、無茶苦茶ですね」

「うーん、それにしても西城くんが就任するまで、襲撃はほとんどなかったんだけどなあ。やっぱりこれは」

ずいっと一夏に詰め寄り、顔を近づける。

「キミのせいかな？」

「な、なんでですか」

「ん？ほら、今月の学園祭でキミを景品にしたから、一位を取れな

さそうな運動部とか格闘系が実力行使に出たんでしょう。西城くんを失脚させて景品をキャンセル、ついでにキミを手に入れる、とかね」

まあ憶測だけどね、と言葉を足すが、当たっている気がした。

「着いたぞ」

蓮が連れてきたのは、生徒会室だった。

「ただいま」

「おかえりなさい、会長、会長代理」

出迎えたのは三年生の女子だった。眼鏡に三つ編み、いかにも『お堅いが仕事はできる』風の人で、片手に持ったファイルが非常によく似合っている。

「わー……。おりむーだー……」

「まあ、そこになけなさいな。お茶はすぐに出すわ」

「は、はあ……」

なぜかいつもよりも眠たそうな布仏本音。一夏を見つけて三センチほど上げた顔をまたテーブルに戻す。

「お客様の前よ。しっかりしなさい」

「無理……。眠……。帰宅……。いい……。？」



「ダメよ」

最後の希望とばかりに単語だけの言葉で尋ねたが、三年生の無情な回答に崩れ落ちた。

「えーと、のほほんさん？ 眠いの？」

「うん……。 深夜……。 壁紙……。 收拾……。 連日……」

「う、うん？」

「あら、あだ名だなんて、仲いいのね」

「あー、いや、その……。 本名知らないんで……」

「ええー！？」

がばりっ、と本音が初めて聞く大声で起き上がる。

「ひどい、ずっと私をあだ名で呼ぶからてっきり好きなんだと思ってた……。 ……」

「いや、その……。 ごめん」

さすがにひどかったなと思い頭を下げると、ちょうどそこにティーカップを持ってきた三年生が口を挟む。

「本音、嘘をつくのはやめなさい」

「てひひ、バレた。わかったよー、お姉ちゃん」

「お姉ちゃん？」

「ええ。私は布仏虚。妹は本音」

「むかーしから、更識家のお手伝いさんなんだよー。うちは、代々ちようどお茶ができたらしく、カップの一つ一つに虚は注いでいく。

「会長、お茶は」

「後でいい。前の会長がためていた書類を片付ける」

それを聞いて、楯無はビクツとした。

「あれ？お前眼鏡してたか？」

「仕事の時だけだ。更識、説明しろ」

と言って、仕事を続け、他の生徒会メンバーの三人が一夏に向き合う。

「最初から説明するわね。一夏くんが部活動に入らないことで色々苦情が寄せられていてね。生徒会はキミをどこかに入部させないとまずいことになっちゃったのよ」

「それで学園祭の投票決戦ですか……」

「でね、交換条件としてこれから学園祭の間まで私が特別に鍛えて

あげましょう。ISも、生身もね」

「遠慮します。どうして指導してくれるんですか？」

「ん？それは簡単。キミが弱いからだよ」

あまりにあっさりと言われて、一夏は一瞬何を言われたのかわからなかった。

「それなりに弱くはないつもりですが」

「「弱い／よ」」

蓮と楯無の見事なユニゾンで、一夏はガツクリとした。

「だから、ちよつとでもマシになるように私が鍛えてあげようというお話」

「じゃあ、勝負しましょう。俺が負けたら従います」

「うん、いいよ」

にやりと笑った楯無の顔は『畏にかかった』という表情をして、蓮は「バカが……」とボソリとつぶやいた。

### 34話 一夏の衰弱

結果、楯無との勝負は一夏の敗北として幕を閉じた。

一夏と同室にしたが、なぜかここ数日の一夏の疲労が相当溜まっていた。

「更識、織斑の疲労が相当溜まっている。これ以上は黙認しかねる。お前を織斑と同室にした意味をわかっているだろうな」

「ええ、わかっているわ。一夏くんを守れでしょ？」

「わかっているならいい」

楯無を一夏と同室にした理由は、一夏を守るためだ。夏休み中にシヤルロットがさらわれたことがあったため、念のために一夏の警護を兼ねて同室にしている。

「会長、少しは休憩をしてください」

「そうします。更識、しばらく任せる」

「どこにいくの？」

「食堂だ」

と言って蓮は生徒会室を出て行った。

〈蓮SIDE OUT〉

「一夏SIDE」

「あゝ……」

べちゃりとテーブルに突っ伏している一夏を、いつもの面々が苦笑いで眺めている。

今は寮食堂で夕食の時間なのだが、今の一夏のは食欲がない。ここ数日、楯無にペースを乱されっぱなしで、疲労がすごかった。

「一夏、お疲れ様」

「おー……シャルロットか……」

「お茶飲む？ごはん食べられないなら、せめてそれだけでも」

「おう……サンキュ……」

とりあえず一口だけでもと顔を起こす。

みんな、それぞれに夕飯を食べていて、メニューもなかなかうまそうだった。

「それで、あの女はどうしたのだ？」

少しぴりぴりとした様子でラウラが言う。どうも、あの日の敗北以来機嫌が悪い。

「一夏。あの女はどうしたんだと訊いたんだ」

「更識なら今生徒会室に居る」

振り向くと、眼鏡をかけている蓮が夕飯を持っていた。

「蓮眼鏡してたっけ？」

「仕事の時だけだ」

蓮は一夏の隣に座り、夕食を食べ始める。

「蓮、なぜあの女が一夏の部屋にいるのだ」

ぴりぴりとした様子のラウラが蓮に聞く。

「織斑の警護が主な目的だ」

「なぜ警護の必要がある。IS学園は完璧なセキュリティで守られている」

「では、なぜあの時にデュノアがさらわれた？」

と言われると、ラウラは言い返せなかった。夏休みシャルロットがさらわれたあの日。IS学園のセキュリティを掻い潜って朝田は学園に侵入した。ならば超兵ならこれくらいのこととはたやすく進入できる。そう考えて楯無と同室にしたのだ。

「織斑、もし嫌なら更識を戻すが」

「ああ、頼む。じゃないといつか死ぬ」

「了解した。明日からしばらく俺と同室になるがいいな？」

「ああ」

そして、楯無との同居生活は幕を閉じた。

＼一夏SIDE OUT＼

＼蓮SIDE＼

「という訳で、明日から俺が織斑としばらく同室になる」

「なんでよ」

夕食を食べ終わり、生徒会室に戻って仕事を再開していた。

「織斑がら直接頼まれた」

「なら、仕方ないわね」

さっきから全く仕事をしない楯無が、紅茶を飲みながら言う。

「元はお前のせいだな。それで、奴らの情報は？」

蓮がそれを聞いた瞬間、生徒会室の空気が変わった。

「最近、イギリスのBT二号機『サイレント・ゼフィルス』が強奪されたそうよ」

「強奪……更識、学園祭中は織斑の行動に目をひからせておけ。奴らはおそらく学園祭中に動くはずだ。恐らく奴らの狙いは織斑か――」

「白式だって言いたいんでしょ？了解よ。それと、生徒会で出し物を決めたいんだけど」

「お前たちで決めろ」

「了解」

この時蓮は気づかなかった。この一言が面倒なことになるなど、知る余地もなかった。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1478r/>

---

IS - インフィニット・ストラトス - ～闇の翼～

2011年11月15日05時52分発行